少年の異世界戦記 〜魔法少女リリカルなのは編〜

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少年の異世界戦記　～魔法少女リリカルなのは編～

【Ｎコード】
Ｎ８９９７Ｐ

【作者名】
クロイツヴァルト

【あらすじ】
神の代行者として世界を渡る戒は次に訪れた世界で悲しみの連鎖を断ち切る為に世界に立ち向かう。※ただ単に面白くないから（主人公談）

次の世界は……（前書き）

なのはの映画を見て創作意欲が出た為にやってしまいました。
よろしくお願いします。

次の世界は……

只今、戒は神の間にいた。

神「いや～久しぶりの登場じゃな儂！」

戒『どうでもよくね？』

神「儂の扱い酷くない！？」

戒『良いから、次は何をするんだ？またテメェの趣味か何かで飛ばすんだろ？』

神「うむ。次はこれじゃ！！」

戒と話している神は懐から１つのｄｉｓｃｃａｓｅを取り出し戒に見せる。

戒『え～、「リリカルなのは」ってお前、俺に死んでこいと？』

神「神の代行たる君なら大丈夫じゃろ？」

戒『確かに、真祖や竜種の血が流れ、悪魔の頑強さを併せ持った体を持っているからな。まぁ俺としてもアレは悲しみが多すぎると思っているし、行くよ。』

神「そうか。では、今回の世界に行ってもらうに当たってサーヴァント召喚意外のあらゆる召喚魔法を使用出来る様にするぞ。」

戒『ＦＦやテイルズのって事か？』

神「勿論じゃ。」

戒『なら、頼むわ。』

神「では、行く前にお主の肉体年齢を変えんといかんのでな？」

そう言って神は手を振りかざすと戒を光が包み込み、その光が収まると肉体が九歳位になっていた。

戒『おい！糞爺、一体なにしやがる！？』

神「そうしないと彼女達と会った瞬間に怪しまれんじゃろが。」

戒『す、すまんぃ』

神「後はお主をサポートするデバイスだが…」

戒『Ｍｕｖ－Ｌｕｖに使っていたアルと８をデバイス化してくれないか？』

神「それで良いのか？」

戒『長い間連れ添った相棒達だからな。』

神「あい分かった。」

そして戒の左腕に黒色の白の宝石がはめ込まれたブレスレットで首には十字架で中心に黒い宝石がはめ込まれたアクセサリーが姿を現す。

アル＞お久しぶりですね？マスター。＜

８［久しぶりすぎだと思うがな？］

戒『相変わらずの様だな。また、これからも頼むな？』

アル＞マスターがそれを望むのなら。＜

８［で、俺達で戦う時のＢＪはどうするんだ？］

戒『それはもう決まっている。アルの場合には（アーバレスト）をＢＪに設定。８の場合は基本はヴェルフェゴールだがＭＳ系を任意で変更して使用する。』

戒の準備が終わった所で神が近づいてきた。

神「決まったようじゃな？」

戒『あぁ。準備は出来た。今更だが、テメェの名前を聞いていいか？』

神「良かろう。我が名は時の神行（クロノス）ってこい。時の代行者よ。」

そして戒は光に包まれて神の間から消えた。

次の世界は……（後書き）

次からは海鳴市に着いた主人公が最初に遭遇するのは誰か。次回を楽しみにしてください。

出会いは突然に（前書き）

なのはは良い子にしなきゃお母さん達に迷惑をかけちゃ駄目なの。
１人ぼっちでもなのはが我慢すれば皆、なのはを誉めてくれるの。

なのはの日記から抜粋

出会いは突然に

戒達は海鳴市の近くにある山に降り立っていた。

戒『アル、今の時間は？』

アル＞只今の時間は午後の４時過ぎとなっております。＜

戒『午後４時って事は聖祥学園から帰ってくる頃って事か……』

８［いつまでも此処にいても仕方ないから早く下に行った方が良いぞ？］

戒『まぁ、確かにな。』

とりあえず海鳴市を散策する為、山を下りた。

戒『夕方だからか、判らんが商店街はかなり賑やかだな。』

アル＞（その様ですね。何か買い物でもしますか？）＜

戒『（俺は今、金持って無いけど、どうしすっかな？）』

８［（この世界での通貨はクロノスの奴から貰っているから大丈夫だ。）］

戒『（ほんとか！？どれどれ……って、ブラックカード！？ものすごいの寄越してきたな！？）』

アル＞（それとは別に現金もちゃんと用意しております。また、家の方は高町家の近隣で大きめの家になっており、マスターの家族構成は両親は事故によりすでに他界しており、孤児院に行かずに放浪していると言う設定です。）＜

戒『（かなり無茶な設定だな。）Σっと！』

商店街を通りながらアル達と念話をしていると走って来る少女に正面からぶつかる戒だが倒れずに踏みとどまるが、ぶつかって来た方は後ろに倒れそうな所で手を引っ張り、此方に引き寄せた。

戒『（アル、8、後でまた。）ごめんね？大丈夫だった？』

？？？「あ、はい！私は大丈夫です！あの君は大丈夫？」

戒『大丈夫だよ？それより急いでどうしたの？』

？？？「あっ、お母さんにお買い物を頼まれてたの！？」

戒の言葉にわたわたしだす少女を見て微笑ましく見ていた。

戒『クスっ。そうなんだ。なら、僕も手伝うよ。』

？？？「そんな、悪いよ！？」

戒『僕もこっちに来たばかりだから道を覚えるついでって事にしておいてくれ。』

？？？「う～ん、わかったの。」

戒『僕は戒、黒逸戒。君は』

なのは「わたしは、なのは高町なのは。戒君よろしくなの。」

そして戒となのははスーパーに来た。

戒『なのははお母さんに買い物で何を頼まれたの？』

なのは「えっとね、今日はお鍋にするって言ってたの。」

戒『鍋物か…。なら、野菜中心の鍋にするか。』

そう言って青果コーナーに行き白菜や茸類をカゴの中に突っ込む。

戒『後は、これに合うのは豚肉だな。』

なのは「戒君、選ぶの早すぎなの～？」

戒がさっさと食材を選別しながら歩いているその後ろを急いで追い掛ける。

戒『あっと、ごめんね？そろそろ陽が暮れそうだから少し急いじゃったね？』

なのは「戒君、お買物するの慣れ過ぎなの～？」

戒『僕は1人暮らしだからね？この位出来ないと大変だからね。』

なのは「ふぇ～、戒君は凄いの。」

戒『そんな事ないよ？なのはちゃん。とりあえず、早くお会計を済ませよう。』

なのは「わかったの。」

そして会計を済ませて店を出ると夕陽が沈み夜になりかけていた。

戒『早くしないとなのはの親が心配するね。』

なのは「なのはが遅いとお兄ちゃんが怒るなの？」

戒『じゃあ、少し急ごうか？』

そう言って戒は買い物袋を腕に通して魔力を足に流し、なのはを抱き上げて跳んだ。

なのは「ふぇぇ～？」

戒『大丈夫、なのはちゃん？』

なのは「う、うん。大丈夫なの。戒君って凄いの！」

戒『そんな事ないよ？これだって足の強化しただけだからね？それよりもお家の場所は此処から判る？』

戒の言葉になのはは家を探す為に首を動かして確認する。

なのは「あっ、あっちなの。」

なのはの指差した方向に戒は更に速度を上げ、喫茶「翠屋」の手前まで来た。

戒『此処まで来れば大丈夫だね？』

なのは「にゃ？戒君はお家に上がって行かないの？」

戒『あ～、流石に時間がな？』

なのは「む～、なのは、戒君にまだお手伝いのお礼してないの。」

戒『いや、道を覚えるのを手伝って貰ったからね？それでお相子って事で…』

？？？「なのは！？遅かったじゃない、心配したわよ？」

なのは「お母さん、ごめんなさいなの。」

？？？「ちゃんと帰って来たのだからいいのよ？それとなのはの隣にいるのは？」

戒『あっ、僕はこの近くに越してきた黒逸戒です。これからよろしくお願いします。』

桃子「あらあら、なのはと同い年なのにしっかりしてるわね？わたしはなのはの母で高町桃子よ。よろしくね？戒君。」

戒『はい。此方こそ。』

戒と桃子は互いに紹介を終え談笑をしているとなのはが桃子に話し掛ける。

なのは「お母さん！」

桃子「なに、なのは？」

なのは「なのはね？戒君にお使い手伝って貰ったの。それでね？お家でお礼がしたいの！」

戒『だから…なのはちゃん？』

桃子「あら！それは良いわね♪なのは、戒君にお家を案内してあげて。」

戒『拒否権は無いのか。』

なのは「戒君、行くなの♪」

そして、高町家に上がりリビングに桃子達と行き買い物袋を台所のダイニングに置き戒は広間のソファになのはと座りお喋りをしていると、誰かが玄関を開ける音がした。

？？？「ただいま～♪」

なのは「美由紀お姉ちゃんだ！」

戒『なのはちゃんのお姉さん？』

なのは「うん！なのはのお姉ちゃんでとっても優しいの♪恭也お兄ちゃんもなのはに優しいけどお父さんがお怪我して病院にいる様になって恭也お兄ちゃんなのはに構ってくれないの。」

なのはは嬉しそうに兄弟の事を話すが父親や兄の話しをすると少し悲しい表情をした。

戒『そうなんだ。』

なのは「でも、皆忙しいから、なのはが良い子でお留守番してれば皆に迷惑かけないで済むから、良いの。」

戒『そんな悲しい表情して言っても説得力無いよ。なのはちゃん？』

なのは「なのは悲しくないもん！」

なのはが声を上げた所為か姉の美由紀や兄の恭也がリビングに来た。

美由紀「どうしたの、なのは？」

恭也「貴様、なのはに何かしたのか！」

美由紀はなのはの心配をしたが恭也はすぐ様、戒を睨みつけ殺気を当ててきた。

戒『子供にぶつける物じゃないと思うんだけどね。』

恭也「そんな事はどうでも良い！貴様がなのはに何かしたか聞いているんだ！」

なのは「恭也お兄ちゃん！何でもないの！」

恭也「なのはは黙っていろ！」

戒『…自分が不甲斐ないからって妹にあたるのは感心しないね。』

恭也「なんだと！」

戒『あんたが無茶をしても何かが変わる訳でもないんだよ。』
恭也「知ったような口を！良いだろう。なら家の裏にある道場に来い。」
美由紀「ちょっと、恭ちゃん！？」
美由紀が制止の声を上げるが恭也は無視をして裏手にある道場に向かった。
なのは「戒君、大丈夫なの？」
戒『大丈夫だよ？なのはちゃん。ちょっとお兄さんには上には上がいるってわからせるだけだからね？』
そして恭也の後を追う為に席を立つ。
なのは「なのはも行くの！」
桃子「一体どうしたの？」
美由紀「あっ、母さん。恭ちゃんが…」
なのは「戒君と恭也お兄ちゃんが道場に行っちゃったなの。」
桃子「全く恭也はしょうがないわね。美由紀、母さんは晩御飯の支度をするから二人を連れて来てくれる？」
美由紀「うん、わかったよ。」
なのは「なのはも行くの～。」

桃子「じゃあ、なのはもお願いね？」

なのは「わかったの♪」

美由紀「ちょっと、なのは！待ちなさいよ？」

桃子に返事を返すとなのはは道場に走って行き、美由紀は慌てて追いかけて行った。

出会いは突然に（後書き）

作者「いや～勢いでやってしまったな（笑）」

戒『おい！他の話はどうなった？』

作者「いやはや、Ｍｕｖ－Ｌｕｖはアイデアが浮かばないんだよねぃ」

戒『この駄目作者が！完結せずに他の作品に手を出すな！』

作者「劇場版を見て無性に書きたくなってしまったのだよ！」

戒『とりあえず、次はあのヘタレ兄貴との対決か？』

作者「そうなんだけど、干将・白耶を使おうと思ったんだけど木刀にしようかなって迷ってたりするんだな？」

戒『まぁ、あれは子供状態じゃ少しキツい物があるからな。』

作者「だから、次の話は小太刀二刀流に木刀で挑む戒の話ですね。」

戒『兄貴をボコるのか？』

作者「そうだね～？原作でも無理してたから叩きのめそうかなってね？」

戒『まぁ、良いのか？』

作者「良いの、良いの♪戒のフルボッコで馬鹿兄貴をぶちのめした

れ。」

戒『それじゃ、次回。』

二人『「家族の大切さ」』

戒『お楽しみに♪』

家族の大切さ（前書き）

話を詰め込みすぎてかなりグダグダになってしまいましたが、ご容赦をm（　　）m

家族の大切さ

なのは達が戒達がいる道場に向かっている時、戒と恭也は既に道場に着いており、小太刀風の木刀二本を互いに構えていた。

戒『ヤるは良いけど、アンタが勝ったらどうするの？』

恭也「俺が勝ったらさっきの言葉、訂正してもらう！」

戒『俺は勝った時に決める。』

恭也「舐めるな！！」

戒の言葉を皮きりに恭也は一気に距離を詰め双剣を振るう。

戒『無駄…。』

恭也「なっ！？」

一瞬で仕留める気でいた恭也の剣を戒は瞬動を使い躱した。

戒『そこっ！』

”カンッ！！！！！”

恭也「くっ！！（動きが子供の出来る動きじゃない。）貴様、何者だ！！」

戒の動きが尋常で無い事に疑問を持った恭也は攻撃を防ぎつつ何者か問いただした。

戒『言うなれば、”真祖”…とだけ言っておきますよ。』

恭也「”真祖”だと？何を指して言っているんだ。」

戒『貴方の知り合いに似た存在…かな？』

恭也「なっ！？」

戒『隙だらけだぞ。』

”ガンッ！！”

恭也「くっ！」

一瞬の隙を見せた恭也に対して戒は木刀で恭也のもつ片方の剣を弾いた。そして恭也は弾かれた剣を取るため駆け出す。

戒『…勝負有りだな。』

恭也「まだだ！！」

”ヒュンッ”

戒『普通、子供に暗器を使うか？』

”カカッ！！”

戒が勝利宣言をした瞬間に恭也は叫び飛針を顔目掛けて投げて来たが首を軽く倒してそれを避ける。

恭也「負けられない！！俺はどんな奴にだって負けられないだ！父さんが居ない時に俺が家族を守る！強くなってこの家を守る！！そ

の為に修行して何が悪い！！」
戒『それがなのはを1人ぼっちにする結果になっていると何故気付かん！』
恭也「五月蝿い！！」
戒『なのはの事もそうだが人には言葉にしなきゃ判らない事が沢山あるんだよ！』
恭也「黙れ…」
戒『話をしたのはほんの少しだけどな、なのはは、アイツは自分が良い子にしてれば皆が笑顔でいられると信じて、困らせないようにと一切我が儘を言わないのが俺にだって判る。』
恭也「…黙れ…黙れ」
戒『長男でなのはの兄貴であるアンタが気付かないでどうするんだ！！』
恭也「黙れっーー！！！！」
戒の言葉に恭也はそれを否定するかの様に飛針を一気に投げつけて来た。
戒『避けれ…！？』
なのは「お兄ちゃん！戒君！」
戒が飛針を躱そうとした瞬間、道場の正面、ちょうど戒の真後ろに

ある引き戸が一気に開かれてなのはが二人を呼びながら入って来た。

恭也「!?なのは、危ない!!」

なのは「えっ?」

なのははは自身に向かって飛んでくる飛針に対し目を瞑って身を守る様に体を丸めるしかなかった。そして恭也もそんななのはを見たくないのか自身もあろうことか目を瞑っていた。

”ズシュッ!!””グシュッ!!””ザクッ!!”

なのは「???」

恭也「???」

なのははは来るはずの痛みが来ずに訳が判らず、恭也はなのはの悲鳴が聞こえないのを不思議に感じた。そして、二人して目を開けると信じがたい物がそこにあった。

二人「!?!?」

二人が見たのは恭也が放った飛針に襲われたなのはを庇う形で戒が守っていた事に驚いていた。恭也はその事に驚いていたが、なのははは戒が怪我をした事に驚愕していた。戒は正面から飛針を食らっている為、その場所をなのはに見せない為に顔だけをなのはに向けた。

戒『なのはちゃん、大丈夫?怪我はない?』

なのは「う、うん。大丈夫。」

戒『僕はリビングで待っててって言ったよ？』

なのは「お母さんが夕飯が出来るから二人を連れてきてって言ったから……」

戒『そうなんだ。』

美由紀「ハァハァ、なのは、少しは待ちなさいよって何があったのよ？」

戒となのはが喋っているとなのはが入って来た入り口から姉の美由紀が息を少し切らして来て1人は足元に血の池を軽く作り、なのはと恭也は少しだが放心している、そんな惨状に驚愕する。

戒『恭也さん。』

恭也「Σ！？な、なんだ。」

戒『桃子さんが呼んでいるから戻りましょう？』

美由紀「ちょっ、傷は！？」

戒『もう治りましたよ？』

戒は恭也達と会話しながら体の各所に刺さった飛針を抜いており、吸血鬼の特性でもある驚異的な治癒能力を使い、抜いた傍から傷が治っていた。

恭也「戒と言ったか。」

戒『なんです？』

恭也「その、すまない。」

戒『謝るのなら、これからはなのはちゃんを1人にしないで下さいね？』

恭也「ああ、わかった。」

戒『さて、なのはちゃん？』

なのは「にゃ？」

戒『なのはちゃんのお母さんの所に行こっか。』

なのは「うん！」

美由紀「私の出番これだけ！？」

戒となのはが道場から出て行く傍ら美由紀が若干ではあるが暗いオーラを纏っていた。

恭也「黒逸戒、か…。不思議な奴だな。」

恭也はそんな中、家族に対してあそこまで怒れる戒に感心を持っていた。

そして、リビングに向かっている戒となのはは道すがら父親の事を話していた。

戒『そっか、士郎さん…なのはのお父さんはまだ、入院しているんだ。』

なのは「うん。皆でお見舞いに行ってるんだ。だけど、お父さん、全然起きないの。」

なのはが寂しげな表情をしていると安心させる様に戒がなのはに喋る。

戒『大丈夫、なのはちゃんが一生懸命にお見舞いに行ってるんだからお父さんその内元気になって目を覚ますよ？』

なのは「ほんと？」

戒『うん。明日、皆で病院に行ってみなよ。もしかしたら、お父さん元気に起きてるかも知れないよ？』

なのは「うん！明日、お母さん達と行ってみるの！」

戒『そうだね。（アル、士郎さんの病室の場所を…）』

アル＞（既に特定済みですよ。マスター。）＜

戒『（サンキュー。）』

そして、戒達がリビングに着くとテーブルには桃子特製ハンバーグが美味しそうに湯気を立てていた。

なのは「わーい！ハンバーグだ！」

桃子「あら、なのは？戒君と恭也は？」

戒『桃子さん、僕なら此処にいますよ？』

桃子「ごめんなさいね？恭也が迷惑を掛けちゃったみたいで…」

戒『い、いえ、そんな…？』

恭也「いや、実際に俺が迷惑を掛けてしまったのは事実だ。」

美由紀「恭ちゃんはなのはの事になると周りが見えないからねぇ」

恭也「なっ！？」

戒『確かにそれはありますね。』

恭也「戒！お前まで！！」

桃子「はいはい。とにかく、ご飯にしましょう。ね？」

４人『「「「は、はい！？」」」』

また騒がしくなりそうな所を桃子さんが妙な威圧感を放ちながら４人に話し掛け、若干ビビりながらも返事をした。そしてリビングで皆で楽しく話していると、桃子が戒に幾つか質問をしてきた。

桃子「戒君、お料理は口に合ったかしら？」

戒『はい。とても美味しかったです。それに会話の方もとても楽しかったですね。』

桃子「それは良かったわ♪」

戒『時間も遅いから、そろそろ帰りますね？』

なのは「ねぇねぇ、戒君？」

戒『なに、なのはちゃん？』

なのは「戒君、このままお泊まり出来ないの？」

戒『なのはちゃん？』

なのは「なのはね？まだ戒君といっぱいお話したいの。駄目かな？」

美由紀「なのは……。」

恭也「……。」

戒『僕は良いよ？僕もなのはちゃんともっとお話がしたいからね？』

なのは「うん！」

なのはのお泊まり宣言に戒は了承するとなのはは花が咲く様に笑う。

そして、桃子がそこに爆弾を投下してきた。

桃子「なら、なのはとお話するなら同じ部屋で寝た方が良いんじゃない？」

恭、戒『「なっ！？」』

なのは「お、お母さん！？」

美由紀「はぁ～」

驚愕する3人に対して美由紀は悟った感じの溜め息をはいた。

恭也「か、母さん！いきなり何を言い出すんだよ！？」

戒『ぼ、僕もなのはちゃんと一緒の部屋は……』

なのは「なのはと一緒じゃ…いや？」

戒『ぐっ！』

桃子「（なのは、ナイス！）」

戒が桃子の申し出を断ろうとしたら、なのはが上目使いで戒を見る。子犬の様に潤むなのはの目を戒は直視した為かなりのダメージを受けた。

戒『ふぅ、判りました。なのはちゃんの部屋に泊めさせていただきます。』

桃子「ふふ、良かったわね。なのは？」

なのは「うん♪」

桃子「そうと決まれば戒君のご両親に連絡を入れないといけないわね？」

戒『あ、その必要は無いですよ？』

恭也「何故だ？」

戒『その前に…なのはちゃん？』

なのは「戒君、どうしたの？」

戒『ちょっと、先にお部屋に行っててくれる？僕は恭也さん達と少しお話してからそっちに行くからね？』

なのは「お兄ちゃん達のお話終わったら、なのはのお部屋にちゃんと来てくれる？」

戒『約束するよ。』

なのは「わかったなの。お部屋で待ってるなの。」

戒の言葉に従いなのはは二階にある自分の部屋に戻っていった。

戒『これで良いかな？』

桃子「なのはを席からわざわざ外したのには理由がありそうね？」

戒『はい。なのはちゃんにはちょっとキツい話になりますからね。』

恭也「お前の両親の事か…。」

美由紀「恭ちゃん、それってどう言う事？」

恭也「それは…」

戒『僕にはもう両親と呼べる人は居ないと言う事ですよ。』

桃子「やっぱりね。」

戒『桃子さんは気づいてましたか。』

桃子「子供を持つとね、親は子の目を見るだけでだいたいがわかる様になるのよね。」

恭也「それは母さんだけだと思うな。」

桃子「戒君の目は食事をしながら何か眩しい物を見ている感じがしたのよ？だからもしかしたらってね？」

美由紀「お母さんってやっぱり凄いよね。」

戒『僕もまさかそれだけで両親がいない事に気付かれるなんて思いませんでしたね。』

桃子「母親をやってれば大抵の人は判るものよ？」

恭也「それでか。俺の発言にあそこまで反応したのは…。」

戒『家族がいるのであればそれを一番に考えてあげるべきと僕は考えていますからね。だから恭也さんのあの発言はどうしても許せなかったんです。』

恭也「父さんが戻るまでの間は翠屋の事は俺が守るって息巻いてい

た事か。」

桃子「確かにね。恭也はどことなく家族の事、特になのはの相手をする機会が少なくなっていたものね。」

戒『僕は家族がいない物だから家族を、兄弟の事を省みない人や自分を大切にしない人が許せないんです。』

美由紀「じゃあ、恭ちゃんが良い例って事？」

恭也「美由紀…」

美由紀の言葉に恭也は少しジト目で見る。

桃子「なら、私達の養子にならない？」

戒『はい？』

美由紀「あっ！それが良いよ！ね？恭ちゃん。」

恭也「…そうだな。」

桃子の養子発言に戒は目を丸くし、恭也と美由紀は賛成を示す。

戒『ちょっ？待って下さい！』

桃子「どうしたの？」

戒『ご厚意は嬉しいのですけど…』

桃子「養子は嫌なの？」

戒『僕の我が儘になっちゃうんですけど居候と言う事に出来ませんか？』

桃子「うーん。養子の方が良いのだけど、戒君がそう言うなら居候でも良いわよ？」

戒『お願いします。』

恭也「…そろそろ部屋に行かないとなのはが待っていると思うぞ？」

戒『はい。恭也さん、美由紀さん、桃子さん、それじゃお休みなさい。』

3人「「「お休み（なさい）」」」

そして戒はなのはの部屋の前でドアノックをした。

”コンコン”

なのは「はーい。」

”ガチャ”

ノックをするとすぐになのはが出て来て戒を出迎えた。

戒『なのはちゃん、遅くなってごめんね？』

なのは「大丈夫なの。戒君早くお話するの♪」

そして、なのはと寝る時間まで街の事や学校の事など色々な話をしていた。

なのは「……」

戒『なのはちゃん眠いの？』

なのは「うん。でもね、明日には戒君お家に帰っちゃうでしょ？だからまだお話したいの。」

戒『その事なんだけど、なのはちゃんのお母さんと少しお話をしてこの家に居候する事になったから明日もお話ができるよ？』

なのは「ほんと？」

戒『うん。だから今日はもう寝よう。』

なのは「うん。じゃあ戒君もなのはと一緒に寝るの♪」

戒『ごめんね？僕は少し用事があるからそれが終わったらすぐ戻るから、なのはちゃんは先に寝てて貰えるかな？』

なのは「戒君どっか行っちゃうの？」

戒『大丈夫、直ぐに戻るよ。だから先に寝てて…ね？』

なのは「わかったなの。戒君お休み。」

戒『うん、お休みなのはちゃん。』

そしてなのはが布団に入るとすぐに寝息が聞こえてきた。

戒『さて、行くぞアル。』

アル＞了解です。マスター…。＜

なのはが寝てる傍で影の転移（ゲート）を潜り海鳴病院のなのはの父、高町士郎が眠る病室にでる。

”ピッ…ピッ…”

士郎「……」

戒『この人が士郎さんか、アル、バイタルは？』

アル＞非常に危険な状態ですが、治癒魔法とエリクサーを使えば完治出来ますね。今まで持ちこたえているのが不思議ですね。＜

戒『御神の剣士として鍛えられたからか、もしくは他の要素が在ったのかもしれないな。』

アルと会話をしながらエリクサーの用意をし、治癒魔法を施しす。

士郎「…う…。」

しばらくして士郎が目を覚ました。

戒『気が付きましたか？』

士郎「君は？」

戒『僕は黒逸戒と言います。士郎さん。』

士郎「何故、僕の名前を？」

戒『それは、貴方のご家族から聞いているからですよ。それより体の方はどうですか？』

士郎「まだ、怠い感じが抜けないって所かな。」

戒『なら、この薬を飲んで下さい。この薬はエリクサーと言って、あらゆる呪いや病を治す秘薬、もしくは霊薬と言われる物です。これを飲めば貴方なら明日にでも体力の方もいつもの感じに戻りますよ。』

そう言って先程出したフラスコの様な形状に入ったエリクサーを士郎に差し出す。

士郎「君は何故、僕にそんな貴重な物を？」

戒『まぁ、強いて言うならなのはちゃんの為…ですかね？』

士郎「なのはの？」

戒『ええ、士郎さん、貴方が事故に遭って入院している間、家族はお店の事などがありなのはちゃんはずっと1人ぼっちで寂しい思いをしているのを我慢している。そんな姿をみたくない。まぁ、僕のエゴですけどね？』

士郎「僕が寝てる間にそんな事が…」

戒『後は、お馬鹿なお兄さんが無茶な鍛錬をしていた様なので少しお灸を据えてやりましたけどね。』

戒は笑いながらそう言った。それを見て士郎は苦笑していた。

士郎「済まないね？」

戒『ただのお節介ですよ。』

士郎「それでもだよ。」

戒『家族を大事にが僕の数あるモットーの１つですからね？』

士郎「君の家族はどうしているんだい？」

戒『僕にはもう家族と呼べる人はいないです。』

戒の言葉に士郎は不味い事を聞いたと思い悲痛な顔をした。

士郎「済まない。」

戒『いえ、気にしないで下さい。』

士郎「そうだ！戒君。僕の息子にならないかい？」

士郎は桃子と同じ事を戒に聞く。

戒　『士郎さん、桃子さんと同じ事を聞くんですね？』

それを苦笑しながら戒は言う。

士郎「桃子も言ったのか？」

戒『ええ、ですけど、丁重に断らせて頂きました。』

士郎「それは何故だい？」

戒『僕の我が儘ですが、親のこの黒逸の姓が好きだからです。』

士郎「そうか、それは残念だけど仕方が無いね。」

戒の答えに士郎は残念そうな顔をして言った。

戒『でも桃子さんにも言いましたけど居候として住まわせて貰う事になりました。』

士郎「そうなのかい？」

戒『ええ、ですからこれからはよろしくお願いします。士郎さん。』

士郎「こちらこそ。戒君、これからはよろしくね？」

戒『はい。それとこの事はくれぐれも内緒にお願いします。』

士郎「わかったよ。」

戒の言葉に何かを察したのかすぐに返事を返す。

戒『明日はなのはちゃん達がお見舞いに来ると思いますので。』

士郎「それは楽しみだね。」

戒『それじゃあ僕はこれで。その薬はちゃんと飲んで下さいね？容器の方は中身が無くなれば自動的に消滅するので。』

士郎「何から何まで済まないね？」

戒『さっき言いましたけどなのはちゃんの家族が笑えるって言う単なるお節介ですよ。』

士郎「ふふ、そうだったね。」

戒『それじゃあ。また。』

そう言って床の影に沈む様に転移［ゲート］を潜って行った。

士郎「戒君か…不思議な子だな。」

”ガラガラ”

そしてエリクサーを飲んで病室の窓から景色を眺めているとナースが巡回をして士郎の病室に入って来た。

士郎「ご苦労様です。」

「！？！？先生、高町さんが起きていますーー！？」

今まで危篤状態で寝ていた士郎が戒によっては知らないが起きている事と話し掛けてきた事にナースは驚愕して叫びながら走り去った。その事で騒ぎになったが戒はこの事は知らないままであった。

士郎「（家に帰ったら留守にしていた分、なのは達と何処かに出掛けるかな？）」

ナースが走り去った後、士郎は既に帰った後の事を考えていた。

家族の大切さ（後書き）

作者「後半と言うか、士郎さんとの会話が長くなってしまいましたが、とりあえず次の話はアリサとすずかを交えたお話になります。」

戒『グダ過ぎないか？』

作者「言うな！自分でもわかっているんだから。」

戒『次はどうなるんだ？』

作者「とりあえず、無印編もだが、死ぬ筈の人なんかを生存させる方向で進めていくつもりだ。」

戒『お前の文才でいけるのか？』

作者「気力と根性！…後は読者の皆様方の感想…そして神のみぞ知る！！」

戒『後半が既に他人任せだな！！』

作者「次回！リリカルなのは［吸血鬼］をお楽しみに！！」

戒『こんな駄文だがよろしく』

作者「わかりきっているが結構傷つくな～。」

吸血鬼

士郎のいる病室から部屋に戻って翌日の朝。

戒『桃子さん、おはようございます。』

なのはの部屋を出てリビングに降りると桃子が朝食の準備をしていた。

桃子「あら？戒君起きるの早いわね。」

戒『そうですか？いつも通りに起きただけなんですが…』

桃子「そうなの？」

戒『はい。それに早起きは三文の得って言いますしね。』

桃子「そうね。なのははまだ寝ているの？」

戒『ええ、幸せそうな顔で寝ていますよ。』

桃子「そう、寝顔を見た感想は？」

戒『とても愛くるしい…って何を言わせるんですか？』

桃子「あら、一緒に寝たのだから娘の寝顔を見た感想を聞きたくなるじゃない♪」

戒『確かに一緒の部屋で寝ましたけど恭也さんに言って布団を床に

敷いて貰って寝ましたよ？』

桃子「後で恭也にはお仕置きをしなきゃいけないわね…。」

その言葉に桃子は背後に黒いものを背負って言う物だから戒は背中に冷や汗を掻いていた。

戒『（恭也さん、大丈夫だよな？）』

その頃、道場にいる恭也達は…。

恭也「Σ！？」

美由紀「恭ちゃん、どうしたの？」

恭也「い、いや、何でもない。」

桃子の黒い気配は道場にいる筈の恭也に届いていた。そして、場所は再びリビングに。

桃子「さて、後は運ぶだけね。戒君は料理も出来るのね？」

戒『今まで1人暮らしをしてましたから必須でしたよ。』

桃子「そう。これならいつでもお婿さんにいけるわね？」

戒『はは、その前に相手が居ませんよ。』

桃子「なら、家のなのはなんてどう？」

戒『僕になのはちゃんは勿体ないですよ？』

桃子「そう？」

戒『第一、子供にする話じゃないですよ。』

桃子「戒君しっかり者だからどうしても小学生には見えないのよね？」

戒『Σ！？（す、鋭い！）そ、そんな事有りませんよ？正真正銘、なのはちゃんと同い年ですよ。』

少し焦り気味に戒が話していると朝の鍛錬を終えて恭也達がリビングに入って来た。

美由紀「疲れた～。」

恭也「美由紀はもう少し体力をつけた方が良いな。少しメニューを増やすか…」

美由紀「恭ちゃん、それは勘弁して～？」

戒『恭也さん、美由紀さんおはようございます。』

美由紀「戒君、おはよ～♪戒君起きるの早いね～？」

恭也「そうだな。いつもこの位か？」

戒「いえ、今日は少し遅いですね。いつもなら日が上る少し前に起きてますから。」

恭也「なら、今度、道場に来ないか？お前は動きが良いから俺達も勉強になるからな。」

戒『良いんですか？鍛錬の邪魔には…』

美由紀「そんな事無いよ？むしろ、大歓迎だよ♪」

戒『なら、その時はよろしくお願いします。』

桃子「さて、２人も来た事だし戒君、なのはを起こして来てくれないかしら？」

戒『わかりました。』

恭也「戒、これから一緒に住むのだから堅くなくても良いぞ。」

美由紀「恭ちゃん、いきなりは無理だよ？」

桃子「そうね。少しづつ慣れていけば良いわよ…ね♪」

桃子はそう言いながら戒を見る。

戒『有難う御座います。僕も早くこの家族の中に馴染める様に頑張ります。』

桃子「ふふ、そんなに意気込まないで良いのよ？さ、なのはを起こして皆で朝食にしましょう。」

戒『はい。』

戒はなのはの部屋の前で一応ノックをするが反応は無かった。

戒『（なのはの奴まだ寝ているな？）なのはちゃん入るよ？』

”ガチャ”

そしてドアを開けると其処には未だに布団にくるまり夢の中に旅立っているなのはがいた。

戒『なのはちゃん、もう朝だよ？』

なのは「う～ん。もう少し～？」

戒『駄目だよ。ご飯が冷めるよ？』

なのは「う～、わかったの。」

そう言って布団からもぞもぞとなのはが起きてきた。

戒『僕は先に行くから、なのはちゃんは着替えてその寝癖を直しておいでね♪』

なのは「Σにゃ！？」

戒は指で頭の横を指し、なのははそれに直ぐに反応し反射的に指された方の頭を押さえる。

戒『じゃ、先に下りてるね？』

なのは「も～、戒君意地悪なの！」

なのはのそんな声が聞こえたが戒はすでに部屋を出ていた。

戒『なのはちゃん、起こしてきましたよ。』

桃子「じゃあ、戒君も席に着いて待って貰える？」

戒『分かりました。』

そして戒が席に着いて数分すると上の方から地鳴りの様な音が聞こえ、音の発信源であるなのはが階段を下りてきた。

なのは「お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんおはよう～。」

恭也「おはよう。」

美由紀「なのは、おはよう。」

桃子「おはよう、なのは、もう朝食の準備が出来てるから席に着きなさい。」

なのは「は～い。」

そしてなのはが席に着いたのを桃子は確認して皆で朝食を食べる。

美由紀「っん？お母さん、この玉子焼き味付け代えた？」

桃子「それは戒君が作ったのよ？」

美由紀「ふぇ～、戒君って凄いね。」

戒『そんな、ただの玉子焼きじゃないですか？』

恭也「確かに美由紀よりかは上手だな。」

美由紀「ちょっと、恭ちゃんそれは酷いよ～？」

恭也「事実だろ？」

美由紀「うわ～ん？戒君、恭ちゃんがイジメるよ～？」

恭也の言葉に美由紀は戒に抱き付きながら言う。

戒『大丈夫ですよ。誰でも練習すれば何でも出来る様になりますよ？なんなら、今度僕が見ましょうか？』

美由紀「ほんと！？」

なのは「Σ！？なのはもやる！」

桃子「それは良いわね♪」

恭也「まともに出来るのか？」

戒『料理に関してはは大丈夫ですよ？ミッチリ教えますから。』

美由紀「えっと、お手柔らかに…出来ない？」

戒『早く上達する為です。』

美由紀「何か、戒君スパルタになりそう？」

なのは「お姉ちゃん、なのはも一緒にやるの！」

美由紀「うん。なのは、一緒に頑張ろうね！」

なのは「うん！」

そんな和気藹々と食事をし、朝食の後片付けをしている時…

桃子「そうだわ！今日は皆でお父さんのお見舞いにいきましょう！」

恭也「しかし、母さん、店の方は？」

桃子「今日はお休みにしましょう。なのは、お見舞いに行くから準備して。」

なのは「は～い♪」

戒『桃子さん、ちょっと良いですか？』

なのはが部屋に出掛ける準備に行くと戒が桃子に話しかけた。

桃子「どうしたの？」

戒『すいませんが僕はちょっと行けないです。』

桃子「どうしてなの？」

戒『此処に来る前に間借りしていた所に荷物を置いてきているからそれを取りに行きたい物で…』

恭也「なら、一緒に行って取りに行って父さんの見舞いに行けば良いだろ？」

戒『いえ、士郎さんのお見舞いには皆さんで僕は今度で構いませんので…』

戒が士郎の見舞いに行けない事を告げるが恭也がそれに異論をするがそれを戒は頑なに拒んだ。

桃子「しょうがないわね、わかったわ。なら、今度は一緒に行きましょうね♪」

戒『すいません。なるべく早くには帰ります。』

桃子「気をつけてね？」

美由紀「変な人に絡まれない様にね？」

恭也「むしろ絡んだ奴は戒が伸してそうだがな。」

戒『はい。それじゃあ行ってきます。』

そう言って戒は高町家を出て行った。

戒『（アル、今の状況だと原作が始まるのはいつ頃になる？）』

アル＞（現在から考えられると後、2、3ヶ月位かと。）＜

戒『（そうか。ならその間に色々と準備をしなきゃだな。）』

8〔（先ず、何をするんだ？）〕

戒『（とりあえず、地理の把握をする為に図書館に行くか。）』

そして図書館のある方向に足を踏みだそうとした瞬間…

”ブォォーン！！”

黒い乗用車が物凄い速度を出して戒の目の前を横切った。

戒『あ、危なかった～？今の車は一体何なんだ？』

アル＞（今の車の画像をだします。）＜

戒『Σんなっ！？』

Ｍｕｖ－Ｌｕｖの時に使っていた網膜投影で戒は確認をするが車に乗っていたのは運転席と助手席に男２人と女の子２人を両方から挟む形で２人の男、計６人が乗っていたが、戒が驚愕したのは人数では無く乗っているメンツの中になのはの友達である、アリサ・バニングスに月村すずかが乗っていた事である。

戒『（勘弁してくれよな。）』

その画像を見た瞬間、頭が痛くなってしまった。

アル＞（マスター、どうするのですか？）＜

８〔（勿論、助けに行くよな？）〕

戒『（当たり前だ。行くぞ！）』

８〔（場所判ってんのか？）〕

戒『あっ！』

アル＞（先程の車両は現在、港の方面に移動中です。）＜

戒『（よし。改めて、行くぞ！）』

そうして、戒はアリサ達が乗った車を追いかける。

場所は港にある倉庫に移る

アリサ「ちょっとあんた達！！わたし達をどうする気よ！！」

犯人Ａ「うるせぇな！」

犯人Ｂ「落ち着けって、バニングス家のお嬢様？」

アリサ「わたし達を利用して身の代金でも取ろうっての？」

犯人Ｃ「それも良いけど、君はそこの化け物のオマケだよ。」

複数人いる犯人の１人の言葉にすずかはびくっと肩を震わすが犯人を睨み付けてるアリサは気付かなかった。

アリサ「化け物って、誰よ？」

アリサは怪訝な顔をして犯人達に聞く。

犯人Ｂ「そりゃあ、あんたの隣にいるすずかお嬢様に決まっているじゃねぇか。ねぇ、リーダー？」

アリサ「すずかが化け物…ですって！？そんな筈無いわよ！！」

すずか「アリサちゃん…」

リーダー「くくく。どうやら、すずかお嬢様はご友人に嘘を吐いている様子ですね～？」

すずか「止めて…」

リーダー「良い事を教えてあげますよ。貴女の横にいるすずかお嬢様の正体は［夜の一族］と言う現代の吸血鬼なのですよ！！」

すずか「……」

犯人のリーダーの言葉にすずかは俯き涙を流していた。

アリサ「あんた達ーー！！」

リーダー「貴女は些か五月蝿すぎますねぇ、裏ルートから入手したアレでも試してみますか？」

そして、リーダーの指示で倉庫の奥の扉が開くと巨大な生物が檻に入って現れた。

アリサ「な、何よアレ…」

すずか「わ、わたしもあんなの初めて見るよ。」

リーダー「アレは…」

戒『アレはグール。魔物だ。此方の言い方だと不死者と言うがな。』

リーダー「誰ですか！！」

リーダーが話そうとした瞬間、倉庫の入口から声が聞こえ、振り向くと戒が青年期の姿で立っていた。

戒『俺か？俺は通りすがりの魔術師だ。貴様等が誘拐した女の子達を助けに来ただけだ。』

リーダー「助けに来た上に、魔術師ですか？ふざけないで下さいよ！！一体何処から入って来たのですか！」

戒『そこの入口からだが？』

激昂するリーダーに対して戒はあっけらかんとした顔で入口からと答える。

リーダー「正面からって、そんな筈は…」

戒『あぁ、近くにいた童共なら既に始末したぞ？』

リーダー「そ、そんな、２０人はいたのですよ！？」

戒『ただの烏合の衆で俺を止められると…？さっさと降参する事をお薦めするぞ？』

リーダー「くっ！ですが、此方には貴方の目的であるすずかお嬢様達がいるのです！降参するなら貴方の方です！」

戒『彼女達なら既に俺の横だが？』

リーダー「なっ！？」

”バキッ！！”

戒『普通、引っかかるか？』

戒の嘘に気付かずすずか達の姿を確認しようと後ろを振り向いた瞬間、リーダーの側頭部に戒の蹴りが入り派手に壁の方まで吹き飛ぶ。

戒『大丈夫か？』

そう言って後ろ手に縛られた2人の縄を解く。

アリサ「あ、ありがとう。」

戒『話は後だ。今は此処を出るぞ。』

すずか「あなたは…」

リーダー「逃がしませんよ！！」

倉庫から出ようと動く戒達の前に先程吹き飛んだリーダーが立ちふさがっていた。

戒『懲りねぇ奴だな？勝てねぇって解らんのか？』

リーダー「ふふふ、確かに今のわたしでは恐らく勝てないでしょう。

ですが！！」

リーダーは叫ぶと同時に懐から瓶の様な物を取り出した。

アリサ「あいつ、何をする気なのよ！？」

すずか「わ、判らないよ？」

戒『…2人共良い子だから大人しくジッとしてろよ？』

アリサ「なに……」

リーダー「気が付きましたか？ですがもう遅いです！これを飲めば［夜の一族］、化け物すら凌駕しますよ！！」

アリサ「あんた、また！！」

戒『この子は化け物じゃないぞ？この子はただの怖がりな少女だ。化け物ってのはな。俺や貴様の事を言うんだよ！！この不死者が！！』

戒の言葉にアリサ達は驚愕する。

2人「「えっ！？」」

リーダー「なぜ、わかったのですか？」

戒『貴様からは死人の臭いがぷんぷんしてるんだよ！！…それに後ろのグール、誰を使った。』

すずか「使ったって？」

戒『アレは、グールと言って、とある薬を人間、生きた人間に使わないと出来ない。そして、使われた人間は死ぬ…』

すずか「生きた人間！？」

アリサ「ちょっと、死ぬって…助からないの！？」

戒『殺す以外…道はない。』

すずか「そ、そんな！？」

リーダー「くくく。其処まで知っていましたか。良いでしょう。教えて差し上げますよ。貴方の後ろにいるグールは孤児の子供…ちょうどすずかお嬢様達位の子を使って作りましたよ？中々の出来でしょう？」

アリサ「こ、子供！？しかもわたし達位って…」

戒『屑が…命の冒涜、未来ある子供を…許さん！！』

”ガシャーン！！”

リーダー「わたしの相手をする前にアレを何とかしなければいけませんよ？もっとも貴方の言う通り殺す以外無いですけどね？」

グール「ガァァーー！！！！！」

アリサ「ひっ！」

リーダー「ふふふ。良いですね～！その表情、良いですね！」

すずか「酷い…」

リーダー「ふふふ、最高の誉め言葉ですよ。」

戒『…すずかって言ったか？』

すずか「は、はい。」

戒『君は化け物などじゃない。こんな可愛い子が化け物なもんか。』

リーダー「余所見してお喋りとは余裕ですね！！やれ！グール！！」

グール「ガァァーー！！」

”ズガァーン”

リーダーの声に呼応するかの様にグールは檻をぶち壊し、その破片を戒に投げつける、そして戒は破片が当たり壁まで吹き飛び倒れる。

戒『……』

アリサ「そ、そんな！？」

すずか「い、いやぁぁーー！！」

リーダー「ふふふ、やはり魔術師とは嘘でしたか。しかし、解せませんね。不死者たるこの私をなぜ吹き飛ばせたのか。まぁ、確認は既に出来ませんがね。」

アリサ「あんた、よくも！！」

リーダー「おや？助けに来た者が殺されただけですが？」

すずか「…うっ…うっ…。」

リーダー「当初の予定とは違いますが、すずかお嬢様にこの［グール・パウダー］を使って吸血鬼製のグールを作りますか。」

そう言って、リーダーは後ろにグールを控えさせ、すずかに近寄る。

すずか「い、いや。来ないで…」

アリサ「すずか！逃げるわよ！」

リーダー「元気があるのは良いですが、逃がしませんよ？」

怯えるすずかをアリサは引っ張って入口まで行こうとするが壁の様な物に行く手を阻まれる。

アリサ「なによ、これ！！」

リーダー「単なる結界ですよ？これで邪魔は入らないですし、貴女達も逃げれませんよ？」

すずか「そ、そんな…」

リーダー「くくく。さぁ、観念して下さい。」

”ズガンッ！！”

そして、リーダーがすずかに触れようとした瞬間、何かが上から降って来た。降って来た物は槍であった。

リーダー「何故、槍が上から降って来たのです！？」

戒『『そうは問屋が卸さないってな？』』

槍が降って来た所から大量の蝙蝠が飛んできて一カ所に集まるとその中から戒が現れた。

リーダー「なっ！？」

アリサ「あっあんた、さっき死んだんじゃ…」

戒『あんな物で真祖が殺せる物か。』

すずか「真祖って？」

リーダー「馬鹿な！！貴様の様な餓鬼が真祖の筈がある訳は無い！！」

戒『貴様の様な若造に千年も生きてる俺を知るはずは無いだろう？』

3人「「「千年！？」」」

リーダー「その様な嘘に騙される物か！グール、この身の程知らずを殺せ！」

グール「ガァァーー！！」

アリサ「こ、こっちに来るわ！！」

戒『大丈夫だ。』

すずか「ど、どうして、落ち着いてられるの！？」

戒『あの子を浄化する。』

アリサ「浄化って…殺すの！？そんなの駄目よ！？」

戒『しかし、その方法しか無いのだ。』

すずか「アリサちゃん。この人が言う通りだよ。あの子をあの姿のままでいる苦しみから早く解放してあげたいの。」

アリサ「わかってるわよ！！…わかってるけど、悲しすぎよ…。」

戒『2人のその優しさがあの子にとっての救いになる。さぁ、逝くぞ。』

そして、戒は2人を後ろに立たせ、呪文の詠唱に入る。

戒『ギルティア・ギル・ティ・ギルディアス。【契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に。】「燃える天空」！！！！！』

”ドッゴーーン！！！”

呪文を唱え、腕を振り下ろすと光線の様な物がグールに飛びミサイルが着弾した様な爆発を起こした。

2人「きゃあぁぁ！？」

リーダー「くっ！馬鹿な！人間の持てる魔力を超えているだと！？」

戒『そろそろ、貴様の正体を見せたらどうだ？』

リーダー「人間如きが頭に乗るなぁーー！！」

戒『だから、俺は吸血鬼だって！頭が悪いのか？』

リーダーはみるみるうちに姿を変貌させ、悪魔の上位種のアーク・デーモン（以降ＡＤ）にその姿を変えた。

ＡＤ「フハハハハ！コノオレヲコケニシタコトヲコウカイサセテクレルワ！！」

戒『【天の鎖よ】…』

そう言って、ＡＤはその巨体に似合わず俊敏に動き戒に近づき剛腕を振るおうとするが戒に近づいた時には宝具【天の鎖】により動きを封じられていた。ＡＤは振り解こうとするが外れる気配が無い。

ＡＤ「クッ！ナンダコノクサリハ！！」

戒『貴様に教える義理は無い…ギルティア・ギル・ティ・ギルディアス【契約に従い我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻】「千の雷」！！』

ＡＤ「グァァァーー！！！！」

戒の呪文によりＡＤの周りに幾千の稲妻が降り注ぐ。そしてそれを

受けたＡＤは断末魔を上げてその場で光になり消えた。

アリサ「み、耳が…！」

すずか「で、でも、これで今度こそ助かったんだよね？」

戒『そうだ。後は…』

そう言って先程の「燃える天空」の爆心地に戒は降り立つ。アリサ達は爆心地の端でそんな戒を見ている。

アリサ「一体何をするのかしら？」

すずか「多分だけど、さっきのグールにされたって子の弔いだと思うよ。」

アリサ「そう…ちょっ！すずか、アレ！？」

すずか「光の…玉？」

すずかと一緒に戒の居る場所を見ながら話すアリサ達だが光の玉に驚いくがアリサ達にはそうとしか見えていないが、戒にはこれがすずか達と同じ歳の少年である事がわかるのである。

少年「お兄ちゃん。ありがとう。」

戒『俺は君を殺したのに礼を言うのだな…』

少年「だって、お兄ちゃんは僕をあの苦しい所から解放してくれた。だから僕は助けてくれたお礼をしているだけなんだ。」

戒『俺は君をあんな姿にした奴と同じ悪かもしれんのだぞ？』

少年「お兄ちゃんは悪い人には見えないよ。僕の姿を見て悲しんでくれた…そんなお兄ちゃんが悪い人の筈無いよ？良い人だよ。」

戒『そうか、そう言ってくれるのだな。』

そして戒は少年の足元に白く光る魔法陣を現した。

戒『そろそろ、行くと良い。道は示した…後は、そのまま天国に行けるさ。』

少年「お兄ちゃん、本当にありがとう。」

そう言って少年は光の玉と一緒に消えて逝った。

戒『済まんな。遅くなって。』

すずか「そ、そんな事？」

アリサ「べ、別に助けてなんて…。」

すずか「アリサちゃん…！」

アリサ「う…あ、ありがとう。」

戒『どういたしまして。』

アリサ「それにしても、すずか！わたしになんで黙っていたのよ！」

すずか「ご、ごめんね。わたしは…」

戒『化け物では無い。』

すずか「えっ？」

アリサ「そうよ。わたし達は親友なんだからそれ以上でもそれ以下でも無いわ。」

すずか「ア、アリサ…ちゃん。わ、わたし…」

アリサの言葉にすずかは感極まって泣く。暫くして…

戒『そろそろ、良いかな？』

すずか「は、はい。」

戒『もうすぐ君達の迎えが来る。』

アリサ「あなたは？」

戒『…？何故、丁寧語なんだ？』

すずか「えっ？」

アル＞（マスター、姿がまだ青年期のままですよ？）＜

戒『（忘れてた）。』

アルの念話に戒は直ぐに幻術を解き子供の姿に戻るがその姿を見たアリサ達は驚いた。

アリサ「だ、誰！」

戒『驚かして済まないな。』

すずか「えっと…さっきの男の人？」

アリサ「うそ！？」

戒『さっきの姿は幻術で変えた物だ。本来の姿は此方になる。』

戒の容姿はギルガメッシュの子供ｖｅ．でセミロングと言う物になっていた。

すずか「貴方は一体何者なんですか？」

戒『真祖の吸血鬼であり、魔術師でもあり、魔法使いでもある。』

アリサ「訳判らないわよ。」

戒『無理に理解しない方が良い。』

戒に話していると外から車のエンジン音が聞こえる。

戒『来たか…。』

アリサ「どういう意味？」

”ガーーッ！！”

鮫島「アリサお嬢様！ご無事ですか！？」

アリサが訝しく戒に聞くがその瞬間、倉庫の扉が左右に開かれ執事で世話役の鮫島が入って来た。

アリサ「鮫島！？」

忍「すずか！」

ファリン「お嬢様！」

すずか「お姉ちゃん！？それにファリン！？」

すずか「2人共、どうして…」

忍「私達の方に匿名の連絡でこの場所を教えてくれたのよ。」

アリサ「鮫島も…？」

鮫島「左様です。お嬢様方の行方が判らずにいると忍様同様、匿名の連絡で此処を教えたのです。」

すずか「それって…」

そしてすずかが戒がいる方を見ると既にその姿は無く、爆撃でも遭ったかの様な惨状しかなかった。

すずか「あれ…あの人は？」

忍「すずか、あの人って？」

すずか「わたしとアリサちゃんを助けてくれた男の子がいたの。」

忍「男の子？」

アリサ「ほんとよ！？あいつ、何処に行ったのよ！！」

すずか「まだちゃんとお礼を言ってないのに…。」

忍「大丈夫よ？多分だけどまた会えるわ。」

すずか「ほんと！？」

忍「女の感よ？次に会った時にはちゃんとお礼出来ると良いわね？」

すずか「うん！」

忍「（それにしても周りに服はあるけど着てるはずの人がいないのはどういう事かしら？）」

ファリン「（忍様…）」

忍「（調査の方お願いね。）」

ファリン「（畏まりました。）」

すずか「お姉ちゃん、どうしたの？」

忍「何でもないわよ？さっ、行きましょう。」

そしてすずか達は鮫島が運転する車で倉庫から離れるのであった。

戒『何とかなったな。しかし、不死者が現れるとは…原作では有り得ない事象だ。』

アル＞マスターがいる時点で世界からのカウンターが働き始めていると考えられますね。＜

８〔これからもそれはあるかも知れないぞ？〕

戒『その時はその時だ。俺は何があろうとただ突き進むだけだ。』

そう言って戒は倉庫の屋根から移送方陣を使いその場から高町家へ移動した。

吸血鬼（後書き）

作者「えー、ＶＰネタに走ってしまった作者です。」

戒『悪魔は無理あるだろ…』

作者「いや～、ただ誘拐するだけじゃつまらないからやっちゃったんだよ。」

戒『またネタで出すのか？』

作者「うーん、無印編はそれで行こうかなって考えてるよ？」

戒『グダグダになっているのにか？』

作者「気にするな。俺は気にしない！」

戒『ネタに走るな！』

作者「次回、転入生」

戒『嫌な予感しかしないぞ？』

作者「戒君には面白い事になるよ～♪」

戒『それが、一番不安を煽るんだよ！』

作者「では次回もお楽しみに～♪」

戒『逃げるな～！？』

転入生

今、戒は教師がいる教壇の横にて聖祥の学生服を着て立っていた。

戒『今日からこのクラスに入る事になります。黒逸戒です。皆さんよろしくお願いします。』

いきなりこんな事を言われても判らないだろから現状を説明する為に3日前に戻る。

あれから俺は家に帰ったのだがその時に桃子さん達に荷物を持って帰る事を思い出し、急いで宝物庫(バビロン)から旅行鞄を取り出し帰宅した。すると玄関前に恭也さんが立っているのが見えた。

戒『恭也さん、ただいま戻りました。』

恭也「遅かったな。」

戒『少し野暮用が有った物で…。心配かけてすいません。』

恭也「…まぁ、無事で何よりだ。俺より、なのはに言ってやってくれ。お前が遅い事に一番心配していたからな。」

戒『はい。』

恭也「なのは~。戒が帰って来たぞ!」

”ズドドドド!!”

なのは「戒君！お帰りなの～！」

そして恭也と一緒に家に入ると恭也がなのはを呼んだ。朝と同様に地鳴りの様な音と共になのはが駆けてきて戒に対して突進をして来た。

戒『（ごふっ！？）な、なのはちゃん。た、ただいま。』

なのは「お帰りなの！」

戒『そう言えばなのはちゃん？家の中が賑やかだけど今日は何か有るの？』

なのは「今日はね、お父さんが退院して帰って来てるからお家で退院祝いを今お母さんとなのはで準備してるの♪」

戒『そうなんだ。じゃあ僕も一緒に準備をしなきゃだね。』

なのは「ううん。戒君は待っててなの。戒君もお父さん一緒にお祝いなの！」

戒『僕も？』

なのは「戒君、これからはお家にいるから戒君の歓迎会も一緒にやるってお母さんが言ってたの。」

戒『そうなんだ。じゃあ、居間の方で待ってるよ。』

なのは「わかったの！」

なのはは元気いっぱいに返事をするとリビングの方へと戻って行き、戒は旅行鞄を左手に持ち居間の方へと移動するのであった。

なのは「お母さん、戒君が帰って来たよ～♪」

桃子「あら、それじゃあ少し急いで支度をしなくちゃね。なのは、そこのお皿をテーブルに運んで置いてくれる？」

なのは「は～い♪」

桃子「美由紀はそこの料理を持ってってね。」

美由紀「は～い。」

台所でそんなやり取りが行われている時、居間にいる戒はと言うと…

戒『えっと、士郎さん「初めまして」。桃子さんの計らいで居候させてもらっている黒逸戒です。』

士郎「話は桃子から聞いているよ。それにしても、僕がいない間に君がなのはの相手をしていてくれたんだね。父親として礼を言うよ。」

そう言って士郎は戒に頭を下げる。

戒『頭を上げて下さい。僕はただ、なのはちゃんの悲しむ顔を見たく無い…それだけの理由ですよ。』

士郎「しかしだね…」

戒『なら、これからの時間でなのはちゃんとの時間を作って遊びに行ってやって下さい。それが一番なのはちゃんが喜びますよ。こんなしみったれた話は終わりにしましょう。それよりも、そろそろ桃子さんやなのはちゃん達が準備している士郎さんの退院祝いの準備が終わる頃ですから行きましょう？』

士郎「それに戒君の歓迎会もだね。」

戒『はい。楽しみですね♪』

そして戒と士郎は一緒にリビングに行くとテーブルにこれでもかと料理が所狭しと並んでいた。

戒『Σすご！？』

桃子「士郎さんが帰って来たものだからつい、張り切り過ぎちゃったわ♪」

士郎「久しぶりに桃子の手料理が食べれて嬉しいよ。病院食は少しばかり味気なかったからね。」

戒『せっかくの温かい料理が冷めますから早く席につきましょう。』

そして皆が席について食事を始めて少しして士郎が戒に話しかける。

士郎「戒君はなのはと同い年だけど学校の方は今までどうしてたんだい？」

戒『えっと、どこにも通わないでいましたね。とりあえず、知識を

詰め込む為に図書館に入り浸りでしたけど…。』

士郎「なら、なのはと一緒に学校に行かないか？」

戒『え？』

桃子「良いわね♪なのはも楽しみよね？」

なのは「うん♪戒君も一緒になのはと学校に行こうよ！」

戒『えっと…』

恭也「戒、お前も学校に行け。」

戒『でも…』

美由紀「恭ちゃんは戒君になのはと同じ学校で友達を作って楽しめって言いたいんだよ～。」

戒『居候させて貰ってるだけでも有り難いのに学校まで良いんですか？』

士郎「戒君はまだ子供なんだから遠慮する事は無いよ？」

戒『えっと、お願いします。』

そう言って戒は士郎に頭を下げて頼んだ。

桃子「じゃあ、なのはが後3日もすれば三年生で学校に行くからその時に転入の形で行きましょうね。」

戒『はい。ありがとうございます。』

士郎「ところで、戒君？」

戒『なんですか？』

士郎「その話し方じゃなく、素で話したらどうだい？」

恭也「父さん、それはどう言う事なんだ？」

戒『いや、それは俺が話すよ。』

恭也「Σ！？」

士郎の言葉に恭也は疑問に思うが戒の話し方が変わった事に驚愕する。

士郎「そっちが素の様だね。」

戒『ああ。騙してたみたいで済まない。』

士郎「いや、先ほどからの話し方に違和感があったからね。」

戒『流石だね。』

なのは「戒君、喋り方がさっきと違うの！！」

士郎達と話をしているとなのはが片付けを終えて美由紀と戻って来た所、戒の話し方がかなり違う事にびっくりしていた。

美由紀「戒君？」

戒『どうした？美由紀さん。』
美由紀「あのね、戒君の話し方が違うから雰囲気がね？」
戒『ただ口調を元に戻しただけなんだが…』
美由紀「わたしは前の喋り方の方がいいな～？」
桃子「あら、クールな感じで格好いいじゃない。ね、なのは？」
なのは「う、うん／／／／あのね、か、戒君。」
戒『どうした？なのはちゃん』
なのは「なのはの事、同い年だから呼び捨てで良いよ／／／／」
戒『なのは…で良いのか？』
なのは「うん／／／／」
桃子「あらあら、孫が楽しみね♪」
2人「ちょっ？お母さん（桃子さん）！？」
恭也「なのはに手を出したら、いくら戒でも許さんぞ！」
士郎「戒君、少し2人で話をしようか？」
戒『何故そうなる！？』
桃子「士郎さん？」

士郎「も、桃子！？」

なのは「お兄ちゃん！」

恭也「な、なのはこれはだな…」

２人「「ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしよっか？」」

桃子の爆弾発言になのはと戒は慌てると士郎と恭也が反応するが士郎は桃子に、恭也はなのはに引っ張られてリビングを出て行った。

戒『…美由紀さん、俺…先に寝に行きます。』

美由紀「…うん。わたしも寝に行くね。」

戒『おやすみ。』

美由紀「おやすみ～。」

その後、なのはの部屋の隣りの空き部屋を借りる事になったのだが、その事になのはが残念そうな顔をしていたのは気のせいのはずだ。

そして、３日経って現在にいたるわけである…。

教師「皆さん、仲良くしてあげてね？黒逸君の席は…高町さんの隣になるわ。高町さん、黒逸君に判らない事が有ったら教えてあげて下さいね。」

なのは「はい！」

戒『（なのはは無駄に元気だな～。入った瞬間にすずかとアリサ…特にアリサは怖い顔をしてるしな…）よろしく、高町さん。』

なのは「むぅ～、なのはって呼んでって言ったのに～。」

戒『すまん、すまん。よろしく頼むよ。なのは。』

そして俺が席についてから授業も始まり、休み時間になり始まるは質問と言うなの拷問であった。

戒『つ、疲れた…。』

なのは「にゃはは、戒君お疲れ様。」

戒『お疲れ様…じゃないよ。少しは助けてくれよな～？』

アリサ「ちょっと、なのは！」

なのは「あ、アリサちゃん。どうしたの？」

アリサ「ちょっと、コイツに聞きたい事があるのよ。」

戒『…話？』

すずか「うん。わたしもアリサちゃんも黒逸君に確認したい事があって聞きたいの。」

戒『…なら、屋上に場所を移そう。そこなら邪魔は入らないだろ？なのは悪いが少しだけここで待ってくれるか？』

なのは「戒君がそう言うなら待ってるよ。」

すずか「なのはちゃん、ごめんね？」

アリサ「さっさと行くわよ！」

戒『全く、忙しない奴だな。』

そして、アリサが先導して屋上に着くと…

アリサ「あんた！あの時にいた奴でしょ！」

戒『なら、なんだと言うんだ？』

すずか「あの時はありがとう。助けてくれて。」

戒『あれは偶然だ。俺は魔物の気配を辿って行ったらお前達がいた…ただそれだけの事だ。』

すずか「それでも、助けてくれた事には変わりないよ？」

戒『そうか。』

アリサ「すずか！そんな事よりも聞く事があるでしょ！」

戒『聞く事？』

アリサ「そうよ！アイツは何者で、それを倒したアンタも一体何者

なのかって事を詳しく教えなさいよ！」

戒『その事か…』

アリサ「その事かって何よ！その事がわたしは一番聞きたい事なんだからね！」

すずか「アリサちゃん、お、落ち着いて？黒逸君、わたしもアリサちゃんと同じなの。だから、教えてくれる？」

戒『ふぅ。［遮音結界］展開。』

すずかの言葉に戒は見えない壁の様な物を3人の周りに張り巡らせた。

すずか「…何をしたの？」

戒『今のは中の音を漏らさない為の物だ。今から話す事は聞かれたら不味いからな。』

アリサ「どう、不味いって言うのよ。」

戒『今から話す事は絶対に誰にも言うな…それが親でもだ。』

アリサ「…わかったわ。」

戒『3日前のあれはあの時にも言ったが［不死者］と言う者だ。』

すずか「その［不死者］って一体何ですか？」

戒『不死者とは言わば魔物の様な存在だ。』

アリサ「だ～か～ら～！その不死者だか魔物だか解らないから教えなさいって言ってるのよ！」

戒『なら、その成り立ちを説明しなければいけないな。』

すずか「成り立ち？」

戒『そうだ。あれ等は最初から存在していた訳ではない。』

アリサ「どう言う事よ？」

戒『2人に聞くが人は死ぬとどうなる？』

アリサ「そりゃ、行いが良ければ天国に行くわよ。」

すずか「逆の時には地獄に…」

戒『まぁ80点かな…』

アリサ「なんでよ！」

戒『確かに天国や地獄に行く者もいるが誰しも死ぬと其処に行ける訳ではない。』

2人「？」

戒『まず人は死ぬと霊魂となり其処から天界や冥界に行く者、未練があり現世に留まる者…そして魔物になる者は憎しみや恨み辛みが長い年月を経て魔物に、そして冥界から喚ばれるか、自力で来る奴は［不死者］と言う。』

2人「……」

戒『俺はそんな奴らを狩る存在の様な者だ。』

アリサ「まだあんな奴がいるの！？」

戒『多分だが、親玉らしき奴が不死者共を喚んでる居るはずだ。そいつを叩けば終わる筈だ。』

すずか「ほんと？」

戒『ああ。元凶たる大元を潰せば自然と収まる事態だ…聞きたいのはそれだけか？』

アリサ「ええ、それだけよ。」

すずか「答えてくれてありがとう。」

戒『可愛い子の質問にはちゃんと答えてやらんとだろ？』

2人「／／／／」

戒が真顔でそんな言葉を言うと2人は不意打ちだったらしく赤面をした。

戒『？まぁ、改めて自己紹介する。黒逸戒だ…以後よろしくな？』

アリサ「わたしはアリサ・バニングス、アリサで良いわ。ま、まぁ仕方ないからよろしくしてあげるわ／／／／」

すずか「月村すずかです。わたしもすずかで良いよ。よろしくね、黒逸君。」

戒『すずか、俺が下の名前で呼ぶんだ…君も下の名前で構わない。』

すずか「えっと、か、戒君…で良いのかな／／／／」

戒『ああ、これからよろしくな？』

戒が話し終わるとちょうど学校のチャイムが鳴る。

戒『おっ？予鈴か？』

アリサ「やばっ！すずか急ぐわよ！」

そう言ってアリサは屋上から足早に出て行った。

戒『アリサはほんと忙しないな。それじゃあ、急いで行くするか。な？すずか。』

すずか「ふふ、そうだね。」

そして俺達が教室に戻り転入初日の学校の授業は問題なく全て済んだ。

転入生（後書き）

作者「な、なんとか出来たｏｒｚ」

戒『おーい。ちょっと良いか？』

作者「なんだ～？」

戒『他の作品はどうなってんだ？』

作者「まだ練り上げが出来てない。」

戒『…想像力不足。』

作者「言うな～！既に判りきっている事なのに～！」

戒『とりあえず、次回「初めての魔法」。』

２人『「須く見よ！！」』

戒『何故、最遊記？』

作者「なんとなく。」

初めての魔法（前書き）

久々の投稿になりますが何か問題があればご意見を貰えると幸いです。

初めての魔法

???「くっ……対なる響き光となれ、許されざる者を封印の輪に……ジュエルシールド封印！！」
向かってくる黒い生き物に向けて、少年は言う
そして、少年と黒い生き物が……
――ぶつかった

少年と黒い生き物が衝突した所から光が溢れて周りをも照らす
そして黒い生き物が吹き飛ばされ周りには黒い生き物が飛び散っていた

そして、弱った黒い生き物は、どこかに逃げて行ってしまい
???「逃がし……ちゃった……追いかけなくちゃっ……」
そう言いながら、少年は倒れた
???「誰か……僕の声を聞いて……力を貸して、魔法の力を……」
すると、少年が光りだし
光が治まるころには、少年では無く、フェレットみたいな生き物と赤い玉がそこに落ちていた
“～～♪～～～♪”
”ピッ！“

戒『ふぁ～、やっと始まりか…。』

アル＞マスター、昨夜、この街全域に魔力を持つ者達に向けて思念が送られました。＜

戒『ああ、俺も気付いたし、その思念も送られて来たよ。勿論、な

のはにも送られている筈だ。』

アル＞どうするのですか？＜

戒『なのはが危ないと感じた時に動くさ。その時には頼むな？』

アル＞わかりました。＜

俺が転入してあれから数日経って、なのは達、聖祥の三大美少女の中に俺が加わって行動する事が多くなった。その分男子の視線が凄いが…

なのは「戒君～！待ってよ～！」

戒『早くしないとバスに遅れるぞ。』

今、俺はなのはの寝坊助をたたき起こして急いでる最中である。

なのは「そ、そんな事言ったって…Σにゃ！？」

戒『たく…しょうがないな。』

なのはのペースで行くと遅刻確定の為に俺はなのはを抱えたのだが何故顔が赤いのだ？

なのは「か、戒君？こ、これは／／／／」

戒『お前のペースだと遅刻するからな。文句は受け付けないぞ？』

なのは「は、恥ずかしいよ～？」

戒『遅刻するよか増しだ。』

なのはがまだ何か言っているが気にしないで走り、何とかバスが来る前にバス停に着く事が出来た。

戒『ふぅ、間に合ったか。』

なのは「う～／／／／」

戒『まだ唸ってたのか？』

なのは「だって／／／／」

戒君がお姫様抱っこを急にするからびっくりしたの！それに…抱えられてた間通った道で人に見られてとても恥ずかしかった…思い出しただけで戒君の顔が見れないよ～？

戒『？なのは、どうした？もうバスが来てるのに乗らないのか？』

なのは「待ってよ～？」

そしてバスに乗り定位置である後部座席にはこれもお馴染みのアリサとすずかが座って俺達を待っていた。

すずか「なのはちゃん、おはよう。」

アリサ「今日は滑り込みしなかったわね。」

戒『当たり前だ。その為に寝坊助を急かしたからな。』

なのは「う～？」

すずか「戒君となのはちゃんって仲の良い兄弟みたいだね？」
戒『絶対に俺が兄貴だな…。』
なのは「なんでよ～？」
戒『なのはは手の掛かる妹って感じが強いからな？』
なのは「う～、戒君の意地悪～？」
すずか「ふふ、アリサちゃん。戒君となのはちゃんはほんとに仲が良いよね？」
アリサ「…まったくよ。アンタ達！バスがもう学校に着いたんだからさっさと降りるわよ！」
戒となのはの会話を聞きながらすずかは少し笑い、アリサはバスが学校に着いたのを戒達に言うが何故か声を上げていた。
戒『おっと、済まないな。なのは、さっさと行くぞ？』
なのは「待ってよ～？」
すずか「なのはちゃん、早く早く。」
アリサ「さっさとしなさいよ！」
戒『なんとか間に合ったな。』
教室に入り戒はとなりのなのはに話し掛けるが当の本人は机に突っ伏していた。

なのは「来る間に疲れたよ～？」

戒『その位でだらしないな。』

なのは「わたしは戒君みたいに万能じゃないよ～？」

戒『俺だって万能と言う訳じゃないぞ？此迄の積み重ねで今の俺が在る訳だからな？』

なのは「戒君はなのは達と同い年なのになんか大人びてるね。」

戒『そんな物は気のせいだ。なのは達と俺は確実（身体的）に同い年だぞ？』

アリサ「そろそろ先生が来るんだから静かにしなさいよ！」

戒『それじゃ、なのは、昼休みには起こしてくれな？』

なのは「ふぇ！戒君！今から授業なんだよ？」

戒『？？？』

なのは「戒君ってばーー？」

なのはが戒を起こすのに悪戦苦闘していると先生が入って来た。

なのは「不味いよ～？」

なのはが心配するが戒が寝ている事に触れないでそのまま授業が始まった。

なのは「？？？」

アリサ「（あの馬鹿！また何かしたわね！）」

すずか「（何をしたんだろう？）」

そして、午前の授業が終わりなのはが戒を起こしていつもの場所の屋上にあるベンチで４人で昼にしていると。

なのは「将来の夢か～。」

戒『なのは、急にどうした？』

すずか「戒君が寝ている間に出た宿題だよ。」

戒『へぇ～。』

アリサ「わたしは機械工学の学校を出て親の跡継ぎかな。」

すずか「わたしもアリサちゃんと同じ所に行ってお姉ちゃんのお手伝いかな？」

アリサ「なのは、アンタはどうなのよ？」

戒『桃子さん達の跡を継ぐのか？』

なのは「う～ん？それも将来のビジョンの一つなんだけど、わたし、他に取り柄がないから…ふぇ？！」

なのはの言葉にアリサは自分の弁当のおかずにあるレモンを頬に投げつけ、なのはがそれに怯んだ隙に飛びかかり、馬乗りになって思

い切り頬を引っ張っていた。

アリサ「アンタ！わたしよか理数の成績良い癖に！どの口が言うのよ！」

なのは「ふぁ、ふぁりさひゃんひ、ひはいよ～？」

すずか「アリサちゃん？」

戒『そんな事を今考えてもしょうがないだろ？』

アリサ「なによ！それにアンタはアンタでいつも授業を寝ている癖になんで学年トップなのよ！」

戒『日頃の行い？』

アリサ「アンタはいつも悪いでしょが！」

なのはを解放して矛先を俺に向けてアリサが迫ってきた。

戒『そうか？』

アリサ「そうよ！それにわたし達が自分の将来の事を教えたんだからアンタも教えなさいよ！」

戒『とりあえず、アリサかすずかで逆玉って所か？』

ア・す「「／／／／」」

戒『？』

なのは「にゃはは？」
戒の言葉に2人は赤面をし、なのははそれを見ていたなのははただ苦笑するしかなかった。

戒『ふぁ～～。』
すずか「戒君、眠そうだね？」
アリサ「今日も授業全部居眠りしてたわね。」
なのは「なんで、そんなに眠たいの？」
戒『ん～？まぁ、色々だな。』
アリサ「なによ、色々って？」
戒『色々は色々だな。』
アリサ「答えになってないわよ！」
戒『それより、今日も3人共塾か？』
アリサ「そうよ？」
すずか「なのはちゃん、どうしたの？」
海鳴公園に差し掛かってからなのはが心ここに在らずの状態でいるとすずかが心配して声を掛ける。
なのは「Σふぇ！な、なんでもないよ？（ここって、夢に見た所に

そっくり…）」

？？？「（助けて…）」

なのは「えっ！」

アリサ「ちょっと、なのはどうしたのよ？」

なのは「皆、今何か聞こえなかった？」

すずか「何も聞こえないけど？」

アリサ「どうしたのよ？」

戒『？何かあったのか？』

なのは「ううん。何でも…」

？？？「（誰か、助けて…）」

なのは「（また！）こっち！」

アリサ「ちょっと、なのは！」

すずか「アリサちゃん！」

戒『まったく…（やっと、全ての始まりか。）おい、待てよ！』

なのは「たしか、こっちから…」

さっきから聞こえる声は一体何なんだろ？アリサちゃん達や戒君には聞こえてないし、わたしだけに聞こえるこの声は…

？？？「（誰か、僕を…助けて。）」

なのは「（こっちから聞こえる！）」

“ガサガサッ！”

近くの草むらを掻き分けて行くと其処にはグッタリと横たわる動物がなのはの目に飛び込んで来た。

なのは「Σあっ！」

アリサ「なのは、やっと見つけたわよ…ってどうしたのよ？」

すずか「なのはちゃん、どうしたの？」

戒『3人共どうした？（なのはって運動音痴の筈なのに何故この時は早く走れていたんだ？）』

なのは「あっ、アリサちゃん、すずかちゃん、戒君。この子、怪我してるみたいなんだけど…」

アリサ「動物よね？」

戒『フェレットか？（ユーノの登場か…）』

すずか「なんで、こんな所に？」

戒『ちょっと、見せてみろ……ふむ。外傷は前足のみで若干衰弱し

てるみたいだな。』

なのは「ど、どどどうしよう？」

アリサ「少し、落ち着きなさいよ。」

戒『…とりあえず、応急処置は済んだがこのままでは不味いぞ？』

すずか「確か…近くに槙原動物病院があった筈だよ？」

アリサ「なら、さっさと行くわよ！」

戒『なのは、コイツをちゃんと持ってやれ。』

なのは「う、うん。」

そして、なのは達は槙原動物病院に着き、そこの院長兼獣医の槙原愛に無事に診て貰う事が出来た。

槙原「うん。後は明日まで安静にさせて様子を見ましょうね。」

3人「「「ありがとうございます。」」」

戒『先生、それはフェレットで良いのか？』

槙原「うーん、フェレット…にしては変わった種類ね。」

すずか「品種改良された子？」

すずかがそう呟いているとフェレット？が目を覚ましなのは達を見渡し、徐になのはの指を舐める。

なのは「わっ！」
戒『…お前達、塾は良いのか？』
3人「「「Σあっ！」」」
戒『後は任せてさっさと急いで行け。』
なのは「うん！」
すずか「戒君、ごめんね？」
アリサ「2人共さっさと急ぐわよ！」
そして3人は槙原動物病院を立ち去った。
戒『それじゃあ、そのフェレット？をお願いします。』
槙原「わかったわ。ただ、元気になったら飼い主を見つけないとね？」
戒『わかりました。』
俺もその後に槙原動物病院を後にし、海鳴公園に来ていた。
戒『（確か、此処等に…）Σあった！』
戒はフェレットが倒れていた周辺を探していると菱形の青い宝石を一つ見つけた。

戒『発動前か…ジュエル・シード！封印』

アル＞ジュエル・シード、シリアルＮｏ．？？！＜

戒『数字は二十番…か。とりあえず、アルの中に入れとくか。』

アル＞了解。＜

そして戒が高町家に帰りなのはが帰って来て夕飯になって放課後にあった事を士郎さん達に戒となのはが話をしていた。

士郎「フェレットか…。」

なのは「お父さん、駄目かな？」

戒『元気になったら飼い主を探さないといけないらしいんだ。』

士郎「うーん。」

恭也「ちゃんと面倒を見れるのか？」

なのは「うん！」

桃子「なら、明日行って元気になってたらお家で買いましょうね？」

なのは「ありがとうなの！お母さん♪」

そして、食事も終わり、皆が寝付いた頃…

アル＞マスター。＜

戒『ああ、なのはが出掛けたな。』

アル＞追いかけますか？＜

戒『行くか…保険は必要だしな。』

アル＞ＢＪはどうします？＜

戒『そうだな…アーバレストで行こう。』

アル＞了解。＜

戒は窓から飛び出すとアルをｓｅｔ　ｕｐすると全身を白銀の鎧の様な物が包んだ姿になっていた。

戒『（アル、結界はどうなっている？）』

アル＞（槙原動物病院付近一帯を封時結界が覆っています。）＜

戒『（急ぐぞ！）』

戒が飛び出す直前に戻りなのはがいる槙原動物病院の近くでは…

思念体「ガアァァァァァ！」

なのは「にゃあー！」

“ズガーン！！”

黒い生き物がなのは目掛けて突進を仕掛けて来るが辛くもなのははそれを避け、その場を見ると黒い生き物は壁に嵌ったのか身動きが

取れないでいた。

なのは「な、なになに！ユーノ君、い、一体何が起きてるの？あれは生き物なの？」

なのははその隙にその場から離れて、自身を呼び出したフェレット…ユーノに聞いたのである。

ユーノ　「あれはジュエル・シードと言うロスト・ロギアから生まれた思念体…生物じゃない。」

なのは「どうすれば良いの？」

ユーノ「コレを…」

なのは「コレは…？」

ユーノ「魔法を使う為のデバイス…名はレイジング・ハート。」

なのは「レイジング・ハート…。」

ユーノ「管理者権限発動…所有権を彼女に譲渡。僕の後に続いて呪文を唱えて。」

なのは「う、うん！」

そしてユーノの後に呪文を言い終わるのと同時になのはの周りを桃色の光の柱が立ちのぼった。

そして、場面は再び戒に戻る。

戒「凄い魔力だな。」

アル＞しかし、マスターには遠く及びませんね。＜

戒『俺と比較する方が間違ってるぞ？普通に考えてあの魔力量は凄いからな？』

アル＞そうなのですか。＜

戒『ああ。Σ不味い？！』

戒が駆けつけ、なのはが飛ぶより更に上空の所で静観していたが思念体がなのはに向かって勢いよく飛んできた。その様はさながら弾丸の様であった。

なのは「にゃ？！（避けれない！）」

ユーノ「なのは？！」

なのは「？？？」

ユーノ「な？！」

来るはずの衝撃が来ない事になのはは不思議に思い目を開けると目の前に白銀の鎧の人の様な機械人形がなのはの前で障壁を張って突進して来た黒い生き物を止めていた。

なのは「ふぇ？」

？？？『ぼーっとするな！この戯け！』

なのは「ご、ごめんなさい？」
？？？『喰らえ！【白き雷】』
白銀の機械人形は障壁を張っている手とは逆の手に雷を纏いそれを
思念体に向け放ちそれを喰らった思念体は四散した。
？？？『大丈夫か？』
なのは「助けてくれて、ありがとうございます！えっと、貴方は？」
カシム『…カシムとでも呼ぶが良いさ。』
ユーノ「貴方は何者ですか！」
カシム『その前にアレをなんとかすべきでは無いのか？』
な・ユ「「？！」」
思念体「ガアァァァァ！！」
カシム『先に逝くぞ！』
そう言ってカシムと名乗る白銀の者は思念体に向けて拳を振り上げ
て、打ち下ろした。
”ドッガーーン！！“
思念体がいた所に拳を振り下ろした所は周囲を陥没させ、その底で
思念体は動けない様に槍の様な物で串刺しになっていた。
戒『こんな物か…さっさと封印をしろ。』

なのは「は、はい！リリカル・マジカル…封印すべきは忌まわしき器、ジュエル・シード」

ＲＡ＞シリアルＮｏ．？？？？＜

なのは「封印！」

ＲＡ「封印」

そして、思念体が消え、その場には菱形の青色の宝石が浮いていた。

なのは「あれが…」

ユーノ「そう…あれが全ての元凶、忌まわしきロスト・ロギア、ジュエル・シード！」

？？？「我々にはその逆であるけどねぇ～？」

なのは「え？！」

ユーノ「誰だ？！」

なのは達が辺りを見回す中、カシムだけがある一点を睨み付けていた。

カシム『隠れてないでさっさと出てこい。』

？？？「貴方には無駄の様ですね。」

カシムが睨み付けていた所から現れたのはロングコートの様な服に

身を包んだ青年の様な人が現れた。
なのは「えっと、貴方は？」
ＥＶ「私はエルダーヴァンパイア、貴女を今から…殺す者の名です！」
なのは「え？」
ユーノ「なのは？！」
しかしＥＶの攻撃はなのはを貫く事は無くＥＶの腕をカシムが掴んでいた。
カシム『その子に…触れるな！』
“ブン！！”
ＥＶ「なら、貴方から殺してあげますよ！」
そしてＥＶは目にも留まらぬ速さでカシムに接近した。
なのは「危ない？！」
カシム『貴様の動きなど止まって見えるわ！この…戯けが！！』
なのはの言葉など意に介さずカシムはＥＶにカウンター気味の掌底を水月に打ち込んだ。
ＥＶ「ぐっ！何故、貴様の様な下等生物が私の動きに着いて来られ

るのですか？！」

カシム『俺が貴様等…〔不死者〕を狩る存在だからだ。』

ＥＶ「Σなっ？！ならば、この間の私の同朋を消したのも…」

カシム『当たりだ。』

ＥＶとカシムの戦闘と会話を聞いているなのは達は訳がわからない状態でただ傍観しているしかなかった。

なのは「一体何が…」

ユーノ「なのは！大丈夫だった？」

なのは「ユーノ君！うん、わたしは大丈夫。カシムさんが守ってくれたから。」

ユーノ「彼もそうだけど…後から出て来た方からは嫌な雰囲気しか感じられないね。」

なのは「わたしは嫌なって言うより、怖いって感じがするんだ。」

ユーノ「怖い？」

なのは「うん。なんて言ったら良いのかわからないけど、そんな感じにしか表現出来ないよ。（でも、あの時のカシムさんの雰囲気、少し戒君に似てた。）」

カシム『さて、貴様の狙いはあのジュエル・シードの様だな。何の

目的でアレを欲する。』

ＥＶ「ククク…貴方にそれを言った所で我々〔魔族〕を狩る者に教えるとでも？」

カシム『そうか…ならばもう様は無い！！』

ＥＶ「頭に乗るな！人間風情がーー！！」

カシム『その身に刻むがいい……神技』

ＥＶ「Σなっ？！そ、それは？！」

ＥＶが突っ込む時にはカシムが既に懐に潜り込んでその手に持つ魔力で練りあげた剣で何度も斬りつけて上空に跳ね上げると周囲に巨大な槍の様な物が出現し三方向から串刺しにした。

ＥＶ「ぐっ？！貴様…このままで済ますと思うなよ！必ず我が…」

カシム『もうその口を二度と開くな…ニーベルン・ヴァレスティ！！』

ＥＶ「グアァァァァ！！」

カシムがＥＶの言葉を遮り上空に飛び、自身の後ろに魔力で練った羽を広げ、それをまず魔力エネルギーとして分散させて巨大な槍に再構築しＥＶ目掛けて投擲しＥＶの体を貫き、絶命した。

なのは「なんで？！」

カシム『ん？』

なのは「なんで、あんな事するんですか！」

カシム『あれは滅すべき者達だからだ。』

なのは「話し合いでなんとか…

カシム『ならないな。』

なのは「なんで！」

カシム『奴らは人間を見下し自らの糧にしか考えていない。』

ユーノ「彼は一体何者なんですか？」

カシム『奴らの総称は〔不死者〕もしくは〔魔族〕と呼ぶ。』

ユーノ「不死者？」

カシム『不死の者と書いて〔不死者〕だ。』

なのは「どう言う事…ですか？」

カシム『死して冥府の女王〔ヘラ〕により〔魔族〕や〔不死者〕となり、生者に仇なす存在それが奴らだ。』

ユーノ「そんな…では、彼らは何故、ロスト・ロギア…ジュエル・シードを狙ったのですか？」

カシム『目的は判らん…ただ…』

な・ユ「「ただ？」」

カシム『アレを用いて良からぬ事を企てている事は確定している。』

ユーノ「そんな？！」

カシム『それよりも君らは早く帰った方が良いのでは？』

な・ユ「「え？」」

カシム『当の昔に結界は消えているのだぞ？』

そうカシムが言った直後パトカーのサイレンが辺りに鳴り響いた。

なのは「え～と…ごめんなさーい？」

ユーノを抱きかかえ、脱兎の如く走り家に走って行った。

カシム『ふぅ、アル…警官は後どの位で着く？』

アル＞後、十分程になりますマスター。＜

戒『なら、さっさと直すとしますか。【時のアーク】』

俺がそう呟くと周囲の瓦礫がビデオの巻き戻しの様に戻っていく。

戒『ステルス起動…離脱する。』

そう言って闇に溶ける様にして戒もその場から離れた。

高町家

戒『なのは…は戻って来たか。』

窓から見るとちょうど玄関前が見えてなのはが恭也と美由紀と鉢合わせしている所が見えた。

戒『なのはの事は大丈夫だったが、フェイトの方も心配だな。』

アル＞彼女等もジュエル・シードを狙って動いているようですからね。後の問題は〔不死者〕…ですね。＜

戒『一部は別で自分達の存在理由を忠実にこなしているがな。』

アル＞今後も出て来る可能性もあり得るのでしょうね。＜

戒『この上無く面倒くさいがな。とりあえず、もう寝よう。明日から考えて行くさ。アル、これからも頼むぞ？』

アル＞はい。マスターのお力になる事こそがわたしの本懐であるのですから。＜

８＞戒、俺もいるからな？そこの所忘れるなよ？＜

戒『はは、頼もしい限りだな。８、アル、お休み。』

アル＞良き夢を…マスター。＜

8＞ゆっくり休めよ？＜

そして俺の意識は闇に落ちた。

初めての魔法（後書き）

作者「いや～、やっと六話目が出来たね？」

戒『他の作品の方も早く書けよ？』

作者「わかっているよ？でも、なのはの方が色々思い付くからしょうがないだろ？」

戒『この駄作者が！！』

作者「そんな事は判っているよ？」

作者「次回、リリカルなのは、［街は危険しかない］！」

戒『前回もそうだが、嫌な予感しか無いぞ？！』

作者「気のせい、気のせい。無問題、無問題♪」

戒『はぁ、【こおる世界】！』

作者「（カッチーン）」

戒『次回も駄作者共々よろしくお願いします♪』

街には危険しかない（前書き）

遅くなりましたがなんとか出来ましたυ

ご意見やご感想を貰えると嬉しいです。

街には危険しかない

ある河川敷にて戒は士郎がオーナー兼コーチを務める翠屋ＪＦＣのチームの中に入っていた。ちなみにポジションはＭＦである。

なのは「戒く～ん♪頑張れ～♪」

アリサ「しっかりしなさいよー！」

すずか「頑張って～♪」

戒『（何故、こうなったし）』

なのは達が応援している所に向け俺は軽く手を振りながら溜め息混じりに内心で独りごちていた。

時は遡り、昨日の夜になる。

なのは「いっくよ～！」

ＲＡ

なのはの持つＲＡがその姿を変え砲撃仕様になり先端に桃色の環が出現し、思念体を逃がさない様に縛り上げる。

なのは「リリカル・マジカル…ジュエル・シード、シリアルＮｏ．？？」

なのは「封印っ！」

ＲＡ

なのは「はぁ…はぁ…。」

今回で５個目のジュエル・シードの封印になのはは成功しているが魔法を使うようになって日が浅い為か疲労が溜まっている様子が見て取れた。

ユーノ「なのは、お疲れ様。」

そんななのはにユーノは気遣いの言葉をかけるがなのはが応える前にジュエル・シードが空からゆっくりと降りてきた。それをなのははＲＡをジュエル・シードに近づけてＲＡの中に収納した。

学校からの……ジュエル・シード集めの帰り、ＲＡを引きずりながらなのはは歩いていた。

ユーノ「なのは、大丈夫？」

なのは「大…丈夫、平…気だ…よ。」

ユーノが気遣うもなのはも限界なのか息が絶え絶えになりながらもなんとか返事をしていた。

ユーノ「なのは…」

なのは「大丈夫だよ？ユーノ君。」

終始危なげな歩調で歩くなのはとその足下を歩くユーノの前から誰かが近づいて来た。

なのは「ふぇ？だ、誰？！」

ユーノ「キューー！（不味い！）」

2人が警戒する中、向こうから来た人物はなのはのよく知る人であり居候中の戒であった。

戒『なのは？こんな時間にこんな所で何をしているんだ？それに、ユーノまで連れて…』

なのは「えっと？」

ユーノ「キュ、キュ～？」

戒が来た事に慌てるなのはの姿を見て、戒は溜め息を吐きながら落ち着く様にとなのはの頭を優しく撫でる。

戒『はぁ　とりあえず、落ち着け。』

なのは「う、うん／／／」

戒『何をしていたかは聞かんが…無茶だけはするなよ？』

なのは「理由を聞かないの？」
戒『なのはが何をしているかわからんが自分から進んでやっている事なんだろ？なら、俺が口を出す事では無い。』
なのは「戒君。」
戒『さっさと帰るぞ？俺も鍛錬で士郎さんに外出許可を貰っただけだからな。』
なのは「うん。」
そしてなのはが俺の横に並ぼうとして疲れが限界近くまで溜まっていたみたいで足がふらついていた。危なげで見てられないな…
戒『おい、なのはちょっと待て。』
なのは「ふぇ？戒君、どうしたの？」
なのはが返事をする前に戒はなのはの前に移動してしゃがんだ為、不思議に思ったなのはが戒に問いかける。
戒『背中に乗れ。』
なのは「Σふ、ふぇぇ？！／／／／ど、どうして？！？」
戒『足元がふらついていて危ないからだ…拒否するのなら抱きかかえて行くぞ？』
俺は暗に拒否権は無い事を示すとなのはの奴は素直に背中に負ぶさって来た。そして、ユーノは俺の頭に乗って来た。

なのは「戒君…ありがとう。」
戒『何に対してか判らんな。家に着くまで少し寝てろ。』
なのは「うん。そう…する…ね…」
俺の背中にいるなのははそう言いながら意識を手放した。
戒『（まったく、こんなになるまで無茶をしやがって。）士郎さんへ言い訳をしておかないとだな…』

そして、なのはを背負って高町家へ帰宅し、なのはを部屋に寝かせた後に戒は1人、裏手にある道場に向かった。その後ろからユーノが付いて来ている事を知りながら。

戒『ただいま戻りました。』

士郎「うん。お帰り…何かあったのかい？」

戒『ああ、先程の帰りになのはと会ったんだけどかなり疲労している様だったと言うだけなんだ。まぁ、裏の方に少し足を突っ込み気味になって来ている事が心配だな。』

士郎「その時には戒君がなのはを助けてくれるだろうね？」

戒『当たり前だ…なのはは士郎さん達の大事な娘だからな…命に代えてでも守るさ。』

ユーノ「（この人は魔導師なのかな？）」

士郎「戒君も無事で無いと駄目だからね？居候でも僕の家族には変わり無いからね？」

戒『ありがとう。それじゃあ、俺もそろそろ寝るとするか。士郎さんも明日はオーナー兼コーチで試合に行くんだから早起きしないとだろ？』

士郎「うん。そうだね♪僕も少ししたら寝るよ。」

戒『ったく、ユーノ…貴様は少し俺に付き合って貰うぞ。』

ユーノ「キュー？（Σば、バレてる？！）」

士郎との会話が終わり、部屋に戻る最中にそう言って扉の影に隠れていたユーノの首根っこを掴んで戒は自分の部屋に入って行った。

戒『さて、もう喋って良いぞ？先に言って置くが俺は魔導師では無いからな。』

ユーノ「Σ？！いつから気付いていたんですか？（魔導師じゃないってどう言う事なんだろ？）」

戒『…最初からだ。』

ユーノ「Σなっ？！なら、何故、なのはの手助けをしてくれないんですか！」

戒『少し、声量を下げろ…隣で寝ているなのはが起きるだろうが。』

ユーノ「ご、ごめん？じゃなくて、僕の質問にちゃんと答えて下さい。貴方は魔導師では無いのですか？」

戒『違うな…此方の名称は、【魔術師】もしくは【魔法使い】だな。』

ユーノ「魔術師に魔法使い…ですか？魔導師とはどう違うんですか？」

戒『ユーノの言う魔導師ってのは今日、なのはが持っていた杖の様な物を使う奴の事を指しているのだろう？』

ユーノ「はい。正確にはデバイスと言います。なのはが持っているのはインテリジェントデバイスと言います。」

戒『インテリジェント…高度な情報処理機能を持った機械って所か？』

ユーノ「はい。デバイスには幾つかあってその中でも高性能な物がインテリジェントデバイスです。それで魔法を使うに当たって、予め術式をデバイスに組み込んで所有者の状況に合わせて使用する事が出来、デバイスの容量が許す限り様々な状況に応じた物を入れる事が出来ます。」

戒『ほぉ…。』

ユーノの説明に俺は知りながらもあたかも知らない様に装いながら話しを聞いていた。

ユーノ「それで、貴方の言う魔法使いや魔術師とは一体何ですか？」

戒『そうだな…まず、魔術師からだな…基本的に魔術師は自身の研究を第一に考える為に表舞台には稀にしか出てこない。』

ユーノ「その研究とは一体何なんですか？」

戒『強いて挙げるならば非人道的な物や効率良く魔力運用する為の研究かな？で最終的には魔術の秘奥に辿り着くのが目的だ。』

ユーノ「Σ！？」

戒『俺達…魔術師の連中は自身の研究の完成の為なら手段を選ばない奴が多い。ユーノ達とはかなりかけ離れた物になるな。』

ユーノ「え、ええ。僕の世界では非人道的な物等は違法とされていますからね？」

戒『で、魔術師の使う魔術には大きく分けて三種類ある』

ユーノ「三種類…ですか？」

戒『ああ、しかし三種類と言ってもどれも強力だぞ？先ずはルーン魔術これはある無数にあり、それを用いて様々な事象を起こしたりする。そして魔術師とは後方からの攻撃を主体とするが自身に硬化のルーンを用いて近接戦闘をやる魔術師もいる。』

ユーノ「後方なのに肉弾戦闘もこなす人ですか？」

戒『で、次に宝石魔術…これは家系によって違うが俺の知る奴は自

分の血を宝石に垂らしてその宝石に魔力を込めて使っていたな。まぁ、金が嵩むからあまり多用出来ないがな…。』

ユーノ「わざわざお金が嵩む物を何故？」

戒『宝石と言うのはな、触媒としてはこの上なく上等でな？長い年月心血を掛けて魔力を込めてやれば死者の蘇生さえ可能なんだよ。』

ユーノ「Σ死者の蘇生が可能可能なんですか！？」

戒『だが死んだ直後に限るがな…。』

ユーノ「それでも凄いですよ。」

戒『後は、まぁ、投影魔術だな？』

ユーノ「投影…言葉からして何かを作る事が出来るのですか？」

戒『まぁ、若干違うがそれはまた今度にするか。で、それは主に儀礼用の等に用いられるが、殆どが脆い作りにしかならんし、実用性には乏しいな。』

ユーノ「なら、何故それが強い部類に入っているんですか？」

戒『それは極一部…と言うか1人…俺を含めると2人か？まぁ、そいつに関しては置いておくとして…まぁ、簡潔に言えば壊れないだな。』

ユーノ「どう言う事ですか？先程の話とは違うみたいですけど…。」

戒『実際に見た方が早いか？【同調…開始】…。』

そう言って戒は自分の手にナイフを投影して見せた。それを間近で見たユーノは驚愕した。

ユーノ「Σ！？ナイフから魔力が感知されますがどう言う事ですか！」

戒『元々、投影魔術とは何も無い所から自身の魔力を用いて物を複製し使うからコレから魔力を感じるのは当然だな？』

《シャーン》

戒はそう言いながらナイフを破棄した。

ユーノ「魔術に関しては大体判りました。では魔法使いとは僕達魔導師とどう違うのですか？」

戒『まぁ、根本的な所が違うだけ…いや、威力的な物で言えば魔法使いの方が上か？』

ユーノ「根本的な所…ですか？」

戒『ああ、魔導師はデバイスと言う物を用いてやるが、魔法使いにはそれを使わずに色々な魔法を使う事が出来る。』

ユーノ「僕達とは全く違うと言う訳ですか？」

戒『遠からずして近からずだな。まぁ、デバイスの場合は術式を入れて初めて使えるがコチラの方は精霊…もしくは自然に干渉して初めて公使する事が出来る。それと使う為の触媒は杖でも良いし、そ

れ用に加工した指輪等でも可能だな。指輪を用いられる要素は両手が空く事により術者により自由度が増す事が多いが、コレは熟練した者が好んで使うな。』

そして戒はポケットから指輪を出してユーノに見える様にした。

ユーノ「デバイスを使わずにどうやって…」

戒『コレに関しては完全に素質が無ければいかんし、呪文も詠唱しないと使えないからユーノ達はデバイスが一番かもしれんな。』

ユーノ「リンカーコアも無しで大掛かりな魔法も使えるのですか？」

戒『ふむ…それも話さないとだな。此方の魔法は大気中にある魔力を自身に取り込み、それを今度は公使する為の魔力に転用する。まぁ、術者によっては少量の魔力だけで大掛かりな魔法も使えるがな？後、術者にリンカーコアは無いが自身が内包する魔力と言う物があるがコレは精神に関係するのか？俺もそこの所は良く判らんのだ。』

ユーノ「判りました。それと貴方はそれ等を使う事に躊躇いをしたりはしないのですか？」

戒『俺の力を狙って来る奴は殺す位の覚悟もあるし、殺される覚悟もある。』

ユーノ「なのはと同い年に見えるけどかなりの場数を踏んだ人に見えますね。」

戒『そこは、話す事は出来んな。人は誰しも話したく無い事はある

物だ。』

ユーノ「…判りました。僕の質問に答えてくれてありがとうございます。」

俺の言葉にユーノは礼を言って頭を下げて来た。律義だな。

戒『俺はもう寝るから、お前もなのはの部屋に戻れ。』

ユーノ「…うん、お休み。」

戒『それと、何かあったら俺に言え、少しは力になってやる。』

ユーノ「え…

戒がユーノに移送方陣を使いその場から消える直前に言い放ち、ユーノが反応した時にはなのはの部屋の中であった。

ユーノ「彼が助けてくれればなのはの負担も減る…けど、なのはに言っても良いのかな？」

そして部屋にいる戒は既に布団の中にいた。

戒『とりあえずはフェイトが出てくるまではなのはの手伝いをしておくか…済まないけど、アルはスタンドアローンで動いてくれ。』

アル〈了解しました。〉

そして、次の朝はなのは達と士郎さん率いる翠屋ＪＦＣの応援に行った。

戒『あのキーパー動きが良いな。』

なのは「そうだね♪」

アリサ「って言うか、アンタは応援に来たのに寝そべって観戦してるなんておかしいわよ！」

すずか「アリサちゃん？落ち着いて？」

戒『ん？』

戒の姿勢にアリサが怒鳴っているのをすずかがなだめていると戒が何かに気付いて見ると、何やら人が集まっており、見ていると、士郎が戒達がいる土手の方に歩いて来た。

なのは「お父さん、どうしたの？」

士郎「ちょっと、戒君にお願いしたい事があってね？」

戒『俺に…？（面倒な事を頼まれそうだなぅ）』

士郎の言葉に疑問を持ちながら内心不安に思う戒である。

士郎「うん。さっきのプレーでチームの子が怪我をしちゃったんだけど人数が足りないから戒君に助っ人を頼みたいんだ。」

戒『そうだな…なら１得点に付き翠屋のショートケーキで手を打と

う。』

そして現在に至る。

戒『流れでこうなったが、とりあえず3人分だから、ハットトリックをやればいけるな…。』

そう言って、なのは達の方を見るとなのはが元気良く手を振っていた。

男子「よろしくね？」

戒『ああ。（さて、やるとするか。）』

しばらくして試合が終わった。結果だけを言えば5対0で戒のチームが勝利した。そして、その祝勝会を翠屋で開くと言う事で戒達はそれにご相伴する事にした。

すずか「今日の試合凄かったね♪」

なのは「うん！特に戒君の動きが凄かったよ♪」

アリサ「ほんと、わたし達と同い年の筈何だけどね？」

戒『お前達とはちゃんと同い年だぞ？』

すずか「でも、どこか大人びてて…ね？」

なのは「うん。」

戒はなのは達と翠屋のテラスでたわいない話をしていると士郎さんがトレイにケーキと飲み物を持って来た。

士郎「はい、今日の報酬のショートケーキ３つにジュース３つに紅茶だよ？」

すずか「報酬？」

なのは「なんの？」

アリサ「…戒、アンタ何したのよ？」

戒『ああ、今日の助っ人で１得点に付き翠屋のケーキをなのは達に、と士郎さんに交渉したんだ。』

アリサ「気障ね…。」

すずか「戒君、そんな事してたの？」

戒『何、俺が出て可愛いアリサ達が応援してくれるのだからその返しだと思ってくれて構わんよ。』

アリサ「ふ、ふん！／／／」

すずか「もう／／／」

なのは「ふぇ／／／」

戒は紅茶を飲みながらなのは達にそう言うと三者三様の反応をした。

士郎「それにしても、戒君は凄いな。今度は正規のメンバーにしてやってもらいたいね？」

戒『それは遠慮しとく。入れば今回みたいに報酬を要求出来なくなるし、なのは達と一緒の時間が少なくなるからな…？』

3人「「「戒（君。）。／／／／」」」

戒が真顔でそんな事を言えばなのは達が頬を赤く染めるのは目に見えていた。

士郎「そうかい？残念だね。」

戒『気が向いたら行くさ。（ん、今のは？）』

士郎と会話をしていると一瞬だがジュエル・シードの魔力反応があったのを戒は気づいていた。

戒『（なのは…は気づいたが気のせいだと思ってるな、あれは。）』

戒はちょうど、先程の試合で一緒にいたキーパーとそのマネージャーを見ていた。

戒『（あの男の子が持っている様だな。）皆悪いな、少し用事を思い出したから少し出掛けて来る。』

なのは「えー！」

すずか「そうなの？」

アリサ「可愛いわたし達よりもそっちの用事が大事なの？」

戒『済まんな…？この埋め合わせは…そうだな、デートでもどうだ？』

３人「「「デ、デート！？」」」

戒『駄目か？』

なのは「う、ううん！／／／」

すずか「全然！／／／」

アリサ「良いわよ！／／／」

戒『？そうか、じゃあ行ってくるよ。士郎さん、少し遅くなるかもしれないのでそこの所を承知しておいてくれ。』

士郎「あまり遅くならない様に気を付けるんだよ？」

戒『わかった。』

戒はそう言って、翠屋から離れて行った。

なのは「戒君は何の用事なのかな？」

すずか「さぁ？」

アリサ「アイツ、わたし達に何か隠してるわね。」

すずか「何を？」

アリサ「判らないわよ…。今度ミッチリと聞き出してやるわよ！」

な・す「「あ（にゃ）ははυ」」

何故か意気込むアリサを見てなのはとすずかは苦笑するのであった。

そして翠屋から離れた戒は街の中心部近くを歩いていた。

戒『ん？』

アル＜（マスター、どうしました？）＞

戒『（いや…何でもないさ。アル。ただ嫌な予感がしただけだ。）』

８＜（大方、アリサって女がお前の事を（締め上げてやるー！）って所だろ？）＞

戒『（それはそれで遠慮したいな…υ）Σ！？なっ、来たか！』

戒がアル達とそんな話をしていると街の中心に青い光と共に巨大な樹が出現し、街をその無数にある根で蹂躙して行くのであった。

戒『ちっ！なのは達が来るまで被害を食い止めなくてはいかんな！』
そう言って、戒は自分の近くに出て来た根っこを炎の超能力を使い燃やした。

その頃、なのは達は…
なのは「ひ、酷い！」
ユーノ「ジュエル・シードを人間が発動させてしまったみたいだ。」
なのは「どうして人間が発動させたらこんなに風になるの？」
ユーノ「なのは、前にも言ったと思うけど、ジュエル・シードはその内包する魔力を使い願いを叶えてしまう物なんだ。だから今回のこの騒動は発動させた人間の想いが強ければそれだけ規模も大きい物になってしまったんだ。」
なのは「そ、そんな！（わたしがあの時に、もっと気を付けていれば…）」
ユーノの言葉になのはは俯き自身の失敗を悔いていた。しかし、ジュエル・シードからできた樹の化け物はそんな事はお構いなしと言わんばかりにその根をなのはに向けて伸ばして来た。
ユーノ「Σ?!なのは、避けて！」
なのは「Σ?!きゃーーー!?」

なのはが樹の根に捕まりそうになった瞬間、根がなのはに触れる数？手前で凍りついていた。
なのは「え…？」

ユーノ「一体何が？」

なのはとユーノが不思議に思っていると目の前に戒が瞬間移動を使い現れた。

戒『なのは、危なかったな。』
なのは「か、戒君？！ど、どうして、此処に！」

戒『そんな事は後回しだ。今はアレをなんとかしないとだろ？』

なのは「う、うん。そうだね。」

ユーノ「此処まで広いと場所が判らない。なのは、時間は掛かるけど探索魔法は出来る？」
なのは「街の状況が酷いから時間なんて掛けれないよ！見つけて！災厄の根源を！」

そう言ってなのはの足元に桃色の魔法陣が展開され、そこから魔力が光の矢の様な物が四方八方飛んで行き、全体を一気に調べる広域探索魔法を使用した。

ユーノ「す、凄い！」

戒『やはり凄まじい物だな…。』

なのは「…見つけた！」

そしてなのはが見つけた場所は此処からかなり離れた場所の大樹の所であった。

ユーノ「此処からだと無理だ。あそこまでもう少し近づかないと封印は無理だ！」

なのは「ユーノ君、大丈夫だよ！わたしとレイジングハートなら…いけるよね？」

ＲＨ〈オーライ、シューティングモード。スタンバイ、レディ〉

なのはに応える様にレイジングハートはその姿を変える。

ユーノ「長距離魔法？！（この子、砲撃型！）」

戒『邪魔な物は俺が吹き飛ばしてやるよ！』

俺はなのはの邪魔になりそうな根を雷や先程使った氷の能力を使い排除した。

戒『なのは、今だ！』

なのは「うん！リリカル・マジカル、シリアルＮｏ．？！封印！」

ＲＨ「シーリング」

レイジングハートの先端から極太の光が迸りジュエル・シードを包

み、そして街もその桃色の光が包んだ…

戒『終わったか…。（にしても酷い有り様だな。）』

俺が街の様子をビルの端から見ている間にジュエル・シードを回収し終わったのかなのはがこっちに近づいて来た。

なのは「あの…戒君？」

戒『お疲れさん。今回は危なかったな？』

なのは「うん。戒君はわたしがやってる事を…」

戒『知ってるよ。』

なのは「え？」

ユーノ「なのは、彼は既に僕達の事は知ってるよ。」

なのは「ふぇ！？」

戒『済まんな、今まで黙っていて。』

なのは「戒君も魔導師なの？」

戒『カテゴリー上、そうとも言えるしそうじゃないとも言えるかな？』

ユーノ「さっきのは前には見せて貰ってませんけど、あれも魔法なのですか？」

戒『あれは違う物で、なのはは知ってると思うけどＥＳＰ…所謂【超能力】と言う物だ。』

なのは「ふぇ～～。」

戒『…なのは、わかって無いな？』

なのは「そ、そんな事無いもん！」

ユーノ「なのは、目を反らしながら言っても説得力が無いよｕ」

戒『とりあえず、この惨状を直さないとだな。』

ユーノ「街を直せるんですか！」

戒『今から使う魔法は有機物以外ならある程度は直せるな。』

なのは「戒君って凄いね。」

戒『ジュエル・シードを封印してそれで終わりじゃ無いからな…。ちゃんと事後処理をしないといけないからな？』

ユーノ「確かにそうですね。」

戒『始めるか…【時のアーク】』

ユーノとの話を切り上げて戒は時間逆行の魔法【時のアーク】を使

い、街の倒壊した建造物や抉れたコンクリートを修復していった。

ユーノ「凄い…あの惨状を一瞬で…。」

戒『今のは壊れる前の時間まで巻き戻したにすぎない…。コレの効果範囲は自身が持つ魔力が強大であれば街1つなぞ造作もないぞ？』

俺がユーノにそう言ってる隣でなのはが何やら重たい空気を醸し出して俺達に話しかけてきた。

なのは「ユーノ君、戒君…わたし…いろんな人に…迷惑…掛けちゃったね…。」

ユーノ「なのは、何を言ってるんだ！なのはは良くやってくれてるよ！」

なのは「そんな事ないよ…。わたし、気づいてたの…あの子がジュエル・シードを持っている事をでも…気のせいだって…思ってた。」

消え入りそうな声でなのはの奴は話ししゃがみ込んで肩を震わせていた。

ユーノ「なのは！そんな悲しい顔をしないで！これは元々僕が原因で…なのははそれ手伝ってくれてるだけだから…だからそんなに責任を感じなくていいんだ。」

しかしなのはは余計に俯いてしまった。

戒『戯けが…そんな事で挫けるのか？』

ユーノ「戒…！そんな言い方…」

ユーノが非難するが戒はそれにどこ吹く風と言った形でなのはに話しを続ける。

戒『貴様が選んだ道はこの様な事がこれからも起こるのだぞ？それを一々気にしていたら先にはいつまで経っても進めないのだからな…。』

なのは「なら…なら！わたしはどうすれば良いの！わたしの失敗の所為でいろんな人に迷惑を掛けて責任を感じるなって言うの！？」

戒『そこから間違っているぞ…人は誰しも人に失敗もすれば迷惑かけるし、間違いだって起こす。この俺でさえ失敗をするしな…。』

なのは「戒君が？」

戒『俺だって人だ、もしや失敗とは無縁だと思ったか？』

なのは「そ、そうじゃないけど？」

戒『兎に角、今回は自身の失敗を糧に次は失敗をしなきゃ良い。』

なのは「……うん。」

戒『はぁ、なのは？俺が一番嫌いな奴はな、失敗してもそこから学ばん奴だ…なのはお前はどうだ？』

なのは「……」

戒『顔を上げろ…なのは！』

戒の怒鳴る声に肩をビクッと跳ね上げ顔を上げ目の前で腕組みをしてなのはを上から見下ろしていた。

戒『人間は誰しも失敗をするその失敗に一々挫けてたら切りがない…諺に失敗は成功のもとってあるだろ？だから次に失敗しなければ良い…。なのはならちゃんとやれるさ…。』

なのは「戒君！わた…し、わたし…」

なのはの頭を優しく撫でながら戒は諭す様に話し、なのはは立ち上がり戒に抱きついて声が出ない様に泣いていた。

しばらくしてなのはが泣き止むとその状態で戒に話しかけてきた。

なのは「戒君、ありがとう。わたし頑張るね。戒君に言われた事、絶対に守るよ。」

戒『フッ、それならば良い…。』

なのは「／／／（その笑顔は反則なの？）」

ユーノ「と、とりあえずそろそろ帰らないと」

今の空気に耐えかねたユーノは話しを変えてきた。

戒『確かにそろそろ帰らないと志郎さん達が心配するな…。』

なのは「は、早く帰らないと？」

ユーノ「ちょっとなのは待って？」

戒『やれやれ、忙しない奴等だな…。』

戒はそう言ってなのは達に続いてビルの屋上から立ち去った。

街には危険しかない（後書き）

作者「で、出来たｏｒｚ」

戒『なんで遅くなった？』

作者「モンハンが楽しくて…。」

戒『先に書き終わってからにしろよ！』

作者「だってさ、ジンオウガ装備やベリオロス装備を完成させたかったんだよ。やってる人なら判るよ？上位のジンオウガやベリオロスのめんどくささがさ！」

戒『それは良いから次の話はどうなるんだよ。』

作者「次回はあの子との会合になるね。」

戒『次回、運命の会合』

作者「多分遅くなりますがお楽しみに！」

戒『とりあえず、イビルジョーは倒せる様に頑張れ。』

作者「あれは死ねるぞ！」

運命の会合（前書き）

２週間近い間が空いてしまいましたが、更新出来ました？今回の話の最初である方が出て来ますが無印編での黒幕的な感じになっていますのであしからずｍ（＿＿）ｍ

運命の会合

―？？？？？―

？？？「首尾はどうなの？」

？？？「問題ない…と言いたいが数人の部下を失って、ＪＳの奪取にも失敗をした…。」

何も無い空間……虚無とも取れる其処には黒髪に浅黒い肌で端正な顔付きの男がいて画面には薄い紫色の髪で腰の下まで伸ばした艶麗の女性が映っており、会話をしていた。

？？？「貴方の部下だから有能かと期待したのだけれど、期待外れの様ね？」

？？？「フン！結局は下っ端だ…次からは少しランクを上げたヤツを送り込むさ…。」

？？？「それにしても、貴方の部下と言うより、駒…になるのかしら？その駒共にわたしの人形の手伝いをさせて貰えるかしら？」

？？？「どう言う事だ、プレシア・テスタロッサ？」

男にそう呼ばれた女性は妖しい笑みを浮かべてこう応える。

プレシア「あら、わたしの人形なら確実にＪＳを集められる筈よ？それに其処へロキ、貴方の駒を上手く使えばより効率的に回収が出来るわ。」

プレシアにロキと呼ばれた男は思案する様に目を閉じる。そして…

ロキ「良いだろう。プレシア・テスタロッサ、貴様の提案を受けよう。とりあえず、駒として俺の方からキマイラを貸そう。」

プレシア「なら、わたしからは他には何も言う事は無いわね。また何かあったら通信をするわ。」

そう言うとプレシアは通信を切り、それと同時にモニターも消えてその場には虚空に漂うロキだけになった。

ロキ「フフフ、貴様はこの俺を利用しているつもりの様だが、貴様は俺の手の平で踊っているに過ぎない事に気付かないのだろうな…。貴様の不運とされる事故やその心も俺の仕向けた事と言う事にも気付かずに…な。そして……クククッ！フハハハハハッ！！！！」

そして、虚空に漂うロキその空間に声を響かせながら闇の中に溶ける様に消えた。

そして、場所は変わり、戒達のいる。第９７管理外世界名称は地球になる。そして、戒は高町家の大黒柱である、高町士郎と２人で家の裏にある道場に立っていた。

―高町家　道場―

戒『士郎さん、今日の学校なんだが、居候の身なのだが、休ませて貰えないか？』

士郎「……何か理由があるのかい？」

戒『完全に私用だけどな？少し、人に会いに行くのだけど、時間が掛かるから今日1日だけ休ませて貰いたいんだ。』

士郎「まぁ、戒君の事だから心配は要らないと思うけど、無理だけは駄目だからね？」

戒『ほんとうに士郎さんは俺の事情もそうだが、理由や用事の事を深くは聞かないのだな？』

士郎「何か変かい？僕は我が子の様に戒君の事を信じているからね？深く聞く積もりも無いし、戒君の事だから何れは話してくれるのだろうしね？」

その言葉に戒は、その勘の鋭い事に呆れを通り越して驚愕するしかなかった。

戒『……確かに、いずれにせよ話す事もあるかも知れないが何時になるか判らんぞ？』

士郎「なら、その時をゆっくりと待つだけだよ。それにその用事と言うのは最近のなのはに関する事だろうしね？」

戒『何故、其処でなのはが出るｕ（勘と言うのなら既に野生の域だぞ！？）』

士郎の言葉に戒は内心ではかなり動揺しており、表面に出さない様にしているが背中からは嫌な汗が少し流れていた。

士郎「この頃かな？なのはが夜に家をコッソリと抜け出したりし始めたのは…。それに戒は関わっているんじゃないかなってね？勿論だが桃子はこの事に関してはまだ何も話していないから安心してくれても良いよ。」

戒『やはりと言うか、親には隠し事は出来ないと言う事だな。全部は言う事は出来ないが、確かになのはが関わっている事は確かだ。但し、危険な事に片足をぶち込んだ状態だがな？』

士郎「……それはどの位危険な事なんだい？」

戒『分かり易く言うと、士郎さんのいた裏よりも深い所…と言う冪所だ。だが、なのはには危険が無い様にフォローをする積もりだし、危険だと判断したら、即刻止めさせる積もりだ。あの筋金入りの頑固者が聞けばだが…υ』

士郎「其処の所は僕より詳しく知っている戒君に任せるよ……くれぐれもなのはの事を頼んだよ？」

戒『大丈夫だ。なのはの事はしっかりと守ってやるさ。それに、アイツは手の掛かる妹みたいな者だから一緒にいて退屈は絶対にないし…な？』

士郎「ふふふ、それじゃあ、そろそろ家に戻ろうか？桃子の朝食の支度が終わる頃だからなのは達も起きて来る頃だしね？」

戒の言葉に士郎は少しだが笑うと朝食の時間だと言い、戒と一緒に家の中に入って行った。

戒『それじゃ、行ってきます。』

士郎「気を付けてね？」

桃子「学校の方には風邪で休むって事にして置くわね？」

恭也「なのは、くれぐれも口を滑らせるなよ？」

なのは「にゃ！？そんな事しないよ～！」

美由紀「なのはなら有り得るからね～（笑）」

なのは「美由紀お姉ちゃんまでー！！」

戒『ハハハハ。それじゃ、なのはも気を付けて、学校に行けよ？』

なのは「うん！戒君も気を付けてね♪」

そして、戒はなのは達とは逆方向に歩き出して、ある程度離れると、自身に認識阻害の魔法を掛けて、アルに調べさせておいた、とある高級マンションに向かった。

戒『此処か。とりあえず、チャイムを鳴らすか？いや、その前にこの姿だと先ず間違い無く怪しまれるから、青年期に体を変えておいた方が良いな。』

そう言うや否や、戒は自身の体を能力で青年期の姿に変え、服はギルガメッシュが着ていた黒で統一された学生服になっていた。

戒『よし！これなら、万が一にも子供だとバレる事は無いな。』

そして、改めて戒はインターフォンに手を伸ばし、いざチャイムを鳴らそうとした次の瞬間。

???「あ、あの、わたしの部屋に何か御用ですか？」

戒の横には金の長髪を黒のリボンでツインテールにし、黒のワンピースを着た少女が立っていた。

戒『あ、ああ。友達がこの部屋に住んでいた筈なんだが、君の様な妹はいない筈だから、違ったかな？ごめんね？（外にいたとは予想外だなυ一旦戻るとしようυ）』

???「あ、あの！！」

戒『なにか？（さっきのを見られていたかυ）』

戒が少女の横を通り過ぎ、エレベーターの所まで後一歩と言う所で少女に呼び止められる。

???「少し、家に来ませんか？」

戒『他人をそんな簡単に上げて大丈夫なのか？』

???「大丈夫って何がですか？」

戒『とりあえず、あがらせて貰うよυ（忘れてたυこの子は原作でもかなりの天然ドジッ娘だったなυ）』

？？？「どうしました？」

戒『イヤ、なんでも無いよ。』

戒はそう言って少女に施される儘に少女の部屋に招かれた。

？？？「フェイト～おかえり……ってアンタ誰だい！？フェイトに近付くんじゃないよ！？」

部屋に入ると若干白が混じった明るい橙色の長髪をした女性が威嚇の念を込めた視線を戒にぶつけて、近くにいたフェイトを自分の近くに引っ張った。

戒『誰と言われても困るのだが、その子に部屋へ招かれただけなんだが？』

？？？「……フェイト、そうなのかい？」

フェイト「うん。だから、アルフそんなに睨んだら駄目だよ。」

アルフ「フェイトがそう言うなら良いけどさ…あたしはアルフだよ。よろしくしてあげる……けど！フェイトに手を出したら、ただじゃ置かないよ！」

ギル（戒）『わかったわかったυ（流石に精神年齢的なモノが千を超えそうだからそんな事は無いがな？）俺は…ネイシスだ。呼びにくいならネイスで良い。』

戒は本名を名乗らずに偽名を使うが、少女達に嘘の名前を名乗るか

らか、少なからず罪悪感を覚えた。

アルフ「変な名前だね？まっ、よろしく頼むよネイシス。」

フェイト「よろしくねネイスさん。」

ネイシス（戒）『それにしても、アルフ、気になるのだが、君のその耳と尻尾はアクセサリーか何かか？（知ってはいるが、後々の事を考えると協力関係の様な物を築いた方が得策だからな。）』

フェイト「ええっと？それは？」

ネイシス（戒）『あぁ、言いたくなければ良いよ。ただの興味本意で聞いただけだからな。』

フェイト「す、すいません？」

ネイシス（戒）『謝る必要は無いよ。そう言えば、親御さんは居ないのか？』

戒の言葉にフェイトは暗い顔をし、アルフは明らかな嫌悪の表情を浮かべていた。

ネイシス（戒）『済まない、聞いては不味かった事だったみたいだな…。』

フェイト「あ…いえ、そんな事は…。」

アルフ「アンタって人の心の中にズカズカと入って来るんじゃ無いよ！失礼にも程があるね！」

ネイシス（戒）『済まない。お詫びと言う訳では無いが、この宝石をやるよ。』

戒が懐から取り出したのは菱形の綺麗な蒼色をした宝石であった。そして、それを見た2人は驚愕する。

フェイト「ネイスさん！それを何処で！？」

ネイシス（戒）『これは森で拾った物なんだが、綺麗でずっと持っていたんだよ。この宝石が内包した魔力も凄まじいが、既に解析は終わって、俺にとっては無用の長物だな…。』

アルフ「魔力って、ネイス、アンタは魔導師なのかい！？」

ネイシス（戒）『いや、違うな…。俺はその魔導師ってのは判らないが魔術師や魔法使いと言うヤツだよ。』

フェイト「それって、どう違うの？」

ネイシス（戒）『ん～、どうと言われてもな…そもそも、俺は魔導師と言う存在を知らないから比較のしようが無いから判らないな。』

フェイト「魔導師を知らないの？」

ネイス（戒）『ああ。俺はこの地球で生まれて、この方ずっと魔導師と呼ばれる者を見た事が無いからな？逆を言えば魔術師や魔法使いと言うのがこの世界ではそっちが主流になっているな。』

アルフ「へぇ～、アタシ等が知らない事もいっぱいあるんだね。」

フェイト「説明するとわたし達魔導師は、デバイスって言う物を使って魔法を公使するんだよ。それでこれがデバイスって言うんだけどこれはまだ待機状態で起動するには起動する為の呪文や相性によってはｓｅｔｕｐって言うだけで起動できるんだ。」

そう言ったフェイトは手の平に金色に光る三角形のデバイスと言われる物をネイス（戒）に見せた。

ネイス（戒）『ほぅ…。かなり小さな物なのだな？この手の平サイズに収まるコレが魔法を公使する為の物と言う言う訳か？』

フェイト「実際に見せた方が早いけど…。」

ネイス（戒）『何か不味い事がある…あぁ、俺が先に見せた方が良いか。』

アルフ「どんな物を見せてくれるんだい？」

ネイス（戒）『簡単な物で武器かな…〔同調開始〕トレース・オン。』

戒は手の平に意識を集中させて、自身の中にある今まで見てきた武器の記憶と英霊エミヤの記憶から簡素な短剣と思しき物を投影する。何も無い所から短剣が出現するそれを間近で見た２人は驚愕した。

アルフ「なんも無い所から剣が出て来たよフェイト！？」

フェイト「それは…質量兵器？」

ネイス（戒）『なんだそれは？』

フェイト「物理的質量を持った武器等の事を総称して質量兵器って言うんだ。」

ネイス（戒）『厳密にはコイツはそれに引っ掛かるか判らないな…。』

アルフ「どういう事だい？」

ネイス（戒）『俺の今作り出した物は魔力によって作られているからな…。物理的質量と言われてもまず当てはまるか判らないだろうがな…。』

フェイト「魔力の物質化って、レアスキル？みたいな物なのかな？」

ネイス（戒）『…言い方からすると特殊技能の様な物か？』

フェイト「うん。似たような物だけど、正確には他の人が持たない希少な能力の事を言うんだ。」

ネイス（戒）『成る程な…。』

その後もフェイトと俺は魔導師と魔術師の違いをお互いに色々と話しをしている時に俺はふと、自分のしている時計を見るとそろそろ昼時という時間になっている事に気が付いた。

ネイス（戒）『そろそろ、昼にしないか？時間も時間な事だし、フェイト達も腹が減ってきたのでは無いか？』

フェイト「あ、わたしは大……」

丈夫と続け様としたフェイトのお腹から控えめな音が聞こえ、フェイトは頬を赤らめて俯く姿は微笑ましく、そして可愛くもあり、保護欲を掻き立てるモノがあった事を此処に記す。

ネイス（戒）『ふっ、少し台所を借りるぞ？』

フェイト「えっ！？」

フェイトは俺が言っている事が意外だったのか、吃驚したとでも言う声を出しているな。

ネイス（戒）『むっ！俺が料理が出来ないとでも思ったのか？』

フェイト「あ、そう言う訳じゃ？」

ネイス（戒）『自慢じゃないが家事全般そつなくこなす事は出来るぞ！』

フェイト「はぁ」

アルフ「男なのに変わってるね～？」

ネイス（戒）『ほっとけ。自炊は1人暮らしには必須スキルなのだよ…。』

そう言ってネイス（戒）はキッチンに行き、冷蔵庫を開けると大量のミネラルウォーターがあり、棚の所には数種類のインスタント食品だけがあり、フェイト達は食事をインスタントで済ませていた実態にネイス（戒）はただ驚愕する。

ネイス（戒）『なんだ…これは…？』

アルフ「何って飯じゃないかい。」

ネイス（戒）『そう言う事では無い！育ち盛りの子がインスタント等とバランスの悪い物を食べている事を言っているのだ！！』

アルフ「そんなに怒鳴らなくても美味いのだから良いじゃないかい。」

ネイス（戒）『少し待っていろ！食材を買ってくる。』

そして、俺はマンションを出て、何時までか判らないがセール中の看板を出しているお馴染みのスーパーに出向き、有り得ない速度で買い物を済ませて、フェイトの住むマンションに戻るとアルフが空腹の為かテーブルに突っ伏していた。大丈夫かυ

ネイス（戒）『今戻った。直ぐに始めるから、もう少し待っていろ。』

アルフ「アタシはもう待てないよ～？」

フェイト「アルフ、もう少しだから我慢だよ。」

アルフ「フェイト～（泣）」

ネイス（戒）『……始めるか。』

アルフの状態が凄い事になっている事もあり、即興で作れる物で和食をチョイスし、鯵の開きに味噌汁にご飯と漬け物と言うかなり簡単な物だが、我ながら上手く出来たと思っていると飯の匂いに釣られてアルフは先ほどまで調理の邪魔だと言い、リビングのソファに行って貰っていた筈なのだが、既にテーブルに着いており、食べる為のスタンバイをしていた。お前はどこぞの青猿だ！！

フェイト「美味しそうだね、アルフ。」

アルフ「それじゃ、さっそく！？」

アルフが直ぐ様ご飯に箸をつけようとすると、ネイス（戒）がアルフの頂頭部にお玉を軽く当てるとアルフは吃驚してネイス（戒）を睨み付ける。

アルフ「何すんだ…！？」

アタシはご飯を食べようとしたらいきなり頭の天辺をお玉で叩いてきたネイスに文句を言おうとネイスに振り向いたらアレを見たんだけどアレって確か、こっちの世界にいたって話の鬼なんだけど、ネイスの背後にそのお面みたいなのが漂っているのを見て黙るしかないじゃないかい！恐すぎだよ！アイツってほんとに人間かい！？

ネイス（戒）『御飯を食べる前にやる事があるだろう？』

2人「「やる事？？？」」

ネイス（戒）『君達の世界では食事の前の感謝を込めての合掌をしないのか？』

アルフ「何に対してなんだい？」

ネイス（戒）『全ての命に対しての御礼と感謝を込めて…だ。俺達の世界では普通にと言っても全世界がそうとは言わないが、最近の者達はその意味をまったく知らずにしているが、俺達が食べている動植物にも命があり、牛や鳥に魚と言った動物達等の命を刈り取って俺達の食生活は成り立っている訳なんだ。そして、人間の多くが口にするお米を作ってくれている御百姓さん達にも感謝を込めての合掌だ。』

アルフ「アタシは考えた事は無かったね。言われてみれば、確かにアタシ達は色々な物を食べて生きてんだから当然やらないと罰があたるねυ」

フェイト「そうだね。」

そして俺はそれを見て、俺自身も座り、合掌をすると2人も俺に習う様に手を合わせる。そして…

ネイス（戒）『いただきます。』

2人「「いただきます。」」

俺に続けて2人は声を揃えて言い、皆で食事をした。その後はしばらくの間フェイト達と談笑をし、此からは協力して集める事を約束する事まで出来た事にネイス（戒）は内心で結果は上々と感じていた。

ネイス（戒）『それじゃ、また今度会おうな？』

フェイト「…うん。」

アルフ「ネイスの御飯は美味いからまた直ぐにでも来て欲しいもんだね～。」

ネイス（戒）『とりあえず、晩飯用は冷蔵庫に入っているから温めて食べてくれな？』

アルフ「ほんとかい！？ありがとよ～！」

ネイス（戒）『それじゃ、少し早いがお休み…。』

フェイト「おやすみなさい！」

そして、俺はフェイトの声を聞きながら部屋出て、マンションを後にする。それにしても今回の会合で得る物は少なかったが繋がりを持てただけでも収穫だったかな？

―フェイトｓｉｄｅ―

フェイト「おやすみなさい…か。」

わたしはさっきまでいたネイスさんの事を考えていた。魔導師では無いけれどそれに似た力を持った人でＪＳ（ジュエルシード）を条件をなにも付けないで渡してくれたあの人を不思議に感じていた。不思議でいて、温かく何故か安心してしまう雰囲気を持ってたな。わたしに兄弟とかい

たらお兄ちゃんかな？あ、あれっ？わたしってば何を考えてるの？
／／／／／／

アルフ「フェイト～、そろそろ行かないとじゃないかい？」

フェイト「あっ！／／／／／わかったよ。アルフ。」

アルフ「フェイト、顔が赤いけど大丈夫かい？なんなら今日位は休むかい？」

フェイト「大丈夫だよ。行こう…アルフ。」

わたしは一度だけ頭を振りネイスさんの事から母さんの望むＪＳの捜索に気持ちを切り替える。…母さん、待っててね。

―フェイトｓｉｄｅｏｕｔ―

運命の会合（後書き）

感想をお待ちしております。

開戦！！不屈と雷神、守護者と…猫？（前書き）

１ヶ月振りの投稿ですが駄文になったかも知れませんが質問等がありましたら宜しくお願いしますｍ（　　）ｍ

開戦！！不屈と雷神、守護者と…猫？

戒『なのは、もう朝だぞ？』

なのは「う～ん、もう少し寝かして～？」

戒『なのは、そろそろ起きないと今日はすずかの所へ遊びに行くんだろ？』

なのは「にゃぁ！？そうだ！すずかちゃんのお家に遊びに行くんだった！！直ぐに支度するよ～～？？？」

戒『着替えて下に来いよ？もう恭也さんは支度が出来て後はなのはだけだからな？』

なのは「にゃぁ～～！？それを早く言ってよ～！？」

戒『早く起きないなのはが悪いぞ？それと左上の髪が跳ねてるから直してから下り来いよ？』

なのは「戒君の意地悪ぅーーー！？」

戒の言葉になのはの声が家の中に木霊した。そんな高町家の朝の風景であった。そして……

―月村邸前―

戒『でかいなぅ』

恭也「そうだな…。鳴海市周辺を裏から管理している訳だから家が大きいのは当然だな。」

なのは「戒君、お兄ちゃん早く行こうよ～！」

戒『なのは、ちょっとは待てよ ｕ』

恭也「まったく。」

恭也は2人を見ながら門の横に設置されたインターフォン押すと目の前の大きな門がゆっくりと左右に開かれ、中から薄紫色の髪をショートカットにし、メイド服を着た女性が柔らかな笑顔で3人を出迎えてくれた。

ノエル「恭也様、なのはお嬢様、戒様。いらっしゃいませ。」

なのは「ノエルさん、こんにちは～！」

恭也「御招きに預かったよ。」

戒『……お邪魔する。』

なのは「戒君、固いよ？」

ファリン「恭也様、なのはちゃんいらっしゃいませ。」

なのは「あっ！ファリンさん！こんにちは！」

門をくぐると此方に近付いて来るのはノエルと同じくこの屋敷で働

くメイドのファリンが近付いて来る。その容姿はノエルと同じ髪色だが長さ違いセミロングになっておりノエルよりかは若干だが幼い顔立ちですずか専属のメイドでありノエルの妹でもあるのだ。

ノエル「恭也様は此方へ。」

恭也「それじゃあ、なのはは友達とだったな。帰る時に迎えに来るから楽しんでな？戒はなのはの事を頼むぞ？」

戒『判った。』

なのは「うん♪」

ファリン「それではわたしに付いて来て下さい。」

そうして、戒となのははファリンに連れられて恭也と別れ、すずか達が待っている中庭に向かって行く。

アリサ「なのは、戒、遅いわよ！」

すずか「なのはちゃん、戒君、いらっしゃい♪」

なのは「にゃはは？遅れてゴメンね？」

戒『まったくだ。そもそも遅れた要因はどこかの寝坊助が涎たらして爆睡していた事とそれを起こすのに時間が掛かったからだな…。』

なのは「うぅっ ᴗ」

アリサ「それよりもさっさと座ったら？」

アリサに施され、２人はテーブルに座った。その際に周りにいる猫が戒の周囲に群がり猫のおしくら饅頭状態になってしまった。

戒『……何故、コイツ等は俺に群がってくる？』

戒は自分の頭に乗って垂れている猫を一瞥してすずかに聞いた。

すずか「……多分だけどこの子達は本能的な所で戒君が一番安心出来る存在だからじゃないかな？わたしでも此処までこの子達がリラックスしてる所は見ないからね。」

戒『俺が安心出来る存在……か。』

戒の言葉にすずかは思案しながら戒の質問に答え、戒は自嘲気味にすずかの言った言葉を反復する。

アリサ「どうしたのよ？」

戒『いや…何でもないよ。』

アリサ「ふーん。」

戒の返しにアリサは訝しげに見ていると家の中からファリンが４人分のケーキと飲み物を持って歩いて来たがその足取りは危うい物であった。そんな彼女の足元をユーノが猫から逃げる為に横切った際それに驚いたファリンはバランスを崩してしまった。

ユーノ「キューーー！？」

なのは「Σユーノ君！？」

ファリン「Σえっ！？」

アリサ「危ない！！」

すずか「ファリン！？」

3人が悲鳴を上げる中、戒が直ぐ様動いてファリンを支え、トレイを器用に片手で持っていた。

戒『……大丈夫か？』

ファリン「は、はい！すいません？」

アリサ「対応が早いわね…？」

戒『いつ何時でも動ける事が俺の特技みたいな物だからな…。』

すずか「凄いね！」

戒『そうでも無いさ…。所でなのは、ユーノをしっかりと見て置かないとだろ？一応ユーノの飼い主はなのはなんだからな？ファリンさんは怪我は無い？』

なのは「う、うん。」

ファリン「す、すいません？」

戒『気にするなって。それよりも早く体を起こしてくれると助かる

んだが……』

ファリン「ひゃ、ひゃい！！」

そう言われてファリンは奇怪な返事をしつつ自身の体を起こして、戒からトレイを受け取り、それを確認した戒は自分が座っていた席に座り直した。

戒『まったく。ユーノは少しは猫に反撃でもしたらどうだ？猫は逃げる者を追う習性があるのだから逃げたら逆効果だと言うのにコイツは判らんのかな？』

アリサ「小動物なんだからしょうがないでしょ？」

なのは「にゃはは？」

なのはが苦笑しているその時少し離れた所でジュエルシードが発動するのをユーノとなのはは感じた。

ユーノ「！！！！〈なのは！！ジュエルシードが！〉」

なのは「！？〈ど、どうしよう？〉」

戒『〈先ずはユーノが先に向かって、なのはが何か理由を付けて追えば大丈夫だろ。俺もその後から直ぐに行くからな？〉』

なのは「〈判ったの！！〉」

ユーノ「キュ、キューーー！！」

アリサ「あっ！」

なのは「ゆ、ユーノ君？」

すずか「ユーノ君はどうしたのかな？」

なのは「多分、何かを見つけたんだと思うよ。わたしちょっと探しに行って来るね？」

アリサ「あんた1人じゃ不安だからあたしも一緒に行くわよ？」

戒『……その心配は無用だ。俺が一緒に行くからな…。』

アリサの問いに戒は少し間を置いて答える。

すずか「戒君が一緒なら大丈夫だね。」

アリサ「さっさと戻って来なさいよね！」

戒『なるべく早く戻るよ。行くぞ、なのは。』

なのは「う、うん！」

そして、席を立ってユーノが走り去った方向に2人は走り出した。すずか達に早く戻ると言った手前だからか2人の走る姿は何処か急いだ感じに見受けられる。そして、2人はジュエルシードの反応がある方向に向け走っていたが急に反応が強くなったのをなのはとユーノが感じ取り驚愕する。勿論の事だが戒はその前から強くなる兆候を感じていたので驚愕する事はなかった。

なのは「反応が大きくなった！？」

戒『……発動したか。』

ユーノ「此処だと人目に着きやすい…結界を作らないと！」

戒『認識阻害とは違う物か？』

ユーノ「最初にあった時に使った魔法！魔法効果が有効な空間とそうじゃない通常空間との時間をずらすんだ。」

戒『時間の遅延と空間の隔離を同時に行う…か。凄いじゃないか。』

ユーノ「僕の少し得意な魔法の一つなんだ。」

そう言うユーノの足元には白のミッド式の魔法陣が現れる。

ユーノ「あまり広範囲には施せないけど…この庭周辺位なら…」

戒『（それでも十分に凄いのでは無いのか？）』

すずかの家の庭は郊外にあるからかかなり広く、一戸建てが幾つ建つがそれらをその結界の効果範囲内に収められるユーノの結界魔法は非凡な物であるのは魔術等を使う戒から見ても一目瞭然であった。そして、結界が展開されると周りの景色の雰囲気がが変わると少し離れた場所が青白く光っていた。

なのは「彼処！」

ユーノ「行こう！なのは！」

戒『Σ待て！』

なのは「ど、どうしたの？」

俺の制止になのはやユーノが困惑するがそんな事は関係無い。あの先にあるのはなのは達に取っては最悪な物が其処にいる事を俺は感じているからだ。目の前に広がる庭の奥で光っている場所を睨んでいると何かが此方に走って来るのが見えるがその姿は異常の一言に尽きる。遠目に見て猫だと判るがいかんせん距離が離れている為に見えない筈なのだがなのは達の目から見ても猫だと認識出来、その猫が近付いて来るのに対し徐々にその姿が大きくなっている事を嫌でも思い知らされる事になっていた。

猫「ウニャァァァァ！！！！」

そして猫はドドドと走って俺達の横を通り過ぎて行く。

なのは「あっ！待って！？」

戒『ユーノとなのはは猫を追ってくれ！』

なのは「戒君は？」

戒『俺はこの先に用があるからな…。直ぐに済ませてそっちに向かう。』

ユーノ「判った！なのは行こう！」

なのは「う、うん。戒君、気を付けてね？」

戒『さっさと行け。あの巨体だから見失う事は無いと思うが他の魔導士とやらアレを狙っていないとは限らないからな……』

ユーノ「判った。急ごう！なのは！」

そして猫が走り去った方向に向け、なのはとユーノは再び走り出し、戒はその後ろ姿を見送った後、猫が走って来た方向に目を向けると其方の方向から異質な空気を感じていた。

戒『まったく。デーモンやヴァンパイアがいると言う事は原作には無い展開だと思っていたら今度は合成獣［キマイラ］か…。』

戒が其方に集中していると重々しく歩いて近付いて来るのは犬ともライオンとも言えそうな姿に尾が蛇の怪物であった。そしてその怪物は目の前に戒がいる事を確認したのか、殺気を込めた咆哮をする。その際に怪物の周りの地面が咆哮をした際に生じた衝撃で軽く砕ける。

戒『やる気満々だな…。だが、さっさと終わらせて貰うぞ！！』

騨ッ！！と戒は自身の脚で地を砕きながら踏み抜くとキマイラの懐へ一息で潜り込むと腹辺りに魔力で強化した拳で打ち抜きキマイラの巨体を数十メートル上へと打ち上げる。

戒『臥竜空破！！！！』

戒は打ち上げた姿勢から更に脚を踏み出す、その際に更に地を砕き数十メートル上に身を投げ出した状態でいるキマイラの腹部へと氣

を纏った拳をアッパーカットの要領で打ち抜いてキマイラの更に上へと飛び上がる。キマイラは地上でならそれなりに強い魔獣なのだが空中ともなると敵意を露わにした顔を此方に向けて咆哮するのだけが精一杯になってしまう。

戒『行くぞ！！鷹爪落爆蹴！！！！』

戒は空中で利き脚に氣を纏い三発の氣弾としてキマイラの体に浴びせ最後に最大まで脚の氣を高めて突貫し地面へとキマイラごと落ちて辺りに地響きと轟音を轟かせ激突した際に大量の砂塵が舞う。そしてその中心から途轍もない風が吹き荒び戒の姿だけが現れた。

戒『ったく、時間が無いと言うのにキマイラ如きに割く時間等無い…。さっさとなのはと合流しないとだな…。』

そう言うと戒は脚に風の力を纏うと目にも止まらぬ速さでその場を離れた。その頃なのは達は……

猫「ニャァァァ～～♪」

なのは「や、やっと追いついたυね、ねぇユーノ君、なんであの猫はあんなに大きくなっちゃったの？」

ユーノ「多分だけどあの猫の大きくなりたいと言う願いをジュエルシードが叶えたのかも知れないυ」

なのは「大きくなり過ぎだよぉー？」

ユーノ「なのは、あの猫は襲って来る気配も無いみたいだからさっ

さと封印をしよう。」

なのは「うん！そうだね、ＲＨ……」

なのは達がそんな話をして、ＲＨを起動しようとした瞬間上を煌めく光弾が飛び込み、猫の足元に着弾する。着弾した際に吃驚した猫鳴き声を上げずにその場に地響きと共に横転した。

なのは「えっ！？」

ユーノ「射撃魔法？！」

なのははユーノの言葉に咄嗟に後ろを見るが撃ったと思われる人間は辺りには見当たらなかった。

ユーノ「なのは、急いで！」

なのは「うん！ＲＨ…お願い！」

ＲＨ「オーライ。セットアップ」

その瞬間なのはの周りに桜色の魔力光が上空へと立ち上る。そして魔力光が収まるとその場には初等部の聖祥のデザインバリアジャケットを纏った姿になっていた。

なのは「レイジング・ハート！」

ＲＨ「プロテクション」

なのはが急いで猫の傍に行き前方に桜色のバリアを張り先程と同じ

光弾が何発も飛来するがその全て持ち前の防御力の高さで防ぐ。

ユーノ「なのは……！？」

ユーノはなのはの無事を確認しようとすると後方から高い魔力反応が接近して来るのを感じて振り返ると金の長髪を頭の両端で纏めツインテールにし黒のマントを羽織った少女が外灯の上に立っていた。

？「同系の魔導士が1人…ロストロギアの探索者か…？」

ユーノ「魔導士？！」

？「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス…」

BD「サイズフォーム、セットアップ」

少女の持つ斧状の杖の上部が変形し金色の魔力刃が鎌の様に展開される。

？「フォトンランサー…」

BD「ファイア」

なのは「くっ！？」

少女の周りに浮かんだ魔力球が槍の様に形を変えてなのはに向けて何発も殺到し爆発するがバリアを張りその全てを防いだ。

なのは「あれ？あの子は？」

ユーノ「なのは後ろだよ！？」

なのは「え？」

ＢＤ「デバイスフォーム」

？「ごめんね」

ＢＤ「サンダースマッシャー」

なのは「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ユーノ「なのは！？」

少女はどう動いたのかあの一瞬でなのはの背後に現れると鎌の様なデバイスを斧状の物に切り替えると空いてる手に魔力を練り上げ、一瞬だが哀しい顔をし、金色の魔力砲撃をなのはに向けて放ち、なのはは撃墜された。その落下するなのはをユーノは補助魔法で助けるがどうやら気絶をしている様子なのか動く気配がなかった。それを少女は一瞥すると猫に向き杖を突き出し封印をした。

ＢＤ「シーリング」

？「これで５つ…。もっと頑張ろうバルディッシュ。」

ＢＤ「イエッサー」

？「！？バルディッシュ！」

BD「ブリッツアクション」

少女が今まさにその場から飛ぼうとした瞬間、少女の真横から魔力で出来た一条の火の火が飛来するが直ぐに少女は反応してそれを回避する。

？「誰？」

戒『まったく、なのはの奴はもう少し粘れ無いのか？』

少女が火の火が放たれたと思われる方に振り向くと上下を黒のシャツにズボンで統一した戒が歩いてこっちに近付いて来るのが見えた。

そして、戒が現れる少し前……

戒『あの魔力光は……なのはが負けたか…。少し急ぐか？自己紹介も兼ねて……』

そして今に至る…

戒『お前がなのはを撃墜したのか？』

？「ならどうする…。」

戒『いや、どうもしないが？』

？「え？」

戒の言葉に困惑する少女。

戒『あいつはお前と戦闘をして負けた…それは変わらないが其処で俺がする事は無い…ジュエルシードも封印してお前が持っているのなら奪う事もしない…。』

ユーノ「戒！？何を！？」

戒『少し黙ってろ……。』

ユーノ「！？！？」

？「君は…何がしたいんだ？」

戒『何って、只単なる自己紹介かな？俺は黒逸戒…お前は？』

？「……フェイト、フェイト・テスタロッサ。」

戒『フェイト…か。良い名だな。お前の名は俺の中に刻んで置く。』

少女…フェイトは戒の言葉に更に困惑する。そこへ…乱入する黒く巨大な影が戒とフェイトを隠すように上に現れる。

戒『……さっき倒した筈のキマイラか。ふむ。ちゃんと消滅を確認して置くべきだったな……』

フェイト「なに…あれ…」

戒『ユーノ！なのはの周りに強固な結界を直ぐに張れ！フェイト！君はこっちに来い！』

そう言って戒はフェイトを抱きかかえると直ぐ様その場を瞬動術を使い影のある部分から離脱する。その直後大きな地響きと共に空から先程戒と戦闘をしていたキマイラが降ってきた。

戒『フェイトはさっさとこの場から離れろ！』

フェイト「戒はどうするの？」

戒『アレを倒す…。』

フェイト「……わかった。」

そしてフェイトはその場から離れる。その際に戒を気遣うかの様な顔を此方に向けたが直ぐに前を向きあっという間にこの場から去って行った。

戒『さて、人が話している時に邪魔をする様なＫＹはさっさと……消えろ！！！！』

戒はそう言って足下になのは達が使う魔法陣とは違う紋様の陣が広がり、光を発しながら回転を始める。

戒『ユーノ！周辺に展開している結界の強度を上げろ！』

ユーノ「え？わ、わかった！？」

そしてユーノが魔法陣を展開して周辺に展開していた結界の強度を

上げたのを確認した戒は未だに此方を睨み付けるキマイラに向けて詠唱を開始した。

戒『契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻……「千の雷」…術式固定！！』

戒が左手に発動前の吹き荒れる雷を留めて次の魔法の発動に取り掛かる。キマイラはこっちに向けて飛び上がって来るが戒はそれを瞬動術で背後に移動し、更に詠唱を重ねる。

戒『続いて！！影の地統ぶる者、スカハサの、我が手に授けん、三十の棘もつ霊しき槍を…「雷の投擲」…術式固定！！融合術式「巨神ころし」！！！！』

戒は両の手に留めていた魔法を体の真ん中で1つに合わせ、左手にそれを持つと肩越しに構えたその瞬間、身の丈の何十倍にもなりそうな長大な槍が出来上がっていた。

戒『うおりゃぁぁぁぁぁぁ！！！！』

“轟！！！！“

戒が投擲したソレは寸分違わずにキマイラの胴体を貫き地に縫い付け、キマイラは声無き声で敵である戒に吼える。

戒『消えろぉぉぉ！！「千雷招来」！！！！』

“ガガガガガガガガ！！！！！！“

キマイラに向かって…正確にはその身に突き刺さった槍にだが虚空より来たりしその無数の雷はキマイラを消し飛ばすには充分過ぎる威力を内包していた。そして……

戒『これで確実に消滅したな……。』

ユーノ「け、結界が壊れるかと思ったυ…って言うか戒！あんなに強力な魔法が使えるなんて聞いてないよ！？」

戒『済まないな…。言いそびれていた物でな…。』

ユーノ「ハァυ兎に角、今はあの黒衣の女の子がジュエルシードを集めている事が問題だ。アレはとても危険な物でソレ単体でも次元震を起こしうる可能性を秘めているから悪用されないか心配だ。」

戒『その心配は必要無い…。』

ユーノ「どうしてそう言えるんだ！？アレがどれだけ危険な物だと言うのが判って無いよ！？やっぱり、君は信用が出来ない！！」

戒『なら、ユーノ達の手伝いから俺は手を引かせて貰う。協力的なのはこれっきりだ。俺は俺で勝手にやらせて貰う…。』

ユーノ「……」

戒の言葉にユーノはその答えが意外だったのか呆然としていた。そんなユーノを戒は一瞥するとなのはの近くに来て背中におぶり片手

でユーノが強化した結界を壊して歩き去って行く。そんな戒の後ろをユーノは元気の無い足取りで追った。この戒となのは達の協力が破綻した事がどの様に転ぶのかは誰にも判らないのであった。

アリサ「遅いわよ…って、どうしたのよ!?」

すずか「なのはちゃん大丈夫なの?」

戒『問題無い…。只転んで気絶しただけだ。少し安静にしてれば大丈夫だ。すずか、ベッドを貸して貰えるか?』

すずか「あ、うん。いいよ。」

ファリン「では此方へ…。」

そして戒はファリンとすずかの先導の下なのはを背負った戒とユーノを抱えたアリサと一緒に歩き、部屋に着くと直ぐに戒は背負っていたなのはを寝かせる。

戒『取り敢えず、このままで良いだろう。済まないがなのはの事を頼む。』

アリサ「アンタはどうするのよ?」

戒『なに、俺は少し用事を思い出したからな…。少しの間だがなのはの事を頼む。』

すずか「戒君、何処かに行くの?」

戒『あぁ、だが少しの間だ。だから心配するな…。』

アリサ「心配するなって？心配するに決まってるでしょ！？か、仮にもと、友達なんだからね／／／／／／／／」

すずか「アリサちゃん……。」

アリサ「あ～、もう！！判ってるわよ！……ちゃんと無事で帰ってきなさいよ？」

戒『あぁ、善処する。』

そして戒はそのまま月村邸を後にする。その後、戒は聖祥に登校もせず、高町家にも帰る事はなかった。

？？？？

ロキ「やはりキマイラでは無理か？なら次の手はトレントとガルーダか……」

プレシア「貴方の駒は制御がしっかりと出来ないのかしら？危うくわたしの大切な人形が無くなる所だったわよ？」

暗い空間ではプレシアとロキが通信をしており、プレシアが不機嫌な表情を隠しもせずロキに言う。

ロキ「時には不測の事態と言うのは付き物だ…。アレも精神制御（マインドコントロール）で

使っているからな…。何かの拍子に解け、暴走したのだろう……。」

プレシア「……まぁ、いいわ。此方はジュエルシードを手に入れる事が出来た訳だからね…。」

ロキ「では次の時にまた会おうか、大魔導士プレシア・テスタロッサ……」

プレシア「えぇ、また会いましょう。堕神ロキ…。」

そして、また暗闇には漂ったロキだけになった。

ロキ「人間風情が愚弄する……か。俺の封印が解かれたその時…貴様を真っ先に殺してやる！！！！ククククッ！！ハッーーハッハッハッハッ！！！！！！」

開戦！！不屈と雷神、守護者と…猫？（後書き）

戒『おい、作者。』

作者「なんでしょうか？」

戒『主人公組と仲違いさせて何がしたい？』

作者「次回からはフェイト組に参入させて事件を解決して貰おうかなってね？」

戒『プレシアとロキの関係を何時かは崩す心算か？』

作者「まぁね？主人公組にいるとプレシアとの接点があまりにも無い事に気付いて急遽そうしたんだ。」

戒『無茶では無いのか？』

作者「何とかなるだろ？」

戒『不安だ……』

作者「では次回の題名（タイトル）は会合するは黒の聖人と大魔導士！？です！」

戒『駄文だが見てくれ……。』

作者「楽しみにして下さいね～♪」

戒『お気楽作者が……？』

会合せし黒の聖人と大魔導士…悲しき運命を打ち破れ……（前書き）

タイトルを多少変更致しました。

会合せし黒の聖人と大魔導士…悲しき運命を打ち破れ……

あの日から数日後の聖祥大附属小学校での放課後、なのはのクラスでは……

なのは「……はぁ。」

すずか「なのはちゃん、今日は一体どうしたの？」

なのは「あ、なんでも無いよ？なんでも……」

アリサ「……あんたはなんで相談をしてくれないのよ！！」

なのは「ごめんなさい……。」

アリサ「親友にも相談が出来ないって事！？あんたにはあたし達は親友ですらなかったって訳ね！！！！すずか、行くわよ！」

すずか「あ、アリサちゃん？ごめんね？なのはちゃん。」

なのは「う、ううん。なのはが悪いから……すずかちゃんが謝る事無いよ。」

そしてアリサとすずかが教室を出て、なのはが1人になると少し前の席にいた男子2人が近づいて来る。その2人はなのは達とは別に友達と言う訳でも無いが戒がなのは達とは別の友人として偶に一緒にいる事がある河野孝明（たかあき）と藤田浩之（ひろゆき）が近くに来た。

孝明「よっ、大丈夫か？」

なのは「うん…。」

浩之「珍しいな？お前達が喧嘩をするなんて……。」

なのは「ちょっとね……？」

孝明「にしても戒の奴は何時まで休む気だ？アイツならこういった事は直ぐに解決してくれるんだけどな……。」

なのは「そうだね……。」

浩之「（こりゃあ重症だな…。）孝明そろそろ行くぞ？またな、高町。」

孝明「お、おう？じゃあな。」

なのは「……うん。（なのははどうすれば良いの？……戒君。）」

悩むなのはを余所に戒はと言うと……

戒『此処か……。』

戒は原作の知識を使い、座標を特定し、今現在、時の庭園の入口に立っていた。

戒『さっさと行くか…。』

そしてその場から瞬間移動（テレポート）を使い、庭園の奥にある玉座の間まで跳ぶと丁度目の前には玉座に座る妙齢の女性がいた。……間違いなくこの庭園の主…プレシア・テスタロッサである。

プレシア「あら、こんにちは小さな侵入者さん。こんな所へどんな御用かしら？」

戒『初めまして、大魔導士プレシア・テスタロッサ。』

プレシア「何故わたしの名を知っているのかしら……貴方、何者？」

ゆっくりと自身が座っていた玉座から立ち上がるプレシア……警戒されて当然か……。

戒『なに、只のしがない魔法使いだ。』

プレシア「ふざけているのかしら？わたしは真面目に聞いているのだけど？」

戒『アリシア・テスタロッサ……。』

プレシア「なっ！？」

戒の言葉にプレシアは余裕のある表情を驚愕を露わにする。

戒『彼女を蘇生させる事が本当に出来るか？』

プレシア「何故、アリシアの事を知っているの！？」

戒『さてな…。』

プレシア「答えなさい！！！！」

“轟っ！！！！“

戒の焦らすかの様な言葉にプレシアは激昂し、一発の雷を戒の頭上から落とす……。

戒『俺は知っているだけで彼女の事は知らない。』

プレシア「訳が判らないわね…。」

戒『なに、俺はお願いしにに来ただけだ……。』

プレシア「お願い？一体何を言っているのかしら？」

戒『あの子を……フェイトを家族として接してやって欲しい。』

プレシア「何かと思えばわたしがあのお人形を家族として接するですって？アレはアリシアの代替品よ！家族など……」

戒『貴女がフェイトに辛く当たっているのは知っている。しかし、それは恐れから来る物じゃ無いのか？』

プレシア「何を根拠に……」

戒『フェイトが生まれ、共に生活をして行く内にアリシアとの思い出が薄れて行くのが怖くなった貴女はフェイトに辛く当たる様になった…。』

プレシア「黙れ……」

戒『そして、その内にフェイトが自分の中で大きくなる事を恐れた貴女はフェイトに敢えて危険なＪＳを集める事をさせた。自分の中のアリシアの存在を確立させる為に……』

プレシア「黙りなさい！！！！」

戒『……』

プレシア「貴方に何が判るの！？最愛の娘を無くしたわたしの気持ちが！！！！そうよ！あの子と生活をしてアリシアとの思い出が徐々に失われていく事がどれほど苦しかったか！！！！」

戒『しかし、それは人として当たり前の事だ。人は前に進んで行く物だ……。』

プレシア「それは認めないわ！！！！」

戒『なら、貴女の事も認められないな……。アリシアの命を弄び、尚且つフェイトを傷付け……貴女は一体何がしたいのだ？』

プレシア「それは……」

戒『なら、フェイトを自分の娘として接する事だな…。』

プレシア「」

戒『なら、仮にアリシアが目覚めたとして今のあんたを見たらどう思う？』

プレシア「……」

戒『近い内にまた会う事があると思うがその時に答えを聞かせてくれ。』

プレシア「今更、あの子を娘として接するなんてもう遅すぎるわよ……。それにどう接すれば良いか……あの子…フェイトはわたしの事を嫌っているわ。」

戒『人生に遅すぎる事など無いよ。それにそう決め付けるのは早計だ。子と言うのはどんな形であれ親の愛情を欲している物だ。後は貴女がフェイトに一歩でも歩み寄れる勇気があれば良いのだからな……。』

プレシア「歩み寄れる勇気……」

戒『そろそろ、彼女が来るかも知れないから俺は退散させて貰う。プレシア女史…貴女の決意がどうであれ、フェイトの生まれはどうであれ貴女がフェイトの［生みの親］だと言う事は確かな事だけは教えておく。』

戒はそう言うと足下に移送方陣を現し、その場から消える。

プレシア「わたしは……」

フェイト「母さん、只今帰りました。」

プレシア「ＪＳは？」

フェイト「４つ集まったよ♪」

プレシア「そう、頑張ったわね？」

アルフ「！？」

プレシアはフェイトの頭を優しく撫でる。その光景に警戒をしていたアルフは吃驚していた。

プレシア「ＪＳを集めるのは危険だけど頑張ってね？」

フェイト「あの、母さん。コレ、母さんに買って来たケーキなの。良かったら……」

プレシア「有難う、フェイト。後で一緒に食べましょうね。」

フェイト「はい！」

プレシア「フェイト、ケーキをリビングに持って行って準備をしてくれるかしら？」

フェイト「判った、直ぐに準備するね♪」

アルフ「……プレシア、あんた一体どうしたって言うのさ？」

プレシア「ただ、少しだけ教えられただけよ。小さなでもとても大きなわたしなんかよりもずっと大きな子にね……。」

アルフ「訳わかんないよぅ」

プレシア「ふふふ、確かに訳が判らないわよね。（わたしはやはりアリシアを諦められないわ。貴方と次に会う時には……）」

そうして、プレシアはアルフと共に玉座を出て行くのであった。その後ろでロキの使い魔が一部始終を見ていた事に気付かずに……

会合せし黒の聖人と大魔導士…悲しき運命を打ち破れ……（後書き）

戒『今回も微妙な仕上がりの魔法少女リリカルなのはでした。え～、今回からはクロスオーバーと言う事で物語が進行して行く中で少しづつですがキャラクターが増えると思います。』

なのは「今回出てくれたのはトゥハートの主人公ｓの藤田浩之君に河野孝明君でした。今後も他の作品からキャラクターが徐々に増えると思いますが苦情などは受け付けませんのでお願いします。」

戒『感想やメッセージなどは随時受け付けていますので、宜しくお願いします。』

なのは「次回はあのＫＹが登場です。勿論、フルボッコ手前までやられる事になりそうな予感だよ？」

戒『なのは、ネタバレは駄目だと言っているだろう？』

なのは「あっ？！ニャハハハ？」

戒『まったくｕ次回、衝突！？黒の聖人と……ＫＹ！？（注）僕はＫＹなどでは無い！！です。』

衝突！？黒の聖人とＫＹ！？（注）僕はＫＹなどでは無い！！（前書き）

今回の話は無理矢理感が否めませんが文句以外は受け付けますので
ご感想やご意見を下さると助かります。もし嫌な方はバックを推奨
致します。

衝突！？黒の聖人とＫＹ！？（注）僕はＫＹなどでは無い！！

あのプレシアとの会合の後、とある倉庫外に戒は青年Ｖｅ．で来ていた。

戒『確か此処等の筈……』

すると戒が進んでいる遥か先で爆煙が立ち上る。

戒『しまった！？既に始まっていたか！？』

戒は急いで現場に向かう。

ＲＨ〈アクセルシューター〉

なのは「シュート！！！！！」

桃色の魔力弾が４つ、黒衣の少女…フェイトに向かう。しかし、フェイトはそれを高速移動魔法…ブリッツアクションを使用して避け、なのはに向けて鎌状の魔力刃を振るうがすかさずなのはも対抗するかの様にして杖を振るう。そして金属同士がぶつかった音は辺りに響く様にして鳴る。

なのは「はぁ、はぁ、フェイトちゃん。わたしはただ、お話がしたいだけなの、だからお話を聞かせて。」

フェイト「わたしは……　　アルフ「フェイト！話さなくて良いよ！こんな人の優しい所でぬくぬくと生きてる甘ちゃんになんて話

す事なんて無いよ！！」アルフ…。」

なのは達の会話をアルフが遮り、なのはに向けて橙色の魔力弾をなのはに向けて手加減をせずに放つ。

ユーノ「くっ！？」

なのは「ユーノ君！？」

ユーノ「なのは、大丈夫？」

なのは「ユーノ君のお陰だよ！」

アルフが撃った魔力弾をユーノが防ぎ、なのはの安否を確認した。

アルフ「フェイト！」

フェイト「うん。」

ユーノ「はっ！なのは急いで！？」

なのは「判った！」

そして、2人が杖を再び交錯させようとしたその瞬間（とき）……

？「ストップだ。コレ以上の戦闘は危険だ。」

フェイトの攻撃をデバイスで受け止め、なのはの杖を掴み突如現れた者は鉄甲の様な物を腕と脚に着け、その身に黒のロングコートの様なバリアジャケットを纏った男の子がいた。

全「なっ！？」

アルフ「一体誰なんだい！？」

クロノ「動くな！僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。君達の事情を聞かせて貰う。」

そう男の子…クロノは言い、何時の間にか掛けたのか、フェイトとなのはの2人には両手両足に水色の拘束魔法…バインドが掛けていた。

クロノ「とりあえず、2人共武器を退くんだ。もしコレ以上続けると言うのなら……」

戒（ネイシス）『……言うのならどうするんだ？』

クロノ「なに！？」

戒（ネイシス）『隙だらけだ！！』

クロノ「ぐはっ！？」

クロノが勧告していると頭上から声が聞こえ、クロノがそれに驚いていると何時移動したのか、既に懐に潜り込んでおり魔力で強化した脚で蹴る。その瞬間に2人を拘束していたバインドは解け、フェイトはアルフの近くに……なのははその場にへたり込んでしまっていた。

戒（ネイシス）『フェイト、大丈夫か？』

フェイト「うん。大丈夫、ありがとうネイスさん。」

戒（ネイシス）『なんとか間に合ったか……。』

アルフ「ネイシス、あんた…」

戒（ネイシス）『話は後だ！今は逃げる事を優先しろ！』

フェイト「で、でも！」

アルフ「この近くにジュエルシードの反応があるんだよ！？それをみすみす見逃せって言うのかい？！」

戒（ネイシス）『今捕まったら君達の目的はどうなるんだ！？』

クロノ「くっ！逃がすか！？Ｓ２Ｕ！」

Ｓ２Ｕ〈ブレイズキャノン〉

戒の言葉にコンテナをぶち抜いて吹っ飛んだ筈のクロノがそう叫び水色の砲撃を放って来た。

戒（ネイシス）『練りが粗いな！！！！！』

戒はクロノが撃ってきた砲撃を魔力で強化した状態の脚の蹴打で被害の少ない海の方角に蹴る。その光景に誰もが驚愕した。

クロノ「なっ！？君は一体何者だ！君は自分が何をしているのか判

っているのか！！」

戒（ネイシス）『そんな物は知らんな！』

クロノ「くっ！君は一体何者だ！魔導士か！」

戒『違うな…俺は魔術士であり魔法使いだ！！』

クロノ「なっ！？そんな訳あるか！この星は魔法文化０なんだぞ！？」

戒（ネイシス）『それは貴様等の見解だろう？そもそも、他人に簡単に魔術士や魔法使いだと言う奴がいるか？戯けか貴様は？』

クロノ「くっ！言わせておけば！！！！」

戒（ネイシス）『それに貴様の相手をしている暇は無いからな？』

クロノ「それはどういう……！？」

戒の言葉にクロノは訝しむが次の瞬間に地響きが起き、驚愕しながらも身構える。

戒（ネイシス）『お出ましの様だな……。』

クロノ「なにが起こっている！？」

戒（ネイシス）『フェイトとアルフはいつでも逃げれる用意をして置けよ？』

アルフ「それはどういう……」

戒(ネイシス)『さっさとしろ！来るぞ！！！！』

その言葉と同時に海の方から巨大すぎる大樹の怪物と空からは大樹よりはサイズが小さいがそれでも飛行機並みのサイズの怪鳥が突如として現れた。

なのは「なに……アレ……」

その通常では考えられない物が現れた光景に呆然としているなのはに怪鳥……ガルーダはそのビルすら掴めそうな鋭利な爪で強襲する……が

戒(ネイシス)『おい、化け鳥……餓鬼を狙ってんじゃねぇよ……。』

なのはの目の前には自身を今にも引き裂こうとした三本の爪の一本を片手で掴み止めた戒……ネイシスが居り、静かな怒りをその身に宿らせ、鬼や般若すら凌駕しそうな威圧感と殺意をガルーダに浴びせていた。

クロノ「奴は人間か！？」

戒(ネイシス)『外野が五月蝿えからな……さっさと終いにさせて貰うぞ！！！！』

そう言うとネイシスはその爪を掴んだ腕でガルーダをコンテナのある方へとヒトでは有り得ない力でブン投げ、けたたましい破砕音と

共にガルーダは吹き飛ばされた。

戒（ネイシス）『次はテメエだ！お化け大樹！……ギルガル・ギル・ギルディ・ギルディアス…契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。』

ネイシスの詠唱に合わせるかのように大樹の周りが徐々に凍りついていく。大樹はそれに苦しむかの様にその巨大な体躯から伸びる触手の様な物を使い必死に逃れ様とするが全て徒労に終わるのである。

戒（ネイシス）『無駄だ。１５０フィートを囲む絶対零度の殲滅氷結魔法だ。貴様に逃れる術など残っていない……全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。［おわるせかい］……砕けろ。』

最後の詠唱が終わり、名を言い放つと大樹は完全にその身を氷に覆われており、トドメにフィンガースナップを鳴らし、一気に砕けると大量の水飛沫を上げて沈んでいった。

クロノ「で、出鱈目すぎる……」

なのは「す、すごい！」

ユーノ「なのは！？」

なのはがユーノの言葉に後ろを振り向くと最初にコンテナへ吹き飛ばされたガルーダが自身の動きを邪魔するコンテナを翼を羽ばたかせる事により吹き飛ばしていた。そしてその余波とも言える多数の瓦礫が今、正になのはへと襲い掛かって来ていた。当たれば大怪我をする事は間違いがなかった。

なのは「えっ！？」
呆然としているなのはの目の前には金色の障壁を張るフェイトとそれに合わせるかのように橙色の同じ障壁を張るアルフがいた。
なのは「な…なんで？」
フェイト「わからない、体が勝手に動いただけだから」
アルフ「フェイト1人にやらせる訳には行かないからね！」
しかし、飛行機並みの巨体を長い間受け止められる筈も無く徐々に障壁に小さな亀裂が入る音と共に罅が急速に広がる……そして…。
“ガシャァァァァァン！！！！！“
ガラスが割れる様な音と共にフェイトとアルフは吹き飛ばされ、倉庫の壁にその背中を2人は強かに打ち付け、なのははガルーダが巻き起こした突風によりユーノがいる方へと吹き飛ぶ。
アルフ「フェイト？フェイト！？大丈夫かい？！」
フェイト「ア…ルフ…」
アルフ「フェイト！良かったよぉ！」
戒（ネイシス）『奴め往生際の悪い……』
アルフ「ネイシス！なんとか出来ないのかい！？」
戒（ネイシス）『出来ない事は無いが……威力が強いのを一発だけ見舞えば仕留

められる。……やるか。』

そして、ネイシスが虚空瞬動でガルーダの真上に移動した次の瞬間、桃色の砲撃が胴体に打ち込まれるが、ガルーダにはさほどダメージには成らず逆に怒らせるだけに留まらず、ネイシスからなのはへとターゲットを変更したガルーダはその大きな嘴を開くとフェイトのそれとは比較にならない程の雷撃をなのはに向けて放つ。それにはネイシスは焦り、瞬間移動を使いなのはの目の前に移動すると一方通行［アクセラレータ］を使用し放って来たガルーダ自身に威力をそのままにして反射し、それを受けたガルーダはその巨体を盛大な地響きと大量の砂塵を巻き起こして地に墜ちた。

戒（ネイシス）『貴様は馬鹿か！？アレが既に貴様の実力でどうこう出来る相手では無い事に気付かないのか！！！！』

なのは「で、でも！わたしも役に立ちたくて……」

戒（ネイシス）『なら、そこでジッとしていろ！ちょろちょろと動かれては邪魔にしかならん！』

そう言い残してネイシスは起きあがろうとしているガルーダの背中に目掛けて飛び上脚りを踏みつける様に叩き込み再び地に倒れ込むガルーダそして、そのガルーダを中心に四方八方へとコンクリートに亀裂を生じさせた。

クロノ「化物か……アイツは。」

クロノの呟きは誰の耳にも入らない。それ程までに戒の戦闘……一方的なまでの蹂躙に息を飲んで見入っているのである。そんな中、戒は地に縫い付けたガルーダを尻目に先程、壁に叩き付けられたフ

エイトとアルフの所にいた……。

戒(ネイシス)『まったく、君達は本当に無茶をするな……。』

フェイト「ごめんなさい。」

アルフ「ふん！」

戒(ネイシス)『やれやれ、少しだけジッとしてろよ？大いなる大海…悠久たる大気よ…彼の者達に癒やしを……キュア・ウィンド！！』

戒の呪文に対して2人の周りを深緑色の風が吹き体の傷を治し、2人の体に沿うように青色の魔力が疲れを取る。

アルフ「凄いね！疲れが全然無いね！これなら幾らでも動けるよ！ありがとよ、ネイシス！」

フェイト「ネイスさん、ありがとう。」

戒(ネイシス)『さて、2人はこれで大丈夫だな……あの怪鳥にトドメを刺すか。』

そう言ってフェイト達から離れて、倉庫とコンテナの丁度真ん中辺り…先程の衝撃で窪地となっている場所で虫の息になって埋まっているガルーダの目の前で立ち止まる。その戒をガルーダは憎悪の念を籠めるかの様にギラギラとした鳥類の鷲を彷彿とさせる瞳で睨み付ける。

戒(ネイシス)『死ぬ直前ですらその目を見せるか……。魔物となる生前は誇り

高い主だったか？なら、その誇りを持って逝くと良い。……もし叶うのであらば使い魔の契約を交わそう…。』

そう言うと窪地の中に飛び降りてガルーダの目と鼻の先に降り立つ。上の方からフェイト達の危ないや危険だ等の叫び声が聞こえるが、敢えてそれを無視し、更に近付く。

戒（ネイシス）『さてと…始めるか。』

そう言うと戒は左足で軽く地を叩くと窪地の中に巨大な魔法陣が浮き上がり、ガルーダと戒の２人を覆い隠す様に眩い光が立ち込める。

戒（ネイシス）『我、汝との血の契約を望む…悪しき思念打ち払い汝の真の姿を…。現し賜え……。』

周りの光が更に発光し、その余波か、その周辺すら光が呑み込み、今自分がどこにいるのかすら判らない程であった。そして、光が収まると其処には先程の怪鳥は居らず代わりに空を思わせる蒼い色の東洋龍が体を丸める様にして眠っていた……。

戒（ネイシス）『コイツは……まさか……バハムート…か？』

バハムート「君かい？僕を解放してくれたのは？」

戒（ネイシス）『あ、あぁ。確かに俺だ。そして、あの姿のままで悪かったのだが、契約を行使させて貰った……。』

バハムート「別に構わないよ？あのロキって言う奴に無理矢理一方的な契約をさせられてたからね…。寧ろ両者の了解があってこそ契約と言うのは成り立つ訳だからね？」

戒(ネイシス)『そうか。ところで契約したは良いが、君は姿を変えたりする事は出来るか？』

バハムート「ん～、どんな姿にもなれるし、君達の所で言うデバイスになる事も出来るけど、君としてはどっちが良いのかな？」

戒(ネイシス)『そうだな…。じゃあ、ユニゾン兼インテリジェントデバイスになれるか？』

バハムート「簡単だよ～？」

戒(ネイシス)『済まない、助かるよ。』

バハムート「あの場所から解放してくれたんだからその恩人の君の要望は可能な限り聞く積もりだから大丈夫だよ？」

戒(ネイシス)『そうか…しかし、その喋り方はどうにかならないのか？』

バハムート「何か変かな？」

戒の質問にバハムートは首を傾げ、戒に聞く。

戒(ネイシス)『その姿だとかなりのギャップがありすぎると思うのだが……』

バハムート「僕の性格から来る喋りだから直し様がないかな？」

戒(ネイシス)『なら、良いさ。今更どう言う喋り方だろうと之から先相棒として一緒なのだからな……。』

ババムート「宜しくね！マスター♪」

戒（ネイシス）『なら、早速で悪いがデバイスになってくれるか？そろそろ上に残した連中が此処に来そうな予感がするからな？』

ババムート「りょ～かい♪」

ババムートはそう言うと自身の体を蒼く光らせると戒の左腕に東洋龍のデザインで巻き付く様な形のブレスレット型になり、コアは瞳の所に設置されていた。

戒（ネイシス）『中々に洒落ているな……。』

ババムート〈気に入った？〉

戒（ネイシス）『あぁ、とても気に入ったよ。之から宜しくな？相棒。』

そして、ババムートとの会話を切り上げるとネイシスは一息にその窪地を飛び上がるとその場の全員が此方に目を向けていたのが見えた。そして、フェイト達の近くに下り立つ様にしてクロノ達と相対する。

戒（ネイシス）『待たせたな……。』

クロノ「くっ！待って等いない！そして君は危険過ぎる！此処で管理局の法に基づき……逮捕させて貰うぞ！！！！」

戒（ネイシス）『管理局の法…ね。仮に法の下で逮捕するとしてもこの子達から聞いた所この星は管理外世界…つまり、君達管理局の法には適用し

ないのでは無いのか？』

クロノ「だとしても！君の様な危険な存在を見過ごす訳には行かない！」

戒（ネイシス）『正義の味方の鏡だね～。』

クロノ「ふざけているのか！」

戒（ネイシス）『ふざけているのは其方だろ？こそこそとモニターで記録している様な輩がいる方がふざけていると思うのだが？』

そう言って、ネイシスはクロノの右上の虚空を睨み付ける。すると何もない所に画面が現れると緑色の長髪をした管理局の制服と思われる服を着た女性が画面に映っていた。

？「ごめんなさい。わたしは時空管理局アースラの艦長をしています…リンディ・ハラオウンです。先程の事は謝らせて貰います。ですが、此方にも此方の事情がありますので、どうか此方に来てお話を聞かせて貰えませんか？」

緑髪の女性はリンディと名乗り、謝罪と共にネイシスに此方に来る様に要請をして来た。

戒（ネイシス）『何故、俺は仮にも敵なのかも知れないのだぞ？話を聞く必要性がどこにある？』

クロノ「そうですよ！艦長！コイツは執務官への公務執行妨害に更に傷害すらしている犯罪者ですよ！」

リンディ「クロノは黙っていて頂戴…。」

クロノ「か、母さ…艦長！？」

リンディ「どうかしら？出来れば来てくれればクロノ執務官への公務執行妨害に傷害の罪をなかった事にするから…ね？」

戒（ネイス）『なら、此方はそこの茶髪の女の子と俺だけだ。他はそのまま帰すと言うのならばその話に乗ろう。元々其方が先にフェイトに危害を加えようとした事から俺が手を出した訳だからな……』

フェイト「ネイスさん！？なにを！？」

戒（ネイス）『（フェイト、君は…君達は自分の成すべき事を優先させろ。俺は大丈夫だから…な？）どうする？』

リンディ「……判りました。その用件を呑みましょう。」

クロノ「な！？艦長！？正気ですか！？」

リンディ「クロノ？元はと言えば貴方の認識不足から起きた事なのだから、此処は大人しくしてなさい。」

クロノ「わ、わかりました。」

リンディ「それでは、此方に転送する準備をしますからその場で待機していて下さいね？」

フェイト「ネイスさん…。」

戒(ネイシス)『心配するな。さっさと終わらすし、直ぐにでも会えるから…な？』

フェイト「…うん。」

クロノ「おい！此方の準備は出来ているんだから早く来い！」

戒(ネイシス)『やれやれ、ゆっくりと話す事も許さないのかよ。まぁ…、行くな？』

フェイト「気を付けて」

そしてその場からクロノ、なのはとユーノ、そしてネイシスは転送用魔法陣によりこの場から消える。

フェイト「ネイスさん……」

アルフ「フェイト、ネイシスなら大丈夫さ。あたしはアイツの言葉を信用して今、自分達のやるべき事をするだけだよ？」

フェイト「アルフ……うん、そうだね。ネイスさんなら大丈夫だよね」

その場に残る形になったフェイトとアルフは一度だけ空を仰ぎ早々に倉庫から離脱した。勿論の事、探知されない様に移動して……

衝突！？黒の聖人とＫＹ！？（注）僕はＫＹなどでは無い！！（後書き）

作者「いや～、今回は他作品のキャラクターを少し出してしまったな～♪」

戒『その割りには嬉しそうな感じだな…。』

作者「だってさ？トゥハートや後々出す予定のクラナドとかはさ？ほぼギャルゲーな訳でしょ？それを単体でやるよりかはなのはを使ってクロスオーバーにした方が色々と面白いでしょ？（主に主人公が♪）」

戒『何か不穏な事を思わなかったか？しかも、とかはって言う事は更に増えるかも知れん……と？』

作者「ｄ（ ∀｀）ＹＥＳ！」

戒『顔文字でやるな！ムカつくわ？』

作者「とりあえず、Ａ’ｓの時にでも関連する作品は発表する積もりだから安心しろ！」

戒『寧ろ俺の安寧が妨げられまくっているだろうが！！！！』

作者「次回からは人物の名称を変更してお送りしますのでそこの所宜しくお願いします。」

戒『ソレよりも早く俺のキャラを安定させて喋らせてくれ。』

作者「君は感情の起伏によって喋り方がバラバラと言う裏設定があるんだなコレが♪」

戒『もうなんか嫌になって来た。』

作者「大丈夫！戒ならやれるって！後もう少しすれば無印編は終わりだから頑張って！」

戒『その編の最後に絶対何かやらかす気だろ？』

作者「それは俺の気分次第かな？」

戒『はぁ～υこんな駄文ですが皆様これからも御愛読をお願いします。』

作者「次回！話し合い…いやＯＨＡＮＡＳＨＩです。お楽しみに～♪」

話し合い…そして…（前書き）

タイトルを変更しました。

話し合い…そして…

フェイト達と別れ、近未来的なデザインと構造を持つ次元航行鑑アースラの中でクロノの先導の下艦長室に向かう事になった戒ことネイシスとなのは一行。

なのは「ユーノ君、管理局ってどういうものなの？」

ユーノ「管理局はなのはの所で言えば警察や裁判を一度に行える組織の様な物だよ。」

なのは「凄いんだね。」

クロノ「君達、そろそろバリアジャケットを解除したらどうなんだ？」

なのは「あ、そうですね？」

クロノの言葉になのはが同意するとその場で聖祥の制服を着たままの状態に戻った。

クロノ「君も変身を解いたらどうなんだい？本来の姿は其方ではないだろ？」

ユーノ「そうでしたね。今、戻ります。」

そう言うとユーノの体が光ると金とも茶とも言えそうな髪色に幼い

と言ってもなのはと同年代の様な男の子になって現れる。

ユーノ「ふぅ、なのはにこの姿を見せるのは久しぶりだよね？」

なのは「え、えぇぇぇぇぇ！！！！！ユーノ君男の子だったの！？」

ユーノ「あれ？僕、なのはにこの姿で会ってなかったっけ？」

ユーノの言葉になのははこれでもかと言う位に顔を横に振る。

クロノ「君達、悪いが今は忙しいからそれは後にしてくれないか…？」

戒（ネイシス）『俺も早く行って済ませたいからな……』

なのは「ご、ごめんなさい？」

クロノ「こっちだ…。」

その後は何事も無く無事に艦長室に着き、クロノが入室の許可を取り、中に入るとその他の近未来的な構造とはかけ離れたモノ……屋外の茶室の様な物が艦長室にあり、なのはとユーノは困惑をしていた。ネイシスは興味が無いのかそれをスルーしてなのは達より早く入る。我に帰ったなのはとユーノも慌てて艦長室に入る。

リンディ「クロノ、ありがとうね。」

クロノ「いえ…、艦長の指示に従っただけですから…。」

？「堅いねぇ～？クロノは。」

クロノ「茶化すなよ、エイミィ。」

エイミィ「はぁい♪あっ！私はエイミィ・リミエッタだよ？よろしくね～♪」

クロノ「エイミィ？」

エイミィ「わわっ！？クロノ待って判ったから落ち着いて？？」

リンディ「エイミィ、クロノ？（黒笑）」

エ、ク「「スイマセン！！！！」」

痴話喧嘩の様な事をし出した二人にリンディが背後に何かを漂わせて二人の名を呼ぶと何が恐ろしいのか二人はシンクロでもしているのか同時にリンディに土下座をする。この三人には一体何があったと言うのだろうか……

戒（ネイシス）『さっさとしてくれないか？此方としては無駄に時間を使う積もりはあまりしたく無いからな…。』

リンディ「そう焦らないで。あらゆる物事にはゆとりと言う物は必要よ？」

俺にリンディはそう言ってから自身の手元にある茶器にミルクと砂糖をこれでもかと言う位にぶち込む。お茶に対しての日本人からしたら先ず確実にやらない様な暴挙をした。それを見ていたなのはとユーノは絶句していた。当たり前だが……

戒（ネイシス）『おい……』

リンディ「何かしら？」

戒（ネイシス）『何故、茶にその様な物を入れる……。』

リンディ「これを入れると美味しいのよ？」

戒（ネイシス）『それは日本人に対しての引いては茶に対する冒頭だ！！！！』

なのは「ふぇぇぇぇ！？」

リンディ「で、でも！これを入れないと苦くて飲めないじゃない！？」

戒（ネイシス）『なら飲むな！！！！若しくは別の物を飲め！！！！』

リンディ「嫌よ！？」

クロノ「え～、艦長？今はその話をする時では……ゅ」

戒、リ『「貴様（クロノ）は黙って（なさい）いろ！！！！」』

クロノ「僕は正しい事を言った筈だよなｕｏｒｚ」

エイミィ「クロノ、アレは収まるのを待つしかないよ？」

クロノ「……そうだな。」

その後、リンディに対しての俺のお茶に対しての講義は2時間に渡り、終わり頃にはリンディは涙目になりながらも判ってくれた様で何よりである。これなら原作のようなリンディ茶の被害に会う確率は無くなる事だろう。そしてその後にリンディから管理局について教えて貰う。ほぼ嘘の様な物だな……

戒（ネイシス）『要するに次元規模での警察組織って所か？』

リンディ「簡単に言えばそうなるわね？」

戒（ネイシス）『ならば改めて聞くが、此方の世界が（管理外世界）と言われているのに対して何故そこの黒いのは俺達に対して逮捕するみたいな事を言い、尚且つ攻撃意思の無い逃げる相手に直撃コースの魔法を放つ？執務官とはその様な事をしても良いと言う権限でもあると言うのか？』

リンディ「その事に関しては謝罪します。なのでこの事に関しては不問とさせて貰います。」

戒（ネイシス）『何が不問…だ？此方には逃げる相手に対して砲撃を撃った阿呆の映像があるのだからな？』

そう言って、ネイシスは掌から何処で録画したのかクロノが丁度逃

げる準備をしていたアルフとフェイトに対して砲撃を撃った映像が流れていた。それを見たアースラ組は息を飲んでいた。

戒(ネイシス)『これでもまだ不問と言い張る積もりか？そろそろ、そこの小僧もジュエルシードを集める事になった理由(わけ)を言ったらどうだ？』

その後は原作通りにユーノがジュエルシードに関しての事とこの世界に来る事になった経緯を話した。……事故と言うよりも故意に起こされたと判らないのか…？

リンディ「そう、立派な事ね…。」

クロノ「それと同時に無謀でもあるな…。」

リンディが感心しクロノが呆れ顔になる。

リンディ「では今回の件であるロストロギア、ジュエルシードの回収は私達時空管理局が全権を持ちます。」

な、ユ「「え！？」」

クロノ「後の事は僕達に任せて君達は今回の事を忘れてそれぞれの元の世界に戻ってくれて構わない。だが、君には残って貰うぞ？まだ聞かないといけない事があるからな…。」

なのは「で、でも！？」

クロノ「これ以上は次元干渉に関わる事だ。民間人が関わって良い事ではない。」

リンディ「急にこんな事を言われて戸惑うかも知れないから一晩ゆっくりと気持ちの整理をしてまた会いましょうね？」

戒（ネイシス）『なら、帰らせて貰う。そもそも、何故この俺が貴様等の質問とやらに答えねばならん……。』

リンディ「そこをなんとかお願い出来ないかしら？貴方の魔法は我々には未知数なのだから…『くどい！！！！！』っ！？」

戒（ネイシス）『何度も言わせるな…嘘や上辺だけの言葉を吐く貴様等に手を貸す道理などありはしない。この子等は気付かなくともこの俺が気付かないとでも思ったのか！！！！！』

クロノ「お前は一体何を言っているんだ！？」

戒（ネイシス）『小僧…言ったよな？（民間人）は関わるなと？』

クロノ「あ、あぁ。確かに言ったが…」

戒（ネイシス）『ならばこれ以上話す必要が何処にある！何故（話し合い）がこの後にあるのだ？可笑しいとは思わなかったか？』

クロノはその言葉に困惑しオペレーターだと言うエイミィは理解出来ずに首を傾げる。

戒（ネイシス）『なら砕いて…真理を言おう！リンディ・ハラオウン！俺は貴様がこの子を……なのはの事を利用しようとした事を許さんぞ！？』

リンディ「っ！？」

なのは「ど、どういう事ですか？」

戒（ネイシス）『簡単な事だ。あの戯けは君の良心に働き掛ける様な言動をし、此方側から協力を申請させる算段でいたのだからな…。まぁ、君の事だからこう言われても協力すると言うのだろうがな……』

なのは「よく判らないですけど私達が助けて貰う訳だから可笑しくは無いと思うけど…？」

戒（ネイシス）『物事はそう簡単な物では無いぞ？その場合だと彼等の戦力として加えられ、あわよくば事件後に何かしらの事件があった時にでも簡単に協力の要請が出来る訳だ。君の望まない事もやらされるかも知れない……』

ユーノ「何故そう思うのですか？」

戒（ネイシス）『彼女の魔力の高さを考えれば簡単な事だ…。大方、魔力を測定出来る測定器の様な物があり、貴様はそれで自分達の戦力に加えようと考えた……違うか？』

俺の言葉にリンディは顔面を蒼白にさせて絶句するしかなかった。そして、クロノはその言葉に驚きのまま艦長に詰め寄る。

クロノ「なっ！？嘘だと言って下さい！艦長！この様な事があっては管理局の信用が失われます！？」

クロノ、無駄だ。そこの馬鹿が言い返す言葉などありはしないのだ

からな……

戒(ネイシス)『さて、帰らせて貰うぞ？行くぞ？二人共これ以上……「待って下さい！？」まだ何かあるのか？』

俺が二人を先導し部屋を出る為に踵を返した瞬間、あの女が悲鳴に近い声で呼び止めて来たので俺は首だけを彼方に向けて口を開く。

リンディ「騙していた事については謝罪をします！ですが事件を早期解決させる為にどうか私達に力を貸して下さい！」

戒(ネイシス)『君達はどうしたい？』

なのは「わたしは変わらずに手伝わせて貰います！」

ユーノ「元はといえば僕の責任だからなのは1人にやらせる訳には行かないよ。」

なのは「ありがとう！ユーノ君♪」

戒(ネイシス)『ふぅ、なら俺も協力するしか無い訳……だな。』

クロノ「どう言う事だ？先程までの非協力的な態度とは違うが……」

バハムート〈ただ単に事情が変わっただけだよ～♪〉

クロノ「なっ！？デバイスか！？」

戒(ネイシス)『また面倒臭い事になるな…ᴗ』

腕輪状になったバハムートが喋った事に対してクロノは驚愕し、ネイシスは落胆するしかなかった。

クロノ「コレはどう言う事だ！何故君がデバイスを所持しているんだ！？」

戒（ネイシス）『説明しても納得はしないだろうからパスだな……。』

クロノ「僕は真面目に聞いているんだ！！！！」

戒（ネイシス）『なら、コイツに聞けば良いだろ？バハムート、通常モードでは無く省エネモードで顕現してくれ……。』

バハムート〈りょ～か～い♪〉

ネイシスの了承の言葉にバハムートは軽く答えると腕輪になっている状態から猫と同じ位で一般的にみれば中型位の蜥蜴に見えなくも無い……

バハムート「誰が蜥蜴かな（黒笑）」

戒（ネイシス）『バハムート、誰に言っているんだ？』

バハムート「電波な人にだよ～？」

戒（ネイシス）『訳が判らんそ∪兎に角、説明してくれ……。』

バハムート「わかったよ～♪僕がか…ネイシスと契約した経緯を話

すね？」

クロノ「気の所為か？今…名前の所を言い直してなかったか？」

バハムート「気の所為だよ？で、僕は元って言うのも変だけど倉庫外で君達は見てる筈だよね？」

なのは「そうなの？」

戒（ネイシス）『倉庫外で戦闘をした怪鳥の正体がバハムートだ…。』

ユーノ「姿が違い過ぎない？」

バハムート「それはネイシスとの契約の時に魔を祓う儀式を並行してやったからだよ？僕自身の本来の姿はこっちだからね？」

リンディ「では何故あの様な姿でいて、なのはちゃん達を襲ったのかしら？」

バハムート「あれは精神制御（マインドコントロール）を受けて尚且つ闇の魔力を受けた為にあの姿になっていたんだよ。」

クロノ「それは誰の仕業でやっていたんだ？」

バハムート「僕も精神制御を受けた後の事は曖昧にしか覚えてないから誰のって言われてもどう言えば良いのか困るよ……」

クロノの問い詰めるかの様な言い方にバハムートは困った表情で言うとそのまま俯いてしまった。

女性陣「クロノ（君）？（黒笑）」

クロノ「ちょっ！？待て！？僕が何か悪い事でもしたのか！？って母さんその手に持ったお茶はまっ！！」

バハムートの仕草に母性本能的な物を擽られる何かがあったのか、問い詰めた本人であるクロノには女性陣からの手厚い歓迎を受け、トドメにはリンディ茶を無理矢理に飲まされて撃沈した。そのクロノを放置した後は円滑に話し合いは進み、最後になのはがネイシスに質問をしようとしていた。

なのは「えっと、ネイシスさんはなんでわたしの事をそんなに気に掛けてくれたんですか？」

戒（ネイシス）『それはな、なのはは手の掛かる妹みたいなものだからかな？だから何時も気に掛けているんだ……。』

なのは「えっ？何時もって？」

戒（ネイシス）『そ、それは？（ま、不味い！うっかり口を滑らしてしまった！？どうする？！）』

バハムート「あ～らら。もうこの際だからばらしちゃえば～？」

ユーノ「バラすってどう言う事？」

ババムート「なのはちゃんって言ったっけ？君の何時も隣にいた筈の子は一体何処に行ったのか心配じゃないのかな？」

なのは「えっ！？戒君の事を知ってるの！？教えて！？戒君は今何処にいるの！？」

ババムート「君の目の前にいるよ？」

ババムートはなのはの問いにネイシスの肩に乗りながら器用にネイシスの頭を前脚でポムポムと叩く。それになのはが困惑し、ネイシスは嘆息する。

なのは「えっと、ほんとに戒君なの？」

戒（ネイシス）『……そうだよ。なのはは無茶を仕出かさないか心配でワザと離れて様子を見ていたんだ……。』

リンディ「話が見えないのだけど？」

ユーノ「……彼はなのはと同い年の男の子で黒逸戒って言います。」

戒（ネイシス）『まだ納得していない様子だな、ユーノ・スクライア……』

ユーノ「当たり前だ！」

なのは「ゆ、ユーノ君！？」

戒の呆れた様な言葉にユーノは彼らしからぬ怒声を張り上げるそんなユーノを見た事が無いなのはが困惑して彼の名を叫ぶ……

ユーノ「君はジュエルシードがどれだけ危険な物か認識していながら他人の事など関係無いと言ったよね！僕はそれが許せない！それだけの力を持ちながらなんで……」

戒『前に言った筈だ…俺は他人の事よりも身内や仲間の事を優先すると……なら逆に聞くがもし自分の身内が助けを求めて、近くで他人も助けを求めている。どちらかしか助けられないとしよう……貴様ならどうする…ユーノ・スクライア？』

ユーノ「それは……」

戒『貴様の性格なら悩むだろうが俺は即座に両方を助けるがな…。どの様な方法を……外道と言われ様ともな……』

ユーノ「そんな事は不可能だ！！！！それにもし君が両方を助けたとして君は満足かも知れない…けど！？それでもし君の行動に対して人々が責めて来たらどうする！！！！」

戒『そんな物は百も承知だな…結局の所俺のやる事は偽善者のそれと変わらない。恨みも買えば復讐される事だってある。』

ユーノ「それが判っていながら何故君は……！？」

戒『少し落ち着いて話せないのか…。今の貴様には余裕と言う物が感じられないぞ……』

ユーノ「僕は……！？」

ユーノが言葉を続け様とした瞬間、白い煙の様な物がユーノの周囲

に現れて、ユーノが糸の切れた人形の様に倒れる。

なのは「ユーノ君！？」

クロノ「一体何をした！？」

戒『言葉遊びの為の時間などありはしないから眠って貰っただけだが？それにユーノが納得する様な言葉は俺からは出ないからな……。』

リンディ「貴方は一体何をしたいのかしら？」

戒『俺はただ哀しみを断ち切るだけだ…。』

クロノ「哀しみ…だと？何を言っている？」

戒『別に理解しなくともいい……クロノ達には到底理解など出来はしないからな……。』

クロノ「なんだと！」

リンディ「クロノ！今は抑えなさい。話し合いの続きが出来ないわ……。」

戒『そうだな…。』

リンディ「要約するとなのはさんは協力してくれる訳だけど、貴方も協力してくれるのよね……？」

戒『まぁな。確かに協力はするが俺は条件を提示させて貰うぞ？』

リンディ「内容にもよるけどなるべく添える様にするわ。」

戒『なるべくでは無く絶対だ…そうでなければ俺は貴様等に協力する事はしない……。』

リンディ「……わかったわ。」

クロノ「艦長！？」

戒の言葉に妥協をせずリンディは苦い顔をしながらも了承する。それにクロノは信じられないとばかりに声を上げる。

戒『条件は３つ……１つ、俺に関する事に対しての情報を管理局側に秘匿し尚且つ俺の力に解析等の禁止。２つ、俺に対しての行動の抑制をしない事…それから生じる事象への不干渉勿論、理に叶った事であれば従うがな？そして３つ、フェイトとその身内に対してクロノが手出しさせない事だ。』

クロノ「最後の条件はなんだ！？」

戒『なんだと言われてもお前はフェイトを捕まえる気でいるだろ？』

クロノ「彼女は犯罪者だ！犯罪者を捕まえる事の何が悪い！？」

戒『あの子が本当に犯罪者だと思うのか？なら、お前は執務官失格だな…。』

クロノ「なんだと！」

戒『上っ面だけを見ずに内面的な物も知らずに即逮捕をするのは無能な輩のやる事だ……。』

クロノ「僕が無能だと言うのか！？」

戒『では無能では無い……と？証明出来るのか？』

クロノ「ならば、勝負しろ！実力を見れば簡単に僕が無能で無い事が判る筈だ！！！！」

戒『実力だけが全てでは無いのに……それが判らぬ……か。良いだろう。なら、俺は魔術及び魔法は使用せずに体術のみで戦ってやろう。勘違いするなよ？俺が扱っている物はどれも桁外れな威力の為に体術のみで戦うと言うだけだ。』

クロノ「吠え面を掻かせてやる！」

戒『勝負なのだから賭けをしてみるか？賭けの内容は俺が勝てば先程の条件を確実に守って貰う。』

クロノ「負けた場合はどうする積もりだ？」

戒『無償で手伝い、俺の力の解析をさせてやる……。』

クロノ「良いだろう！その賭け、受けて立つ！場所は仮想シュミレータールームで行うぞ！僕の後に着いてこい！」

戒『ボソッ（餓鬼は扱いやすくて助かるな……）』

バハムート「戒ってば腹黒いね～♪負ける気なんてサラサラ無いのにあんな事を言うなんてさ～？」

戒『約束を確実に守って貰う為に芝居を打っただけだ。それにクロノの奴の犯罪を犯した者は全て犯罪者だと言う理念をぶち壊す良い機会だからな…利用しない手は無い…だろ？犯罪に手を染めなければならない状況等幾つもある訳だからな…。』

クロノ「こっちだ！早く来い！！！！」

戒『では艦長殿、済まないが少しの間だが御子息を借りる…。』

そして、艦長室を出る戒達と流れに追いついていないリンディ達だが、リンディは頭を抱える様にうなだれる。

リンディ「まったく、クロノには困った物ね。あの頑固さは誰に似たのかしらU」

エイミィ「とりあえず、２人を追い掛けた方が良いんじゃないかな…？」

リンディ「それもそうね。なのはさんも行くかしら？」

なのは「ユーノ君はどうすれば良いですか？」

リンディ「そう…ね？わたしがおぶって行こうかしらね？」

なのは「えっ！？でも……」

リンディ「なのはさんじゃ同じ位のユーノ君を連れて行くのは無理でしょ？エイミィはオペレーターだから論外だから大人のわたしがおぶって行こうって事よ？それに急がないと2人がさっさと勝負を始めちゃうしね？」

なのは「じ、じゃあ、お願いします？」

そして、4人は艦長室を出て先に出て行った戒達の2人を追った。その2人は既にシュミレータールームに入って各々で戦闘の準備をしていた。

戒『勝負の前に判定の決まりを作っておくか？』

クロノ「何の判定だ？」

戒『勝ち負けのだ。定番としてはギブアップ若しくは気絶……だな。』

クロノ「それで良いだろう？」

戒『じゃあ……始めるか！！！！！』

クロノ「S2U！！！！」

S２U〈ｓｅｔ　ｕｐ〉

戒はその場で肩幅に足を開き構えらしき物をせずに立ち、クロノはバリアジャケットを展開し、愛機のＳ２Ｕを構える。そして……

クロノ「行くぞ！Ｓ２Ｕ！」

Ｓ２Ｕ〈スティンガー〉

クロノはそう叫ぶと周囲に９つの青の魔力球を作り出しその１つ１つを時間差を使い速度重視の直進型の射撃魔法を撃ち出す。

戒『１つに時間を取られたら間髪入れずに後続の魔力弾で…か。絶妙な間隔だな……しかし、俺に対しては……無駄だ！！！！』

戒は叫ぶと同時に両拳を振るい魔力弾の全てを叩き落とし、その勢いのままクロノの下へと走る。しかし、クロノはそれを予測していたのか冷静に飛行魔法を行使して上に上がる。そこへ２人を追って来たなのは達の４人が丁度この部屋を見る為のモニター室の様な部屋に到着する。

リンディ「もう始まっているわね。」

エイミィ「クロノは目立った怪我はまだ見られないね？」

なのは「戒君頑張ってーー！」

そんな様子を戒は気付いたのかなのはに向かって軽く手を振る。

クロノ「余所見をしているなんて随分と余裕だな…？」

戒『なら、その余裕をなくしてみろよ…。』

クロノ「ならやってやるさ！」

そうクロノは言うと戒目掛け飛び込むと上段蹴りや杖を使った槍術で突きや薙ぎ振り下ろし等を用い攻める…。

戒『驚きだな…。魔法だけではなく武術も多少なりとも心得があるのか？』

クロノ「当たり前だ！執務官になるには魔法だけではなりえないからな！」

クロノの怒涛の攻めを戒は涼しい顔をして捌き切り一度距離を空けてから賞賛の言葉をクロノに言うとそれを当然の事だと言う。

戒『なら、槍術ではなく体術を教えてやる…よ！』

クロノ「Σなっ！？」

戒は最後の言葉と同時に体の輪郭がブレたと思った瞬間には既にクロノの懐の深くまで入っていた事にクロノは有り得ないと言いたげな声を上げる。そんな事を余所に戒はそのままクロノに掌底を上方へと打ち上げる。

クロノ「くっ！アイツは……」

空中で体制を整えたクロノは地上にいる戒を見るが其処には既に戒は居らず辺りを見回す。そこへ……

戒『俺はこっちだ！』

クロノ「なに！？上だと！？」

戒「鳳凰…天駆！」

クロノ「うわぁぁぁぁぁ！！！！！」

クロノは戒が自分よりも上にいる事に動く事よりも驚きが先に行ってしまいそれが致命的な事となり戒の気を火に変え身に纏った炎と蹴撃を喰らい地に叩き落とされる。

戒『もう終わりか？』

クロノ「くっ！まだ……まだだ！」

そう言うとクロノは地に伏した状態で杖を使いながら立ち上がるが先程のダメージが大きいのかフラフラとしていた。

戒『ならば！コレを受けろ！獅子…戦哮！！！！更に秘奥技！！獅哮…爆…砕陣！！！！』

，ドガァァァァァァン！！！！！！！！，

戒は叫ぶと同時に再びクロノの懐へ飛び込むと掌底を二度叩き込む

と最後に獅子の形をした巨大な氣を打ち込む。しかし、そこで終わらずに次の攻撃に戒は移る。そして今度の攻撃は全てが獅子の形をした氣で三度クロノの体に打ち込みクロノは壁まで吹き飛ばされその壁に体を強く打ち付けて倒れる。秘奥技…獅哮爆砕陣の威力を物語る様にクロノがぶつかった壁には四方に伸びる様にして罅割れが入っていた。そして……

戒『……まぁ、根性だけは認めるがそれ以上やれば多少の怪我だけでは済まないぞ？』

戒が技を放った場所から動かずにいると壁に激突して倒れた筈のクロノがボロボロの状態で立ち上がる。

クロノ「ま、まだだ……」

戒『ったく。十分だな……クロノ…少し眠れ…』

俺は直ぐに瞬動でクロノの背後に移動して首筋に手刀を軽く入れて意識を奪い倒れる前に抱える。

戒『リンディ、俺の勝ちだな…？』

リンディ「えぇ。貴方の勝ちです。」

戒『そうか。とりあえずクロノを医務室に運びたいのだが先導をしてくれるか？』

リンディ「判ったわ。少し其処で待っててちょうだい。」

そう言うとリンディはなのは達と一緒にモニター室を出る。

戒『アイツ等が来る間に簡単な応急処置をして置くか。』

戒はそう言うと懐から包帯や消毒薬などの衣料品を出すと腕や頭などの流血をしている場所などの止血をしクロノの頭に包帯を巻き、腕にも同様に包帯を巻く。

戒『こんな所か……』

俺が大体の処置を施し終えた所へ俺とクロノが入って来た入口が左右に開くとリンディやなのはに何故かリンディに背負われたユーノと…確かエイミィだったか？が入ってくる。

エイミィ「クロノってば凄い状態だねぅ」

リンディ「医務室へ向かいますのでわたしに着いて来て下さいね。」

俺はそう言うリンディの後ろをクロノをリンディを習う様にして背負い医務室まで歩いて行く。しかし、ユーノの奴何故リンディに背負われているんだ？俺がそんな疑問を頭の中で考えていると何時の間にか医務室に着いた。まぁ、ユーノの事はどうでも良いか。

リンディ「さっ、クロノを此処に寝かせて貰えるかしら？」

戒『判った。クロノの治療は止血や打撲等の応急処置はしたから後

は骨の異常が無いかどうかの精密検査位だな。』

エイミィ「処置が凄い的確でわたしはビックリだよ。わたしでも此処まで的確なのは出来ないからね～。」

戒『まぁ…応急処置程度なら何度かやった経験があるからな…。』

戒の言葉にエイミィがしげしげとクロノの包帯の巻かれ方や怪我の処置した所を見ながら感嘆の言葉を言うと戒は苦笑混じりにエイミィに言う。

リンディ「では、当分の間は此方での調査及びジュエルシードの探索をして下さい。」

戒『判った。』

なのは「はい！頑張ろうね、戒君！」

バハムート「がんばろ～～♪」

なのはは元気に答えて戒に言うとバハムートもそれに釣られて言いながら前脚を上げる。

戒『（フェイト、アリシア2人を救い、プレシアを犯罪者では無くす方法を…そしてフェイトを犯罪者の娘として…人造魔導士として扱いの改善を考えて置かないとだな…。）』

なのはとバハムートの声を聞きながらテスタロッサ家の今後について考える。

話し合い…そして…（後書き）

ご感想をお願いします。

激突！龍対悪魔（前書き）

約1ヶ月振りの投稿で更に暑さでぶっ飛んだ内容になっているかと思いますが、誤字脱字等がありましたら御報告下さいm（＿＿）m

激突！龍対悪魔

とある森の中で結界を張った区域内になのはとユーノそして離れた場所に戒少年Ｖｅはジュエルシードに取り込まれた怪鳥を相手に戦っていた。

ユーノ「なのは！」

なのは「お願いレイジング・ハート！」

ＲＨ〈ｓｈｏｏｔｉｎｇｆｏｒｍ〉

なのは「リリカルマジカル…ジュエルシード、シリアル？……封印！！」

ユーノが半実体化した魔力の鎖…チェーンバインドだったか？それを怪鳥の体に巻き付けて身動きが取れない所へなのはがＲＨを砲撃戦専用のモードへ切り替えると桃色の魔力帯を収束させて怪鳥へと胴体に目掛けて打ち込むとジュエルシードが封印出来たのかジュエルシードによって変異した怪鳥は普通の鳥となって飛び去って行った。

戒『良くやったな…。２人共なかなかに息の合った動きだったな。』

なのは「にゃはははは♪戒君が褒めてくれたの♪」

ユーノ「戒も手伝ってくれればもっと楽に封印出来たと思うんだけどぅ」

戒『なのはが危ない時には手助けをするがまたあの子と戦う時までに魔法の技量引いては戦闘技術の向上をしなければならないだろ？』

なのは「次に会ったら絶対にお話を聞くの！」

戒『ならそれまでに実力を付けないとだな……安心しろよ？俺もなのはの実力の底上げには力を入れて行くからな？』

なのは「お手柔らかにお願いしますの？」

ユーノ「なのは頑張って？」

戒『ユーノも他人事では無いぞ？お前には俺の持つサポート技術を徹底的に叩き込むからな…。』

ユーノ「えええぇぇーー！？『文句があるのか？』マッタクアリマセンυ

ジュエルシードを回収し終えたなのはとユーノが転送用魔法陣によってアースラへ帰還すると俺もそれに続きその場所を後にした。一度だけ森の奥から此方を覗く様に見ているものに視線を送って……

――――時空航行艦アースラ　ブリッジ――――

エイミィ「流石はなのはちゃんだね！あっという間に8個も回収出来たね♪なのはちゃんもだけどあの黒い子も魔力値だけならAラン

クでクロノ君を軽く超えてるよね？」

クロノ　「魔力値だけが全てじゃないそれに…技術だけでもない…それを僕は彼に教えられたよ…。」

エイミィ「あの金髪君？確か戒君だっけ？クロノ君が一方的にボコボコにされたんだっけ？」

クロノ「否定はしないが彼はあれでも手加減をしていたよ…。もし彼が本気で相手をして来たなら勝敗は一瞬で着いていたかもね。」

エイミィ「あれで本気じゃなかったの！？って事はさ？本気を出されたら私達って不味く無い？」

クロノ「精々彼を怒らせない様にするのが懸命だな…ｕ」

その頃戒となのはにユーノはあてがわれた部屋にて待機していた……。

なのは「戒君、何を読んでるの？」

戒『……』

なのは「かっ、戒君？ｕ」

ユーノ「なのは、ちょっと待って。えっと…“コレを読めばキミもデバイスマイスターだ！“……戒はデバイスマイスターにでもなるの？」

戒『……ん？いや、暇潰しにクロノに何かないかと聞いたらコレを渡されてな？意外に面白いぞ？』

なのは「わたしには難しいよぉ？」

戒『そうか？最初の方には基礎となる話で半ば辺りからはその基礎を用いた応用編と言った形でとても解り易いぞ？』

ユーノ「それでも頭の良い人にしか理解出来ないのが現状だと思うけどυ」

戒『そんなモノか？』

「「そんなモノってυ」」

『「「Σ！？」」』

《エマージェンシー！！捜査区域内にて巨大な魔力反応を感知！》

戒『（来たか……）なのはユーノ行くぞ！』

なユ「「うん（わかった）！」」

戒の言葉に呆れる2人であった。そんな一時を壊すかの様に艦内の非常警報装置がけたたましく鳴った。それを聞いた戒達は一目散にブリッジへと急いだ…。

――アースラ　ブリッジ内――

なのは「リンディさん！」

リンディ「なのはさんそれに黒逸君丁度良かったわ。アレを見て貰えるかしら？」

なのは「フェイトちゃん！？」

戒『……』

リンディに施されてブリッジのメインモニターをなのはと俺が見ると直ぐ横にいるなのはが驚愕の声を上げて、俺は無言でモニターを見ていた。モニターに映るのは海の上で吹き荒れる暴風に晒されながら雷を避けるフェイトが映っていた。あの馬鹿が…また無茶をして……

なのは「あの私、現場に……「その必要はないよ…。」…えっ？どうして！？」

クロノ「放って置けばあの子は確実に疲弊して自滅するからだ。」

なのはが俺の横を通り過ぎて階段を上り転送ポートに行こうとするがクロノに遮られ足を止めるなのは…。疲弊し疲れている所を捕縛すれば此方の損害は皆無だからな…。組織の人間としての判断としては賞賛に値するだろうがヒトとしては非道と言われるだろうな…。

バハムート「戒…？」

戒『俺は行かせて貰う……。』

クロノ「君は僕の話を聞いていなかったのか！？」

戒『俺の言った契約を忘れたか…？』

俺がモニターを見るとモニターに映されたフェイトとアルフが竜巻や雷に弾き飛ばされてバルディッシュで魔力形成していた魔力刃が消えた。恐らく既に限界が近いのだろう。それから俺は一度モニターを一瞥してクロノに決め手となる契約の事を持ち出すと苦虫を噛み潰した様な表情(かお)をしていた。

クロノ「くっ！」

戒『ではな…。なのはとユーノも一緒に連れて行かせて貰うぞ。』

クロノ「彼女達は君の契約内容には含まれていない筈だ！」

戒『無理でも行かせて貰う…止めるのであれば強行させて貰う…。それともクロノは自分の友達を助けるのに理由がいるのか？』

リンディ「……判ったわ。」

クロノ「か…艦長！？」

リンディ「でも！…無事に帰って来てね？」

戒『ふっ、愚問だな…。行くぞ！なのは、フェイトを…友達を助け

るのだろ？』

なのは「戒君……うん！行こう！」

そして戒となのはが転送ポートに入ると遅れてユーノが入って来た。

戒『やっとか…。リンディ！此方の準備が整ったぞ！』

リンディ「判りました。では転送します…エイミィ。」

エイミィ「了解！あの黒い子の結界内へ転送開始します！」

エイミィの言葉が終わらない内に俺の足下の転送ポートの魔法陣が眩い光を放ち俺達を包み込んで一瞬の内にあのモニターに映っていた海上に出ていた。

戒『無駄にデカいな…。』

ユーノ「多分残りのジュエルシード６個全てが彼処にあるんだと思う。」

戒『ならコレで全てが決まる訳か…。』

ユーノ「僕自身が招いた事をなのはや戒に手伝って貰って本当に助かったよ。僕一人だけだったら無理だったよ…。」

戒『それは全てが本当に終わった時に言え…。取り敢えずなのはと俺は２人を！ユーノはアレの足止めを頼む！』

俺は2人にそれだけ言うと浮遊術を使って高速飛行をし、今正にフェイトへ雷が直撃コースで飛び込む所へ間に入り障壁を張り防ぎ後ろを肩越しにフェイトを伺って見ると目を大きく見開いて驚愕していた。何故…って今俺はフェイト達と大差内身体年齢に体を変えていたな…υ

フェイト「アナタは誰ですか？何故私を助けるの？」

戒『ハァυ友人を助けるのに理由が必要か？フェイト。』

フェイト「何故わた「フェイトぉーー！」アルフ！？」

アルフ「フェイトぉーー！良かったよ無事で！」

フェイト「アルフも無事で良かった」

アルフ「あのガキンチョに助けられたんだよ。」

なのは「なのははガキンチョなんて名前じゃないよ！高町なのはって名前なの！」

戒『取り敢えず無駄話は其処までにしてアレの対処を早急にしないとだな…。』

俺が暴れまわる竜巻を見るとユーノが上空から緑色の魔法陣を手前に出現させてチェーンバインドを使って動きを封じていた。それを見た俺を除く3人は打ち合わせをしていたかの様に直ぐに動き始めていた。フェイトはなのはから魔力をデバイスを介して分け与えて貰ったのかバルディッシュには今までの様な魔力刃が形成されてい

た。

戒『アルフはユーノと一緒に竜巻を1カ所に集めてくれ！』

アルフ「指図するんじゃないよ！！」

フェイト「アルフ、今はそれ所じゃないよ？」

戒『俺も抑えに回るぞ！［エルキ・ドゥ］天の鎖よ！！』

戒が左手で虚空から出てきた鎖を掴むとアルフとユーノが抑える竜巻へと全力で投擲し竜巻へと命中すると竜巻の周囲を四方から囲む様にして虚空から先程の鎖が無数に飛び出して竜巻を絡め取り身動きが取れない様にした。

ユーノ「すっ、凄い！」

アルフ「アタシ等必要だったのかい？ｕ」

戒『お前達がいなければこうも簡単には行かなかったさ…。なのはフェイト今の内だ！』

なのは「うん！行くよフェイトちゃん！2人できっちり半分こ！お願いレイジング・ハート」

ＲＨ〈ｓｈｏｏｔｉｎｇｆｏｒｍ〉

フェイト「うん…。バルディッシュ」

ＢＤ〈ｃａｎｏｎｆｏｒｍ〉

なのは「ディバァィィィィン」

フェイト「サンダァァァァァァ」

なのは「バスタァァァァァァァ！！！！！」

フェイト「レイィィィィィジ！！！！！」

竜巻を取り囲む様にフェイトの魔法が炸裂した直後なのはの放った桃色の巨大な砲撃が直撃し、竜巻が霧散して荒れ狂っていた海が穏やかな海へと変わり竜巻が渦巻いていた上空には封印が完了した６個のジュエルシードが停滞していた。

なのは「フェイトちゃん…。わたしは只フェイトちゃんと友達に…なりたいんだよ。」

フェイト「私は……」

戒達がフェイトを見守っていたが一瞬だが不穏な空気を感じたが気付いたのは戒だけであった…

戒『ちぃぃ！！！！！』

ユーノ「戒！？」

アルフ「どうしたってのさ！」

戒がいきなりなのは達の所へユーノ達の制止を無視して飛び出した。

戒『なのは、フェイト！』

なのは「えっ！戒君いきなりどうしたの／／／

クロノ「どういう事だ！ジュエルシードは封印が終わって此処には既に用は無い筈だぞ！」

戒『そうとは限らない…まぁ、此処からは俺の領分だ…。』

戒がそう言った瞬間海面を割る様にとてつもないデカさのイカ？の様な生物が現れた。

全「なっ（えっ）！？」

戒『デビル・クラーケン…か。本格的な魔物が出て来たな…。それ程までにしてコレが欲しいと見えるな…。』

ＤＣ「ギシャァァァァァァァ！！！！」

クロノ「アレは一体何なんだ！」

戒『説明は後だ！フェイト達はさっさとこの場を離れるんだ！なのは達はクロノと一緒にアースラへ帰還するんだ！』

バハムート〈多分無理だよ…。アイツが出て来た時に強力なジャミングと此処から出られない様に隔離結界が張られているから離脱もアースラへの帰還も出来ないよ？〉

戒『なら、バハムートはフルサイズでなのは達を護衛してくれ。俺はアレを殲滅及び浄化を行う！』

戒はそう言って左腕にあるバハムートを掲げると腕輪が光り輝きその凄まじい光になのは達は腕で光から目を庇っていると眩いばかりの光が次第に収まりなのは達の後ろに巨大な影が差し込みなのはを始めとしたメンバーが後ろを振り向くとＤＣよりもふた廻りもデカい龍がいる事に全員が口をあんぐりとあけて絶句していた。

バハムート「やっとこの姿で出られたよ…。先ずは物理防御用としてプロテス、シェルに魔法防御用でリフレクで大丈夫だね。戒、流石に一人では無理だから僕も行くよ。インテリジェントであると共にユニゾンデバイスでもあるからね。」

戒『ならどちらが主導権を取る？』

バハムート「戒で決まりだよ？」

戒『なら、早速行くぞ！』

戒、バ『「ユニゾン・イン！！！！！」』

戒とバハムートが精神を同調させてユニゾンをすると戒の金髪が大空を思わせる様な蒼色に顔の回りには痣とも刺青とも取れる炎や雷の様なモノが浮き上がり、手足は龍の四肢に背中からはバハムートの翼がそのまま生えて、腰の下辺りからは龍の尻尾が生えていた。

戒　『まんま、竜人だな…。（半人半神や吸血鬼化に加えて竜人化とは随分とヒトの枠から外れて来たな…。ゼロ魔では龍化したりしたがな……）一撃で決めるか……。』

なのは「戒…君…なの…？」

戒『あぁ、バハムートとユニゾンして姿が変わってはいるが正真正銘なのはの知っている黒逸戒だ。』

クロノ「君にはほとほと驚かされるな。魔力が以前と違い段違いに跳ね上がっているな…ｕ」

戒『ユニゾンした事により魔力ブーストされているからな。それと其処から一切出るなよ？一歩でも出れば大怪我では済まないからな…。』

俺はクロノ達にそう釘を刺してから両翼を羽ばたかせてＤＣへと高速で接近すると先程まで静観していた時とは違い１０本の足を巧みに扱い此方の接近を阻んでくるが如何せん図体がデカい為なのか足の一本一本の動きが遅いが当たれば常人ならばただじゃ済まない威力を孕んでいた。その証拠に俺が躱した足が海面に直撃した瞬間ビルの十階相当に値しそうな水柱が立ち上っていた。……馬鹿力だな。

バハムート〈どう仕掛けるの話？〉

戒『奴に十分に接近した瞬間に多重結界を周囲に張り巡らしてから零距離からメガフレアを打ち込んで始末する！バハムートは多重結界の準備を！俺は奴の懐へと飛び込む！』

戒は更に飛行速度を上げて周囲を飛び交いながら魔法の射手や白き雷を無詠唱で放ち一本また一本とＤＣの足を着実に仕留めて懐へと入る為の進路を取る…。そして

戒『今だ！やれバハムート！』

バハムート〈多重捕縛結界展開！〉

戒『逝くぞ！メガァァァァァァ』

戒は多重結界内にて両の掌に顕現した太陽を思わせる程の巨大な蒼白い炎を野球ボール大に収束させてから掌をＤＣに向ける……そして

戒『フレアァァァァァ！！！！！』

戒の言葉をトリガーにして多重結界内が蒼色に発光した瞬間（とき）世界全体が揺れたと思わせる程の衝撃が起きる。

な、フ「「戒（戒君）！？」」

結界内が爆煙で立ち込めていたが結界が解かれたのか煙が周囲に拡散していたが中心から風が煙を吹き飛ばす様にして竜人化した無傷の戒が現れた。

戒『浄化…終了……っ！？』

某パイロット風に戒は言葉を紡ぎながら次に来る事象に構えていると晴れ渡っていた空が急激に曇り出した瞬間戒はテレポートを使い

なのは達の上に移動すると竜人化した状態で強化された障壁を展開すると巨大な紫色の雷が一筋走り障壁にぶち当たると四方八方へと拡散しつつ海面に直撃して巨大な水飛沫を上げる。その際にフェイトが強張った口調で「母さん」と言うのを戒は聞き逃さなかった…。

戒『（プレシア、貴様の答えはまだ聞いていないぞ……）』

雷が収まったのを確認した戒は障壁を消すとクロノに有無を言わさずフェイトとアルフを逃がしてなのは達と一緒にアースラへと帰還するが、その際にフェイトが「助けてくれてありがとう」と言ったのを僅かに聞くと薄く笑みを浮かべてから消えた。

フェイト「戒……」

アルフ「フェイト、早く行くよ？」

フェイト「うん…。（戒は何処かネイスさんに雰囲気が似てた…戒はネイスさんなの？）」

アルフに施され飛行魔法でその場を離れるフェイトだったがその心中は戒の事を考えていた。

―――アースラ　ミーティングルーム―――

クロノ「～～～～～さて、戒君には先程の怪物の説明を願いたい…。

」

アースラに戻った俺達は真っ先にミーティングルームへと向かうと既にリンディとエイミィが座っていてクロノはリンディの後ろに立ち、俺達が席に座ると先程の戦闘であったやり取りとジュエルシードについて問答をしたがなのはは戸惑い勝ちに言い、俺は一切喋らないで無視を一貫してなのは達とのジュエルシードの話が終わったのかその後に現れた魔物が映し出された映像と戦闘映像を記録したクロノとなのはのデバイスから抽出した映像を卓上に映して冒頭に戻る。

戒『アレは魔物と呼ばれるモノで今回のは海の怪物…神話等に出てくる船を襲うとされたクラーケンと呼ばれるモノだ……。』

クロノ「馬鹿を言うな！神話など架空の話に「クロノ…」母さ…艦長！」

リンディ「クロノ、話が進まないわ…。それであの魔物？がもし本物のクラーケンとして何故あの場に現れたのかしら？」

リンディのもっともな答えになのはを始めとしたメンバーは戒を凝視しており、戒は話さない訳には行かずに口を開いた……。

激突！龍対悪魔（後書き）

ご感想をお待ちしております。

状況説明会……面倒臭いな（おぃ！

―――アースラ　ミーティングルーム―――

戒『先ず始めに言って置くが今から話す事は真実であると共に他者に対して他言無用にして貰う…。それが守れないならば話す事は無い……。』

リンディ「判ったわ。」

クロノ「君に聞かないと判らない事だからな…。」

戒『先ず始めに俺はこの世界の人間ではない。かといってクロノ達の様に次元世界からの人間でもないがな…。俺は次元の更に上に位置する時空を越えて来た人間だ…もっとも既にヒトの枠から大きく外れた存在となっているがな……。』

クロノ「それはどういう事だ？」

戒『その話はまた今度にしようか。今はあのクラーケンについて聞きたいのだろう？何故ヤツがジュエルシードを狙ったのかを……』

クロノ「確かにそうだな…。」

戒『続けるぞ？アレが何の為にジュエルシードを集めているのかは不明だがクラーケンは親玉では無くチェスで言う所でルーククラスの様な物でアレ以上の魔物がまだいると考えて良いだろうな…。付

け足して言うのであればこの世界に来て葬った魔物はアーク・デーモンにエルダーヴァンパアイアとドラゴンゾンビに加えてなのはと別れてから遭遇した雑魚の魔物１７体に今回の戦闘で倒したクラーケンを合わせて２０体位だな…。』

リンディ「そんなに居たの？」

戒『上級レベルの魔物に関しては高い知能に加えて人間と同じ様に言葉を話す奴もいるが人間を劣等種と見る奴らが殆どだ。更に言うと魔物と普通の人間が戦う事は先ず無い…と言うよりも戦いにすらならない。』

クロノ「その魔物に対して複数で挑めば勝てないのか？」

戒『下級レベルの魔物ならばなんとかなるだろうが中級レベルは辛うじてだが上級レベルに特級レベルとなればクロノレベルの魔導師が数千人集まってやっと対等に戦えるといった具合だな…。』

エイミィ「Ａランクのクロノ君が数千人って絶対に無理だよｕ」

戒『更に上級や特級の魔物は魔法耐性が極めて高い奴が多数存在し魔導師で言うとＡランク以下の魔力を伴った攻撃は無力化される…。そして魔物の階級は魔力レベルで例えるならば下級の魔物がランクＣからＢ－で中級がＡからＡＡ＋で上級がＡＡＡからニアＳＳで最後に特級がＳＳＳから最悪ＥＸ…つまり測定不可な奴さえいる……。魔物に関して言うのであれば管理局が出張る意味は皆無だ…無駄な被害を被るだけだ。』

戒の魔物のランクと魔導師換算での実力を教えられたなのはを除く

次元世界組は顔色を蒼白にさせる。階級によっては対処が可能な物もあるがそれも下級の魔物に限り中級からは単体では多少厳しく更に其処へ上級の魔物になっただけでエース級の魔導師並の魔力を持つ魔物が存在している事に驚きを隠せなかった

クロノ「ばっ…馬鹿な有り得ない…有り得てたまるか！管理局の手に負えない者が存在する訳が！」

戒『現にクラーケンと相対した瞬間に俺が相手をして葬っただろうが。まぁ、クラーケンは中級レベルの少し上程度だからＡＡ－って所だろうな…。だからと言って魔導師が楽勝出来る相手では無い事には変わりは無いがな…。あの図体で砲撃を放ったとしても深手を負うわけでもないし、掠り傷程度だろうな…。』

ユーノ「戒はなんでそんなに相手の事を詳しいの？僕達ですらそんな奴等がいるなんて知らなかったのに……」

戒『俺が来た理由は幾つかある…先ずは最初に言った様に悲しみを断ち切る為…そして世界にとっての異分子の排除…世界のバランスを保つ事…大体そんな所だ…。』

クロノ「世界のバランス…つまりは平和と言う事か？その点に関しては管理局が行っているから問題は無いが異分子の排除とはどう言う事だ？」

戒『簡単に説明をすれば此処とは違う時間軸…所謂平行世界（パラレル・ワールド）から来る悪意や狂気を持った者の事だ。今回現れた魔物がもっともたる証

拠だがアレ以上に厄介な存在が住まう異世界もある…。人智を超えた存在やヒトに認識されないモノ…悪鬼や妖等(あやかし)数え上げたら切りが無いがそう言った者達から世界を守るのが俺の仕事…と言うか責務だ。』

クロノ「責務？では君は誰かに命じられて行動しているのでは無いのか？」

戒『君達が法の守護者と言う様に俺にも世界の守護者としての仕事があるだけだ。』

クロノ「スケールのデカい守護者だな…。」

戒『茶化しているのか？だが俺が相手する連中は確実に人智を超えた奴等だ。ヒトの身では抵抗する前に……コロサレルゾ？』

一瞬だけだが最後の一言にほんの少しの本物の殺気…戒に言わせればだが…他の者達にはキツい物だったらしくなのはは腰を抜かし、ユーノとエイミィは仲良く気絶、リンディとクロノは気丈にも構えていたがクロノは目に見えて足が震えていてリンディは顔を蒼白にしながらも此方を見続けていた。

戒『人語を介す魔物や理性の無い魔物では圧倒的な力量差が現れる理性の無い魔物は思考する事は無いが人語を介す魔物についてはヒトと同じように思考をし、高い知能を持った者については魔術を行使する程だ。健康状態を害する魔術から死に至らしめる魔術を使い更には禁術を……所謂封印指定の魔術を平気で使用する奴まで存在

するからな…。』

リンディ「そ、その禁術とは…一体？」

戒『……死者を蘇らせる術が一般的だが唯蘇らせるだけじゃない…体の構成物質から魂の在り方まで完全に再生させる。現代の魔術師や錬金術師でさえ到達した者はまだいないがそれを行ってなし遂げた者はいないが行った人物は錬金術の定義である等価交換により必ず代償として肉体の一部を持っていかれる。』

クロノ「肉体の一部をだと？まるで見てきたかの様な台詞だな…。」

戒『実際に行ったからな…。で、話を続けるがそれだけの代償を払っても……ヒトの形では無かった。いや、ヒトとしての完全な形とは言えないだけで蘇生には成功はしたがその後の代償として肉体全部持ってかれる弟に左足を持っていかれ、肉体を失った弟の魂を鎧へと定着させる為に更に右腕を失う兄を……我が子の死を受け入れる事が出来ずに人体錬成をし内臓を持ってかれる女性を……そしてそんな世界の中賢者の石と呼ばれる等価交換を無視する事が出来ると言う伝説に踊らされ、辿り着いた先には又しても人体錬成による物だった。賢者の石の原材料は生きたヒトであったんだ……追い求めた物が又しても自分達を苦しめ…！悲しみと…！怒りへと…！追い込んだ！そんな彼等を少なからず俺は知った。そして、俺はその世界で何が出来るか悩み、取った行動は実に簡単だった。自身の持つ魔力と宝具を使い因果の鎖を断ち切った。その結果を知る事は俺には出来ないがな……。』

なのは「何でなの？」

戒『世界に拒まれたからさ…。世界に取っては異常性のある力を使った俺を危険因子と判断する世界だって出てくるのは簡単な答えなんだ。錬金術が発達した世界でそれ以外の力を持った者が強力な力を発動…行使すれば世界から弾かれるのは明白だ。……そして拒絶反応を示された世界には二度と行く事は出来ない。』

クロノ「君はそんな過酷な運命を呪った事は無いのか？」

戒『俺は二つ目の世界に渡る時には既に受け入れていた。それが約束だったからな……。（アイツ等との…な。）』

リンディ「……取り敢えず貴方の目的はこの世界に侵入した異分子の排除と言う事で良いのかしら？」

戒『それで間違いない。それと……』

リンディ「わかってるわ貴方の言う魔物と呼ばれる存在が現れた場合は任せる事にするわ…。手助け出来ないのがとても歯痒いけどね…。」

戒『その心使いだけで充分だ…。それと先程の雷撃魔法についてだが……』

クロノ「あれは正確に言えば空間攻撃に属する魔法だ。残留魔力残滓による逆探知の成功により首謀者が判明した。」

リンディ「プレシア・テスタロッサ…私たちと同じ次元世界出身の魔導師で研究者としても有名な人だったけどある時にその消息を断

っているわ。」

エイミィ「家族構成はフェイト・テスタロッサと使い魔のアルフになってるよ。（でも実際の娘は……）」

戒『で、首謀者は判明したが肝心の根城は判ったのか？』

エイミィ「空間攻撃魔法だけじゃあ其処までは判らなかったの。何かヒントになる物があれば……」

戒『つまる所はまた相手の出方次第と言う訳か…。十中八九此方が保有するジュエルシードの奪取を狙ってくるだろうな…。』

リンディ「そうね…。取り敢えず貴方達一度御両親達の所に戻った方が良いわね…。長い間貴方達をこの場に拘束するのは出来ないしね？」

戒『そう…だな。一度家には戻る必要があるな。（今後の為にもな……）』

リンディ「では解散とします。クロノは黒逸君となのはさんを転送ポートまで送ってあげなさい。」

クロノ「了解しました、艦長。」

そしてクロノに施されるまま転送ポートまでの道を歩きながら戒はクロノと話をして、ユーノは既にフェレット化してなのはの肩に座って此方を見ていた。

戒『クロノ、相手の出方が判るまでは憶測だけで動くのは軍人としては良くないぞ？ある程度情報があり確信が無ければ無用な被害を生むだけだからな…。』

クロノ「あぁ、君と話をして…戦いを通じてそれは痛感した。相手の実力…それに目的が判らない状態で動くのがどれほど危険かもね。」

戒『それが判るのであれば何の問題は無いな…。また何かあれば連絡をくれ……ではな。』

なのは「またね？クロノ君！」

クロノ「あぁ、また後で…。」

戒達はクロノに見送られて自身の家に喫茶翠屋へと帰った。その際になのはは少しの説教だったが戒に対しては何週間も連絡を入れずに家を空けていた事に対しての士郎と桃子による心身ともに降り懸かるＯＨＡＮＡＳＨＩをされたのは自業自得であった。

状況説明会……面倒臭いな（おぃ！（後書き）

御感想をお待ちしております。

全力全壊！海上決戦なの……字が違わないか？（主人公談）

久しぶりに海鳴市に戻って学校の休みの日に久々にアリサの家に遊びに行く事になったが俺は辞退しようとしたのだがアリサの拾ったと言う大型の犬の話を聞き急遽参加する事となった。

戒『相変わらずの広さだな…。』

なのは「戒君、どうしたの？」

アリサ「なのはーー！戒ーー！」

なのは「ほら！アリサちゃんが呼んでるよ？」

戒『……そうだな。』

俺となのははアリサに急かされる形でアリサ達と合流してからアリサの拾ったと言う大型犬の入っている檻へと向かった……そして……

アリサ「この子なんだけど見つけた時に全身に大怪我した状態だったんだ。この位の犬は飼い主がいる筈なんだけど誰か分かれば良いんだけどね…。」

戒『その犬の飼い主には心当たりがある…。』

アリサ「ほんと！？」

すずか「良かったね、アリサちゃん？」

戒『……俺はもう少しこの犬を見ていたいからアリサ達は先に行っててくれ。』

アリサ「そう？」

すずか「早く来てね？」

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん行こ？（戒君、後で話を聞かせてね？）」

戒『あぁ、判った。（了解だ…。）』

なのは達が屋敷の中に入るのを確認した俺はアルフに話しかける事にした。

戒『アルフ、何故フェイトと一緒ではないんだ？』

アルフ「戒、ごめんよ…。あたし……」

戒『先ずは簡単に説明をしてくれ。状況が判らない……』

アルフ「そうだね…。あたしにこの大怪我させたのはあの鬼婆さ…。あんなに頑張っているフェイトに酷い仕打ちをしてたからあたしは我慢の限界であの鬼婆に殴りかかったは良いんだけど結果は見ての通りさ…。あの子がいるって事はアイツ等も見てるんだろ？」

クロノ《時空管理局執務官のクロノだ。君の話を聞かせて貰ったが詳しく聞かせて貰えないか？》

アルフ「フェイトを助かるなら何だってするよ…。」

戒『なら後日、アルフを連れてそっちに向かう。クロノ、それで良いか？』

クロノ《了解した。それじゃあ、明日の朝に此方に来てくれ。》

戒『判った。だがテスタロッサ家の約束は守って貰うからな…。』

クロノ《判ってる。僕達管理局員はテスタロッサ親子には手出しはしない。》

アルフ「……どう言う事だい？」

戒『まぁ、俺が協力する事に対しての約束事さ…。取り敢えず、アリサ…アルフを拾った子には俺から説明して置くから後でまた来るよ…。』

アルフ「わかったよ。戒……フェイトを頼むよ。」

俺は立ち上がってから背を向けて歩いて屋敷へと向かう途中でアルフが言葉を洩らしたのを聞き軽く義手になっている左腕を軽く上げてやった。この後はなのはとフェイトとの魔法による仮想空間の中で行う戦闘だな…。プレシア、貴様は何がしたいのだ……

アリサ「飼い主に宜しくね。」
すずか「また学校でね。」
なのは「うん！」
戒『あぁ、またな…。』
アルフ「ワン！」
それから暫くアリサ達と遊んで……俺は神話関連の分厚い本を読んでいただけだがそれからだいぶ時間が経ち日が暮れてきた為に各々は別れを言って帰路に着いた。

～そして、次の日の朝～

戒『やはり、その方法しか無いか…。』
なのは「うん。ジュエルシードは全部集めちゃったからフェイトちゃんが出てくるとしたらわたしが集めたジュエルシードを賭けるしかないと思うの…。」
クロノ「仕方ないか…。しかしそうだとして何処でやる積もりだ？」
戒『その事なんだが俺からの提案になるのだがあの時の海上に仮想的に建物を創り出し、広域結界に多重層結界を張る事により周りに

気付かれる事も無く派手にドンパチやれると思うのだが…どうだ？』

リンディ「そうね…。それならば周囲に気を配らないで済むわね…。」

エイミィ「ならその準備はわたしがするね！背景とかの設定は細かくやっておくね♪」

クロノ「エイミィ、遊びじゃないんだぞ？」

エイミィ「わかってるよ～？」

戒『夫婦漫才は余所でしてくれ。それとリンディ、探査用の機械を一台貸して欲しいのだが……。』

リンディ「何か調べ物かしら？」

戒『まぁ、そんな所だ。少し引っ掛かる事もあるがまだ憶測に過ぎない為に話せないが……。』

リンディ「わかったわ。」

戒『で、なのは上手くやれるな？』

なのは「任せて！」

ユーノ「僕は手を貸せないけどなのはを応援してるからね。」

戒『俺は調べ物があるから多分見られないと思うがなのはが勝つと信じてるからな…。』

なのは「うん！／／／／／／／／／／／／」

――アースラ　戒臨時自室――

戒『なぁバハムート、やはりお前を捕まえたのはあのロキで間違いは無いのだな？』

バハムート「どのロキか判らないけど僕を捕まえたヤツは自分の事を悪神ロキって言ってたよ…。」

戒『そう…か。（ロキはあの時に魂はレナスに回収されていた……ロキの名を語った偽物か若しくは平行世界から来たロキか……兎に角ヤツが姿を現さないと確認のしようが無い…か。）取り敢えず今はお前のデバイスとしての機能の増設をしないとだな…。ユニゾンは切り札として通常時のデバイスとして形状をどうするかだな…第一は刀で第二を槍にして第三は双銃で良いか……後はデバイスを媒介にしたネギまの魔法を使用出来る様にしてラプラスデモンコンピューターと歪曲生成装置を加えて……』

暫くして……

戒『こんなものかな…。』

バハムート「ユニゾンしなくても充分過ぎる程に強くないかな…？」

戒『相手が本当に〈あの〉ロキであるのであれば用意するに越した事は無いんだ…。』

バハムート「口振りからして戒はロキの事を知っているの？」

戒『まぁ…な。俺は色々な世界を渡っていたがその一つでロキと対峙する事があったその時のロキは正しく神と呼ぶに相応しい力を持ち合わせその守りにはフェンリル…そしてブラッドペインの2体の魔物がいたがその2体がかなり厄介だったな…。俺1人ならまだしも他の連中との連携をする為に能力に制限をしていた為に苦戦をしたな…。』

バハムート「君が能力を制限した状態で苦戦したってその時のロキやその魔物達ってそんなに強力な力を持っていたの？」

戒『まぁ、仮にも相手は北欧神話に登場する魔物や神だからな？神格が同じかそれ以上であっても軽く倒す事の出来ない相手だからな……ヤツの持っていた世界の四大宝具の一つであるドラゴンオーブは使用すれば世界を一瞬で滅ぼしかねない威力を内包していたからな…。もし本物であるならば世界一つと引き換えになる事もあり得る……そろそろ行くか？2人の対決の決着を見届けてやらないとだからな？』

バハムート「そうだね。」

待機状態のバハムートを右腕に装備した俺はテレポートを使い決着の場……あの海上のビルの一つに移動した。

戒『もう佳境の様だな…。』

俺が目にしたのはフェイトが自身の近くに魔力球を無数に配置した得意魔法であるフォトンランサーのバリエーションの一つファランクスでバインドにより身動きが取れないなのはに向けフェイトの言の葉を引き金にして無数の雷槍がなのはへと殺到した。そして……

なのは「バインドって他の魔法が命中した後には消えるんだね……じゃあ今度はこっちから行くよ！」

フェイト「くっ！」

戒『（ほぉ、空間座標の指定した固定型のバインドか？あの射撃魔法の嵐の中で冷静に見る…か。１０に満たない子供にしてはとんでもないな……）』

戒がそんな事を考えて見ているとなのはのディバインバスターを防ぎきったフェイトがいたがふと周りに漂う魔力素が上へと昇って行くのに気付き上を見上げて絶句するフェイト

フェイト「…収束……砲撃…！」

なのは「受けてみて！ディバインバスターのバリエーションを！全力…全壊！！！！」

RH〈スターライトブレイカー〉

なのは「スターライトォォォ……ブレイカーァァァァァァァ！！！！！」

フェイト「くっ！うおぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

戒『（決着……か。）行くか。』

戒はユーノ達の近くに下り立つとアルフが何故か驚いていた

アルフ「戒、アンタ何時の間にいたんだい！」

戒『決着のつく少し前だな…。』

ユーノ「調べ物は？」

戒『あぁ、それは…！？』

アルフ「ちょっ！戒何処に行くんだい！」

戒『2人が危ない！スキル発動…龍皇の系譜！行くぞカイザァァァァァァァ！！！！』

俺はそう叫んでBFに登場する龍の一体カイザーに姿を変えなのはとフェイト…2人の後ろに移動した…。

なのは「ひっ！？」

フェイト「くっ！？」

戒『落ち着け！そしてそこから動くなよ？』

戒はそれだけ言うと2人をその掌で押し潰さない様にして優しく包むその瞬間に頭上から巨大な紫電を纏った雷が幾筋も降り注ぐ。そして本命とばかりに特大の雷がカイザーとなった戒に直撃した瞬間爆発した。

ユーノ「戒！なのは！」

アルフ「フェイトォォォォォォ！！！！！」

戒『（安心しろ全員無事だ…。）』

ユ、ア「「（（戒！））」」

アルフ「（フェイトは！フェイトは無事かい？！）」

戒『（俺の掌の中にいる……む？）』

ユーノ「（どうしたの？）」

戒『（空間内に転移反応だ！）空間座標固定４人をアースラへ！』
俺は転移反応にいち早く気付くとなのはとフェイトを魔力で球体状に包み込んでから遠くにいるユーノとアルフも同様に包み込んで一気にアースラへと転送した。

クロノ「戒！何かそちらに転移してくるぞ！」

戒『此方も確認した……アレはタイラントか？しかも三体とは……クロノ！エイミィに言って結界の出力を最大にしろ！急げ！』

クロノ「わっ、判った！」

戒『さて、取り敢えずは龍人化だな…。』

戒はそう言ってから龍の体を人の身へと変えた。その姿は成人の時の姿ではあるが髪は白に近い銀髪に体の至る所に分析の出来ない幾学の紋様が浮かんでおり背中には人間のサイズに合わせた龍の翼が生えていた

戒『イレギュラーは直ちに排除する！刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルグ）！！！！』

戒は即座に投影をすると全身が朱色の三体の西洋龍の内一体にゲイボルグを真名解放により心の臓を穿ち絶命させる…仲間を殺されたからか他の二体は咆哮を上げて虹色の魔力弾や雷を放つが戒は常時展開している障壁によりニ体の攻撃は無駄に終わる

戒『纏めて消し飛べ！！！！座標指定！空間固定！対象敵龍型の魔物ニ体！行くぞ！カイザーブレス！！！！』

戒は一旦距離を開けてから遠くにいるタイラント達の座標などを固定した後に自身の周りに半球体の魔法陣で体を覆い隠した次の瞬間、半球体の魔法陣が砕け散って中から飛び出したのは先程戒が変身した龍であった。戒は飛び出した勢いに任せて宇宙(そら)へと飛び出すと腕の近くから半透明の5対の翼のような物を出現させると口内に高魔力のエネルギーを溜め始める……そして

戒『《滅びの光を受けろ！！！！》』

その瞬間龍は上を仰ぐ様にして首をもたげた瞬間口内に溜めた魔力を開放し無数の光の槍と化しニ体のタイラントに降り注いだ。その様は天より降り注ぐ裁きの様であったすべての光の槍がタイラント達に降り注ぐ中その中心から解き放ったかの様にして膨大な光に伴って大爆発を起こした

戒『《敵生命体反応消失このままアースラへと帰還する……。》』

宇宙(そら)で漂う様にしてタイラント達の反応が消えたのを確認した戒は再び龍人化して足下に光を放つ転移陣を展開してその光と共にその場から消える

全力全壊！海上決戦なの……字が違わないか？（主人公談）（後書き）

御感想にアドバイス等があれば御願いします。

最終決戦　悲しき運命を破壊しろ！前篇（前書き）

今回の話は長くなる為に前後編の二部構成にしました。

最終決戦　悲しき運命を破壊しろ！前篇

―――アースラ　ブリッジ―――

戒『今戻った。』

なのは「戒君！」

ユーノ「戒！」

アルフ「戒！無事だったかい！」

フェイト「戒さん……」

俺がブリッジに戻ると丁度全員が揃っており主力メンバーから声を掛けられる

戒『全員無事か…フェイトのその手錠以外は』

クロノ「彼女は仮にも犯罪者なのだから拘束はやむを得ない」

戒『フェイトは抵抗をしないのだから手錠は要らない筈だ…。』

クロノ「組織としてそれは出来ないんだ。」

戒『組織としての…面子か。しかしフェイトへ危害を加えるのなら容赦はしないからな…。そこの所を覚えておけ。』

クロノ「わかってる。」

戒『なら良い…この場に全員がいると言う事は場所の特定が出来たと言う事か…。』

クロノ「そうだ。今武装局員が今回の事件の容疑者であるプレシア・テスタロッサの身柄の確保に向かっている。……なんだアレは？」

クロノの言葉に戒や他のメンバーはサーチャーから送られてくる時の庭園内の映像を見ていた。そして奥に進んだ局員のサーチャーに映るフェイトのオリジナルであるアリシアであった

戒『（出てしまったか……）』

フェイト「え……なに……あれ…」

プレシア「わたしのアリシアに触らないで！！！！」

俺達が見ている映像に映ったプレシアがアリシアの近くにいた武装局員達に対して魔法を使って凪ぎ払っていた。病魔に蝕まれた体で無理をしてるな…。

フェイト「アリ…シア？」

プレシアの言葉にフェイトは目を見開いて口を僅かにそして信じられないモノを見るかの様にしていた

プレシア「聞いていて？フェイト……」

フェイト「っ！？」

プレシア「貴女はこの子…私の娘…アリシアの代用品に用意した人形よ。」

戒『（敢えて荊の道を進むかプレシア・テスタロッサ……）プレシアが行き着いた使い魔を超える人造生命体の実験の更に上を行く死者蘇生の秘術…奇跡の域の業……アルハザードの技術を模範した当時の研究の開発コードネームはプロジェクト〔F．A．T．E〕……それにあやかってつけられた名がフェイトと言う訳か……』

プレシア「その声は黒逸かしら？」

戒『貴様の答えを聞こうか……』

プレシア「決まっているわ。……アリシアはあなたと違い……私に優しかったわ……フェイトあなたは駄目ね……折角あげたアリシアの記憶でも駄目だった……」

フェイト「いや……止めて！！！！」

プレシア「アリシアが生き返るまでの間、私が慰みに使うだけのお人形……フェイト、良い事を教えてあげるわ…。」

フェイト「いや……聞きたくない！！！！」

プレシア「私はあなたが……大嫌いなのよ。」

フェイト「っ！？」

プレシア「……だから黒逸と共に生きなさい」

フェイト「えっ？」

プレシア「あなたは確かにアリシアの代わりにと私はフェイトを造り…生み出したわ…けどやはり駄目ね……フェイトはフェイト…アリシアはアリシア…誰かの代わりになどなりはしないのよね……」

戒『当たり前の事だ……しかし……』

プレシア「えぇ、既に遅すぎたわ……だから…私は私なりにケジメをつけるわ……フェイト、あなたはあなたの幸せを……「幸せか……下らないな！」ロキ！？」

ロキ「その様な感情は不要な筈だぞ…プレシア？やはり貴様も他の下等な人間共と同類であったか……」

突如プレシアの横から転移してきた男は魔法とは違う何かでプレシアを拘束し地に伏させ見下した様な言葉を吐く

戒『テメェは！！』

ロキ「ふん！忌々しい時の神子が！やはりこの世界でも貴様は俺の前に立ち塞がり邪魔立てをするか！」

戒『テメェみたいな輩が世界の秩序を乱すからな…。』

ロキ「だが前の様にはやらせんぞ！この世界にはあの女神はいないのだからな！」

戒『レナスが…プラチナが居なくとも貴様は…俺が止める！』

ロキ「なら…止めてみせろ！」

エイミィ「艦長！庭園内に魔力反応多数出現！どの魔力反応も全てがAランクかそれ以上の物ばかりで尚もその数を増大させています！！！！それとジュエルシードの魔力反応増大！」

局員1「次元震発生！中規模！！！！」

リンディ「振動防御！ディストーション・シールドを展開！」

局員2「ジュエルシード十個発動！！！次元震尚も拡大！！！！」

リンディ「転送可能領域を維持したまま被害の少ない空域まで退避！」

局員3「了解！！！」

局員1「次元震！更に規模を拡大！！このままでは〔次元断層〕が！？」

リンディの指示に艦内が慌ただしく動く中戒は未だ映像に映るロキを…そしてロキも同じように戒を画面越しに睨んでいた。

ロキ「あの時よりも強化された魔物に庭園内に配置された魔導兵士だ…突破出来るのならば突破してみせろ！」

ロキがそう叫びサーチャーが破壊され映像はそこで途切れる

戒『やってやるさ！行くぞ！フェイト、プレシアをお前の母さんを止めに行くぞ！』

フェイト「はい！」

戒『なのは達も準備は良いか？』

なのは「何時でも行けるよ！」

ユーノ「僕もだよ！」

アルフ「フェイトが行くならあたしも行くよ！」

戒『クロノはどうする？』

クロノ「執務官として行かない訳にはいかない……それにプレシアの後に出てきた奴が黒幕の様だからな…逮捕して管理局の法で裁く。」

戒『リンディ！』

リンディ「わかってるわ…。現時点を持ってプレシアの捕縛からロキと呼ばれた男が黒幕と思われる。あなた達はプレシアの救出とロキの捕縛…そしてジュエルシードの奪取を行って下さい！」

全「「了解！！！！」」

全員が転送ポートに乗って転移の光と共に庭園へと移動した

―――時の庭園内　入り口付近―――

戒『クロノ、作戦は？』

クロノ「君の言う魔物がいる様だから指揮は君に任せるよ。」

戒『了解…先ずは二手に別れて魔導炉を止める班とプレシアとロキのいる最下層のエリアに向かう班に分ける…魔導炉に向かう班はなのはとユーノ…そして最下層に行く班はフェイトとアルフにクロノだ。魔導炉の方には魔物の気配はしない事から2人でも充分だが最下層の方には魔導兵士に魔物の反応がかなり集中している事から此方のメンバーを厚くする。最下層には確実にプレシアがいると思われるがそれと同時にロキもいると想定できる…が、もし遭遇したのならば奴とは極力戦闘は避けろ。』

クロノ「何故だ？ロキの魔力反応はBクラス程の筈だぞ？」

戒『奴の事は俺の方が詳しく知っているから忠告しているんだ…。下手したら怪我だけでは済まない事になる。』

クロノ「……わかった。戒の作戦で行こう。しかし戒はどの班にもカウントされていないがどう言う事だ？」

戒『庭園内の中層辺りにＳＳオーバーの魔力反応が２つ存在している……俺はそれの排除をしてから合流する…。』

フェイト「戒さん、気を付けて…」

アルフ「さっさと来るんだよ？」

戒『当たり前だ…。さっさと片付けて追い付くさ。』

クロノ「健闘を祈る。」

戒『もう一度確認しておくぞ？俺は取り敢えず道を作るがなのはとユーノは最上階に位置する魔導炉の封印による無力化…または破壊だ。フェイトとアルフ、そしてクロノは最下層まで一気に駆け抜けてプレシアの安全確保を最優先事項とする……良いな！』

戒以外「了解（だよ）（した）！」

そして目の前の扉をぶち抜くとミイラの様な魔物に斧や西洋剣にメイスを持った魔導兵士がフロアを埋め尽くす様にして犇めいていた

戒『うじゃうじゃと数だけは多いのだな…。』

クロノ「僕も手伝う！」

戒『クロノは勿論なのは達も手出しせずに魔力を最後まで温存して置くんだ。道は…俺が切り拓く！』

クロノを制し戒は一歩前に出ると体内に存在する魔力を練り上げて詠唱を始める

戒『〔契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。〕』

戒の詠唱に合わせて魔導兵士と魔物を中心とした者達が次第に凍りついて行く

戒『〔全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。〕』

フェイト「！！！！……凄い」

戒の詠唱が終わる頃には目の前に埋め尽くす様にして犇めいていた全ての魔物達のその身は氷像と化していた

戒『砕け散れ……〔終わる世界〕』

戒のその一言により氷像と化した魔物達や魔導兵士達は一斉に砕け散って細かな氷の粒子となった

クロノ「やはり君を敵に回したくはないと実感させられるな…ｕ」

戒『なら精々上の連中に俺の事は黙っていた方が良いだろうな…。道を拓いた！作戦通りになのは組は魔導炉を！フェイト組はプレシアの救出だ！行くぞ！この事件を…解決させるぞ！絶対にＢＡＤＥＮＤにさせてたまるか！』

戒の言葉になのは達は最上階を目指し、フェイト達はプレシアを助けだす為に最下層を目指す…そして戒は最下層に行く途中にある高魔力反応が存在する中層に行く為にフェイト達に同行する。

アルフ「あの子達は大丈夫なのかい？」

戒『心配せずともアイツ等なら……なのは達なら失敗をする筈も無いだろう……まさか信用していないのか？』

アルフ「ちっ！違うよ？ただあの子達が心配なだけだよ。」

戒『アルフは優しいんだな…。』

アルフ「んなっ！何を言ってるんだい／／／／／／／／／／／／」

戒『……やはりか。』

中層部の入り口を少し過ぎた所に先程の高魔力反応の持ち主が威風堂々として待ち構えていた。全身が濃い碧色の巨大な体躯の西洋龍

…魔龍ブラッドペインに蒼色の毛に各所に軽装の鎧や兜を装備した巨大な体躯の狼……雷神トールを飲み込んだとされる魔狼フェンリルの2体が周囲に殺気を所構わないと言った風にまき散らしていた。2体の魔物達は……フェンリルとブラッドペインは2体共に全長は軽く10メートルを超えるデカさを持っていた

フェイト「あ…あぁ……」

クロノ「くっ!?」

アルフ「なっ、何なんだいアイツ等は!?」

そんな殺気に当てられたのか…未だ幼いフェイトにはキツい様子で顔色が恐怖で青ざめてしまい足が竦んでしまう。クロノは執務官としてのプライドで踏ん張ってはいた……が、2体の神話級の怪物が放っている異常なまでの殺気に当てられて虚勢を張る事すら出来なかった。そしてアルフはその異様なまでの風貌にただ狼狽えるしかなかった。

ブラッド「来たか!矮小で脆い人間共!そして久しいな!憎き神子よ!」

戒『貴様もな…魔龍ブラッドペイン!そして魔狼フェンリル!貴様等もロキと同様、あの世界で死んだ……』

ブラッド「確かに我等はあの世界で貴様を含めた戦乙女達に敗れは

したがこの世界で再び生を受けたのだ！その全ては憎き神子……貴様を葬り去る為に他ならない！さぁ！今！再び殺し合おうぞ！！！！」

フェンリル「ウオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！」

ブラッドペインの宣戦に呼応するかの様にしてフェンリルは天を仰ぐとその巨躯から発せられるハウリングボイスに庭園全体が揺れる様に錯覚させるには充分であった

戒『ちぃっ！クロノ！フェイト達を連れて最下層にむかえ！』

フェイト「で…でも！」

戒『母親を…プレシアを助けだすのがフェイト…お前達の役目だろうが！！！！くっ！奴等は俺が標的だ！今の内に早く行けぇ！！！！』

アルフ「フェイト！行くよ！アタシ等がいた所で戒の邪魔にしかならないよ…。」

フェイト「アルフ……わかった。戒さん…下で待ってます！」

戒『あぁ、わかった。……行け！！！！！』

戒の言葉に中層の大ホールの様な広間をフェイト達は戒を残して階下へと続く階段を駆け抜けて行った……

戒『……やけに素直に通す物だな…。』

ブラッド「我等の目的は貴様の抹殺が最優先だからな…雑魚などを通した所で差したる問題は無い……さぁ！今生の別れの時間をくれてやったのだから大人しく……その命に終止符を打たせて貰うぞ！！！！」

戒『やれる物ならばやってみろ！！！！！』

戒とブラッドペイン達との激突が始まる少し前……

―――最上階　魔導炉付近―――

なのは「ハァ…ハァ…ユーノ…君、魔導炉まで…後…どの位なの…？」

ユーノ「もう少しだ。だからもう少し頑張って、なのは。」

なのは「う…うん」

戒達と別れて最上階にある魔導炉を目指して階段を飛行魔法によりショートカットして行くがその先を塞ぐかの様にして配置された迎撃用の魔導兵士達を相手に善戦をしていたが、如何せん訓練も何もしていない少女には長期戦闘は厳しく、魔導炉まで後少しと言った所で肩で息をしてしまっていた…そして魔力が動力源の魔導兵士達には元々そんな概念はなかく魔導兵士達は魔力値が高いなのはに狙いを定めて襲いかかった

ユーノ「なのは！危ない！」
なのは「Σっ！？（助けて……戒君！）」
ユーノがそれに気付きなのはに声を上げて注意したが既に遅く魔導兵士の凶刃がなのはに振り下ろされる……しかし

？？？「クロスマッシャー！！！！！」
なのは「……えっ？」
ユーノ「君はあの時の！？」
？？？「無事の様ですね…。」
なのは「カシムさん！どうして此処に？」

アル「マスターからの指示ですね…。それと私はカシムではなくアルと言います。以後お見知り置きを…。」
ユーノ「だけど、アル…君の姿は彼に非常に酷似し過ぎだ。訳を教えてくれないか？」

アル「その話は後にしましょう。先ず優先すべきは魔導炉の停止の筈ですよ？道は私が開きますからなのはさんとユーノさんは私の後からついて来て下さい。〔アカシックバスター〕！！！！」

なのはに振り下ろされた斧と魔導兵士を紫色の砲撃がなのはを守った。そしてその守ってくれたのは鳴海市でなのはが魔導士としてユーノとは別に最初に会ったカシムことアルであった。そしてユーノがアルに対し疑問をぶつけるがアルは後にと言うと自身の真下に蒼色の魔力光の六芒星をかたどった様な魔法陣を展開し魔力で出来た火の鳥の様なモノを召喚した。そして、それをそのまま魔導炉の道を塞ぐ魔導兵士達に向けて放つ。魔導炉に続く道にいた魔導兵士達は跡形もなく消し飛んだ。そして、魔力で出来た火の鳥の威力が高かったのかその勢いは止まらず魔導炉へ続く扉すら貫通してしまっていた

――時の庭園　心臓部　魔導炉――――

なのは「これが……」

アル「時の庭園の心臓部にして超古代遺失物…ロストロギア…しかしその詳細は不明……」

ユーノ「なのは早く封印をして皆と合流しよう。」

なのは「うん！」

――――時の庭園　中層――――

なのは達の場所から変わり時の庭園内の半ば辺りでは巨大な魔物2

体を相手に未だ戒は奮戦をしていた

戒『くっ！やはり簡単には殺らせてくれないか……』

ブラッド「我には二度の敗北は許されないのだ！喰らえ〔イグニートジャベリン〕！！！！！」

フェンリル「ウオォォォォォォォォオ〔アイスフォール〕！！！！！」

戒『ちっ！〔雷の斧〕！！！！！オラァァ！！』

虚空より飛来する無数の槍と地面から突出する無数の氷槍…上と下から襲い来る魔術に対し戒は舌打ちをし、無詠唱の古代呪文魔法〔雷の斧〕を使い下方から迫るアイスフォールを凪払い上方から飛来するジャベリンを魔力を纏った拳で打ち砕く

戒『獣縛りし神の鎖〔グレイプニル〕！！！！！』

戒は虚空より宝物庫から引き出した物は獣に対しして絶大な拘束力を秘める神の鎖…嘗てフェンリルを繋ぎ止めていた物の原典だが戒の能力により真名解放を可能としている。そしてその鎖によりフェンリルは四肢を…そしてブレスをはく口も一緒に封じられ身動きが取れなくなった。フェンリルは実質的な意味でその力を無力化された。

ブラッド「忌々しい神々の宝具を使うか！」

戒『貴様等に割く時間は無いのでな！これで決めさせて貰う！滅竜

の剣〔アスカロン〕！！！！！』

ブラッド「グゥッ！貴様ぁっ！」

戒『これでトドメだ！オーバードライブ！エース・オブ・アサルトォォォォ！！！！！』

アスカロンを逆手に持ち変え、ブラッドペインへの懐へと一足で踏み込みながら胴への一閃し走り抜け向きを変えてターンをし更に一閃また向きを変えて一閃をブラッドペインの周囲で駆けて繰り返す事数十回

ブラッド「グオォォォォォォォォォォ！！！！！」

戒『ちっ！』

戒は最後の一太刀を浴びせようとブラッドペインに肉薄するが苦し紛れか生物の本能か…ブラッドペインはその巨躯から繰り出した豪腕を地に振り下ろす。しかし戒はそれをいち早く察知して避けるがブラッドペインの拳が打ち据えられた地面は蜘蛛の巣状にひび割れが起きた

戒『しぶとい…「戒君！」…なっ！？なのはにユーノ！アルはなのはと一緒だったか。』

アル「魔導炉の場所で合流してなのはさんの砲撃で最下層を目指していた所です。」

ブラッド「グゥゥゥゥゥ！時の御子！貴様は…貴様だけは我が滅ぼしてくれるわ！！！！〔闇の深淵にて重苦に蠢く雷よ、彼の者に驟

雨の如く打ち付けよ」グラヴィティブレス！！！！」

戒『不味い！熾天覆う七つの円環〔ロー・アイアス〕！！！！』

ブラッドペインは咆哮に似た叫びと同時に大魔法の一つグラヴィティブレスを発動させる。暗紫電色の球体状のグラヴィティヴレスは戒達の頭上に現れるとゆっくりとだが確実にその距離を狭めていた。戒唯一人ならば問題は無かったが常人であるなのはやユーノが居る為に焦りを感じたがそれでも冷静に状況を把握しトロイア戦争の折に使われ、その堅固さは古城の城壁に匹敵する程で対投擲防御としては無類の強さを発揮させるのであるその形状は七枚の花弁からなる…そして七枚の花弁の一枚に附きその城壁十基に相当するアイアスを右手に出現させなのは達を護る

戒『ヌオオオオオオ！！！！！！』

なユ「戒（君）！？」

アル「マスター！？」

戒『なのは達をフェイト達の所へ……頼むぞ！！！！』

戒はブレスをアイアスを顕現させた右手を翳した状態で今の状況下で動けるアルに指示を出す。

なのは「戒君だけだなんて駄目だよ！？危険過ぎるよ！？」

アル「しかし、今の私達がいた所でマスターの足枷にしかなりません。理解してください…なのはさん。」

なのは「戒君…絶対…絶対に追いついて来てよね！！」

戒『当たり前だ！！！！全員でプレシアを助け出してこの胸糞悪い事件を終わらせる！！だから……往け！！！！』

戒の言葉になのは達はフェイト達と同様にプレシアとロキの居る最下層へと続く道を下りて行った

ブラッド「ふん！やはり矮小な人間か……信用された所で結局最後になれば己が身大事さにより裏切られる……それに何故に貴様はまだ解らんのか！」

戒『それは人間（ヒト）であるならば仕方ない事だ……それが解らないのならばこの世界から消えろ！！！！！』

戒はブラッドのヒトを見限った様な言葉に相容れない事だと再認識させられた。戒は叫びと共に体の中に存在する最高の龍を呼ぶ。その瞬間(とき)大ホールの空間を埋め尽くさんばかりの閃光が迸った

最終決戦　悲しき運命を破壊しろ！前篇（後書き）

作者「此方では久しぶりの後書きの出番がやって来たな♪」

戒『無印編も後僅かになったな…。』

作者「取り敢えず無印が終了したらA，S編の前に番外編を多少挿んでから進みたいなと考えているんだ…。無印は後エピローグを合わせ各ヒロイン達との絡み等を含めると１０話位に成るのかな？」

戒『さっさとしてくれ…。この後に出演する予定の俺の義妹が催促してくるのだからな……。』

？？？「ねえ義兄ちゃん、わたしは何時出番が来るの？」

戒『作者とＯＨＡＮＡＳＩすれば早くなるかもな……。』

作者「不吉な単語を言わないでくれ（｜＿｜；）」

戒『なら急いで完成させるのだな…。次回！最終決戦　悲しき運命を破壊しろ！楽しみにしていてくれ！』

最終決戦……悲しき運命を破壊しろ！後編

―――時の庭園　最下層―――

「くそっ！数が多い！どこからこれだけの数の魔導兵士を集めたんだ！」

「母さんの研究やこの施設内に侵入した人達を無事に帰さない為にって前に母さんが言ってた。」

「あの時はまさかアタシ達がその侵入者になるとは思わなかった……ね！」

場面は変わり最下層に向かっているクロノ達だがやはり戒の予想通りその道のりには小型や中型で構成され魔導兵士達が待ち構えており3人は各々で対処をしていた。

「それでもわたしは母さんを助ける！」

「アタシはまだアイツを許せないけど…フェイトが助けるならアタシはフェイトについて行くだけだよ！」

「無駄話は後にして今はこの場を切り抜ける事を優先すべきだ！」

クロノの言葉に2人は更に攻撃の手を緩める事なく魔導兵士達を無力化しながら下に向かっていた。……しかし

「「■■■

様切り返すかの様にして胴を殴るがあまり効果は見られず、フェイトは雷槍を複数出現させると竜戦士に向けて発射した

「■■■■■■■■■！！！！！」

「「なっ（嘘っ）！？」」

「デカくなるとかふざけすぎじゃないかい？！」

フェイトの魔法が命中した途端に竜戦士の一体が消し飛んだ瞬間、隣にいる竜戦士が巨大化したのを目の当たりにした3人は驚愕の声を上げるしかなかった。

「ぐぁっ！？」

「クロノ！？」

「大丈夫かい？！」

驚愕の声を上げ防御魔法を行使していたクロノの集中力が切れた所へ竜戦士は斧剣の様な物で障壁を叩き割りクロノをフェイト達の所まで吹き飛ばしそれを見たフェイトとアルフは悲鳴の様な声でクロノの安否を確認しながらクロノの下へと駆け寄る

「だ、大丈夫だ」

「何が大丈夫なんだい！頭から血を流してるじゃないか！」

「アルフ、クロノをお願い…わたしはアイツ等を倒すよ。」

「なっ、何言っているんだい！？あんなのを1人でなんて無茶だよ！？」

「たしかに…わたし1人じゃ無理かも知れない……だけどわたしはもう1人じゃないから……だよね？なのは」

フェイトの言葉にアルフが非難の声を上げるがフェイトはとても冷静にそして最後に階段の方から駆け下りてくるなのは達に向けて言った

「うん！私達2人ならどんな事でも切り抜ける事が出来るよ！」

「戒はどうしたんだい？」

「戒はまだ上で竜の様な奴とまだ戦っていたよ。僕達は彼の邪魔にならない様に先に君達の所へ急いで来たんだ。」

「執務官…貴方怪我をしていますね？」

「頭の出血だけだから大丈夫だ。」

「そうは言っても怪我は怪我ですので治療致します〔キュア・プラムス〕」

アルはそう言って全快復魔法のキュア・プラムスを発動しクロノの頭部の傷に体中にある擦り傷や切り傷をみるみるうちに治して行く

「これで大丈夫でしょう…。」

「君は治癒魔法が得意なのか？」

「いえ、得意とかそう言った事の前に私はマスターの補助に過ぎませんからマスターの技術のほんの一部のみしか行使出来ませんから。と言っても治癒魔法もそうですが射撃に砲撃等も使用可能ですから安心して下さい。」

「格好を見ても安心と言われても信用が出来ない……そもそも君は何者なんだ？」

「その話はまた今度にしましょう。今はこの事態を解決させるのが先決ではないのですか？」

「……確かにそうだが逃げないだろうな？」

「マスターが許可しない限り貴方達からは逃げ出したりしません。」

「そのマスターと言う人間も気になるが先ずは目の前のこの魔物を何とかしないとだな…。」

「一体だけ憑依状態になってはいますが相手はドラゴントゥースですか？単体ではそこまで脅威では無いのですが複数出現した場合には纏めて倒さないと厄介極まりない相手ですね…。」

「どう厄介なんだ？」

アルの説明にクロノは怪訝な表情をしつつも疑問を口にする

「先ずはアレの総合的な能力はＡＡ＋に相当しますが複数出現し一方のみを倒した場合はアレの特性である憑依をもう一方にしてそれ

をされたら場合にはその能力は倍のニアＳになります。」

「ニアＳクラスだって！？」

「とは言っても一度憑依されたモノはそれ以上は強化されないので先ずはニアＳクラスの方ではなくＡＡ＋の３体を潰して最後にニアＳのドラゴントゥースを撃破ですね…。弱い方は憑依前のヤツを…憑依後のヤツはワタシが受け持ちますのでお願いします。」

「解った。なのは、フェイト！僕達は魔力反応の弱い方をヤるが一撃で纏めて撃破しないと先程の様に強化される！全員で最大威力の砲撃で潰すぞ！」

「「了解！」」

アルは憑依後のドラゴントゥースをなのは達３人は残りの憑依前のドラゴントゥース３体を相手にするのであった。

「なんだ！？」

「はっ？」

「「えっ？」」

「嘘でしょ？」

「マスターｕ」

しかしそんなメンバーを余所に上方から長大な槍が降ってきて憑依

後のドラゴントゥースに憑依前の3体を纏めて消し飛ばして更に下へと突き進んで行った。それを見た面々は様々な反応をしアルはそんな出鱈目な主人に呆れを零した

――――時の庭園内　中層　大ホール――――

「なんだ貴様のその姿は！」

『この姿は龍王の系譜……あの世界では制限されて使えなかった能力だが…この姿の状態で本気を出せば世界一つ……銀河を滅ぼす事も可能だ。』

場所は再び戒とブラッドペインの場面に変わり、光に包まれていた戒はガイザーに変身した時の様な姿を……龍人形態に変化していた。

「その様な脅しに我が屈するとでも思うものか！！！！」

『脅しとかそういうものじゃない…貴様は確実に強いから多少本気で行かなければ次元断層を止める時間が無くなるからな…。さっさと終わらせて貰う！！！！！』

「我を倒せるものなら倒してみよ！燃え尽きよ！！！！」

『……無駄だ』

戒の啖呵に逆上したブラッドペインは激昂の声と共に口から灼熱のブレスを辺りに撒き散らすが戒の腕の一振りによりその業火は霧散した

「なにっ！？」

『喰らえ！〔龍王双破斬〕！！！！』

ブラッドペインが驚愕の声を上げている隙に戒は走るだけで懐に潜り込み両の手に龍氣（ドラゴンオーラ）と魔力を合成した刃をクロスさせる様にしてブラッドペインの体を斬り付ける

「グァァァ？！小癪な！砕けよ！！！！」

『貴様に反撃の余地は……ない！刹那に沈め……〔龍王連牙〕！！！！』

「なっ！？」

ブラッドペインが反撃しようと腕を振り下ろそうとするが戒は容赦なく高速歩方である瞬動を連続的に使用しながら龍氣と魔力を纏わせた何百発もの拳打の嵐を体中に見舞い最後の一撃とばかりに氣と魔力を篭めた拳を体の急所の一つである水月……鳩尾に叩き込む

『トドメだ！女神の技で貴様を浄化する……神技！』

戒はその台詞と共に虚空より両刃の剣を出すと一気にブラッドペインへと肉薄し、剣術の基本である袈裟斬り、逆袈裟、唐竹等を用い何度も斬り付け打ち上げて3本の巨大な槍を持ってして空中に磔に

した

「貴様が何故その技を使える！？それは神に仕えていなければ使えないのだぞ！？」

『貴様に答える義務は…ない。サヨナラ…〔ニーベルン・ヴァレスティ〕！！！！！』

ブラッドペインが驚愕の声と共に戒へ問うが戒はそれを無視すると光の羽で空へ飛び上がり滞空して背中から光の粒子を放出して左手に放出した光を収束させると自身の何倍もある光で出来た長大な槍が姿を顕し戒は別れの言葉と共にソレを体の全てを使い全力で投擲する。そしてブラッドペインの体を貫いた瞬間に周りには槍を構成させた光の粒子が漂い次第にその光はブラッドペインへと収束しだしたそして……

『フェンリル…貴様は異次元に隔離し後に使い魔の契約を行使してやるから待っていろ。ブラッドペインよコレで終わりだ！！！！』

グレイプニルで身動きが出来ないフェンリルを異空間へと閉じ込め、戒の言葉により収束した光の粒子は上の階を吹き飛ばす程の威力を持ってブラッドペインを消し去った

―――アースラ　ブリッジ―――

「庭園上層部が異常高魔力により消滅！？」

「多分、彼ね…ほとほと敵にはしたくないわね…。」

「と言うか今ので大半のサーチャーが消し飛んだ事には突っ込まないんですねｕ」

「そんな事よりも連続的に高魔力があの庭園内で使用されているから崩壊の危険性が高くなって来ているわ。エイミィはクロノ達に急ぐ様に連絡をして下さい。各員は引き続き庭園及びその内部の状況解析を進めて下さい！」

「「「了解！！！！」」」

――――最下層――――

「君は加減と言う物を知らないのか！？」

『だから済まないと謝っているだろう？そもそも奴等を相手に庭園を崩壊させない様にして戦う事自体難しかったのだぞ？』

「クロノ君、其処までにしようよ？戒君は故意にやった訳じゃないし結局の所は助けて貰ったんだし…ね？」

「確かにそう…だが……」

『何を相手にしていたんだ？』

「マスターの槍が通過するまで皆さんは五体のドラゴントゥースを相手にしていたのですよ？」

『また面倒臭いのが出場って来たなぅそうだ…アル、人型を破棄して一度待機状態に戻ってくれ。念には念を入れて置かないとならない……もしかしたらグランゾンを使わないとならない状況になるかもだからな…。』

「了解しましたマスター。」

クロノの非難の言葉をなのはが諌め戒が疑問に思って言った事にアルが説明をすると戒は一瞬顔を歪めた後に明らかに面倒臭いと言う表情をする。そしてその後にアルに待機状態になって貰い左の腕に装備された。

「それにしてもソレは君のデバイスだったのか？」

『まぁ…な。それよりも早く行かないとだろ？俺はロキをクロノ達はフェイトの母親の救出だろ？』

「言われるまでもない！」

『それじゃ、全員コレで最後だ、気を引き締めろよ！』

「「「応（了解）（わかったよ）！！」」」

戒の言葉に各々の返事をし最下層へと一気に駆け下りて行く。その

際にまだいた魔導兵士は戒の無詠唱の魔法の射手により出会った瞬間には鉄屑に変えられそれを見ていたメンバーは渇いた笑いしか出なかったのは全くの余談である。

―――最下層　広間―――

「随分と遅かったじゃないか？道中に何かトラブルにでもあったか？」

『はっ！面倒臭い奴等を配置して置いて何を言ってやがんだ。』

「そして僕達はソレ等全てを退いて此処に誰一人欠ける事なく来た訳だ…。」

「アタシ等はあんな奴等にゃ負けないよ！」

「母さんを解放して！」

「プレシアさんは何処にいるの！」

「……ふふふ、貴様等のその希望に答えてやる！」

ロキのその言葉と共に隣に転移陣が現れ其処にいたのは……

「か…あさん？」

「どういう事だ！プレシアに何をしたんだ！」

『……ジュエルシードをプレシアに埋め込んで貴様の術で魔物…ラミアに変異させたのか……。』

「フハハハハッ！！！！そうだ！貴様等の目的の一つであるプレシアの救出と言うのを潰してやったのだ！この状態になってしまった者は殺さなければ救う事が出来ないのだからな！！！神子よ、貴様は知っているな？グールパウダーを…俺はそれの変わりになる物としてＪＳをこの女に埋め込み魔物へと変えたのだ！」

プレシアの変わり果てた姿にフェイト達は絶望しロキはその姿に満足げにそして自慢するかの様に話す

「フェイト、ごめんなさい。あなたに辛く当たって…。私は母親失格ね……」

「そんな事ない！私の母さんは母さんだけだから母親失格なんて言わないで！」

「フェイト……」

「ふん！まだ意識をラミアに持って行かれていないか…なら魔物としての意識を強めて魔物として我が子を殺すがいい！！！！」

「くぁっ！フェ、イトごめんなさい……■■■■■■■！！！！」

「母さん！？」

「くっ！プレシアはどうしたんだ！僕達に攻撃をしてくるなんて？！」

『プレシアの意識は魔物の意識に呑まれたか……（投影開始）トレース・オン！』

「戒？！何をする気だ！」

『……（ジュエルシードも奴の使った術も魔術や魔法といった生成物ならば…！）破っ！』

「■■■■■■■■！！！！！」

ロキの魔力にプレシアに埋め込まれたＪＳが呼応しプレシアの意識を奪い目の中から理性の色が消え、魔物が持つ殺意に満ちた色に変わってしまいその長い尻尾による攻撃をフェイトへと振るい驚愕するフェイトを後目にクロノは前に立って障壁で間一髪防ぐ。そして戒は投影魔術により出した歪な形をしたナイフの様な物を逆手に持つと完全に魔物と化したプレシアへと駆ける。魔物と化したプレシアは武器を持った戒を威嚇するかの様に咆哮を上げる

「母さん、ごめんなさい！」

〈フォトンランサー〉

「くそっ！Ｓ２Ｕ！」

〈スティンガー〉

「このっ！止まりなよ！」

「チェーンバインド！」

「レイジングハート！」

〈ディバインシューター〉

「シュート！」

戒が何かするとメンバーは直ぐに勘付くと目の前で暴れるプレシアにフェイトは雷の射撃魔法を…クロノは直射魔法と各々は自身の得意な魔法を用いて戒が近付き易い様に行動を制限する

「何をする積もりか解らんが其方ばかりに気を取られては駄目だろ？〔プリズミックミサイル〕！！！」

『ちっ！〔契約の下、我に従いし時の護り手よ、我が呼び掛けに応え出よ。〕ゼクンドゥス！！』

「まったく世話の掛かる主だな…。〔ゼクンドゥスレーザー〕！！！」

ロキの七色の追跡型の魔法を戒はゼクンドゥスを召喚するとゼクンドゥスは両の手より純粋な魔力のみの奔流を放ちロキの魔法を呑み込む

『ゼクンドゥス！ロキの足止めを頼む！』
「承知した…。」
「高位精霊如きで神である俺に勝てるとでも思ってるのか！！！！」
「確かに我が身は高位精霊なれど主によりその霊格は我を含めた全ての精霊達に共通し神位精霊となっているのだ。」
「神位精霊だと！？そんな位がある訳がない！俺はそんな物を聞いた事など無い！」
「それは当たり前だな…。この神位精霊と言うのは我等に値する位が見つからないと主が名付けた物だからな。さて、話は此処までにして我は主の命を実行する…逆神ロキ、貴様の足止めをさせて貰う！！！！！」
「嘗めるな！！！！！」
時の神位精霊と逆神の戦闘が始まる中ラミアと化したプレシアを相手にしている戒達は……
戒『ちぃっ！（懐に飛び込んでからでないとコイツの真価を発揮出来ないと言うのに中々近づく事が出来ないとは……）なのはとフェイトは牽制に直射型を！クロノとユーノにアルフはバインドを！時間は俺が稼ぐから直ぐに準備をしろ！』

「「了解(だよ)！」」

「■■■■■■■■！！！〔エアスラスト〕」

『くっ！風の魔法か…だが！！』

「2人共合わせろ！」

「わかった！」

「プレシア…大人しく捕まりな！」

戒が風の魔法を右手で掻き消す瞬間、クロノとユーノ、そしてアルフの3人はチェーンバインドを使いプレシアの身体を絡め取りその動きを封じる

「フェイトちゃん、行くよ！」

〈ディバインバスター〉

「うん！」

〈プラズマスマッシャー〉

「「せーの……行っけーーーーー！！！！！」」

なのはとフェイトは身動きが取れないプレシアに向けて砲撃魔法を

撃つ……そして

『（今だ！）〔破戒する全ての符〕ルールブレイカー！！！！』

「■■■■■■――あ、ああ……アアアア

「良かった。」

『アリシアの入った培養ポッドの転移開始……場所は多次元航行鑑アースラの医務室』

プレシアの無事を確認するフェイトに戒はこれ以上フェイトに負担を掛けない為に敢えて嘘をつき、近くに浮かんでいたアリシアの入った培養ポッドをアースラへと転移させる。そして…

『リンディ、今すぐに全員の退路の確保を頼む。』

「……どういう事かしら？」

『済まないが時間が惜しいから説明はナシだ…。フェイトはアルフと一緒にプレシアを頼む。』

「うん。」

「アンタはどうするんだい？」

『俺はあの屑を始末する……』

「なっ！殺すのは『誰が殺すと言った』……じゃあどうするんだ？」

『秘密だが、奴の魔力や能力を全て殺し、奴には死ぬ事など生温い

と感じる程の地獄を味わせてやる（黒笑）』

「わっ、わかった。僕らは手出しはしないからその黒い物を抑えてくれ！なのは達が怯えているだろ！」

『済まんな…。奴のやった事に我慢が出来ない物だったからな…。それじゃ、行ってくる。フェイト、向こうに戻ったらアリシアとちゃんと話せると良いな？』

「えっ！？」

「待てっ！どう言う事だ！」

『それは俺が戻ったら説明してやるよ。フェイト、プレシアが起きたらコイツを飲ませてくれ…。』

戒がフェイトへ渡した物はフラスコの様なガラスの容器で中には赤い色をした液体が並々と入っていた。

「コレは？」

『コレはエリクサーと言い、俗に言う霊薬と言われる物で飲めば万病に効き不治の病ですら治し尚且つ体力や魔力と言った物をソレ一つで全快させる物だ。』

「良いの？」

『俺は幾つも作る事が出来るから問題ない。クロノ、全員を連れて避難しろ。多少本気を出すからここの一帯が吹き飛ばないとも限らないからな…。』

「わかった。絶対に帰って来いよ？」

『了解した。「ぐぁぁぁぁっ！？」……ゼクンドゥス！』

「精霊如きがこの俺に手間を掛けさせるとはな…。やはり貴様は此処で魂のひとかけらも残さずに殺してやる！」

クロノ達に避難する様に話す戒の直ぐ後ろには壁に吹き飛ばされたゼクンドゥスとそのゼクンドゥスに今の今まで時間を潰された事に激昂したロキがいた。

『クロノ！直ぐに避難しろ！』

「貴様等全員逃がすとでも思うな！！！！〔我は命ず、汝悠久の時、妖教の惨禍を混濁たる瞳で見続けよ〕」

『拙い！？アースラへの強制転送！場所はアースラのブリッジ前に！！！！』

「「戒（君）！？」」

「既に遅いペトロ「させぬ！！！！」ちぃっ！また邪魔をするか、貴様は！」

『ゼクンドゥス、済まない。』

「主の御友人を助けるのも主を守護する我等、神位精霊の役目。」

『よし！エイミィ！出口は此方で用意する…なのは達をアースラへ転送しろ！』

「了解！！」

戒の言葉にエイミィは直ぐに反応をして戒の開いた転移陣でなのは達を直ぐ様アースラへと回収する。

『ゼクンドゥス、有り難う。後は…俺がやるから戻ってくれ。』

「了解した。」

「久し振りに貴様に辛酸を舐めさせられたな…。今度は俺が貴様に辛酸を味あわせてくれる！」

『此処からはあの世界では制限していた俺の力の一端を見せてやる

……。龍皇の系譜…〔龍化〕トランス！！！！！』

ロキに対し戒は龍化して相対する

「その姿はあの時に変身していた姿か！」

『まだこの程度で驚いては困るな…。』

「なに！？」

『〔天の鎖よ〕エルキ・ドゥ！！！』

「なっ！この様な鎖で俺が動けぬだと！？貴様何をした！！」

『トドメの前に教えてやるコレは神を律する鎖……神性を帯びたモノに絶大な拘束力を発揮する対神用の宝具だ。そして貴様の力を奪うのはこの黄昏の書だ！コレの能力は〔腕輪〕と呼ばれる物で対象の能力を奪取、改竄する事が可能だ。』

「貴様っ！？俺に脆弱な人間に堕とす気か！？」

『そうだ！貴様の蔑む脆弱な人間になって悔いろ！ＤＤＶｅ（データドレイン），？……ギルガル・ギルディ・ギ・ルディアス』

「やめろぉーー！？」

『〔影の地統ぶる者、スカハサの、我が手に授けん、三十の棘もつ霊しき槍を〕貴様の力……貴様の望みは今！此処で墜る！喰らえ！〔雷の投擲〕いいいい！！！！！』

「おのれ！時の神子ぉぉっ！ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

戒のデータドレイン用に投げられた雷の投擲に貫かれた途端、ロキは憎しみの籠もる声を上げるがそれも断末魔の声により掻き消えた

『ロキの回収完了に伴い改竄も完了。リンディ、犯人を確保した。庭園の崩壊が限界まで来ているからロキの拘束をして直ちに其方に戻る。』

「わかったわ……エイミィ。」

戒は今回の真犯人であるロキの能力を奪い常人と同じ様に能力を改竄した後でリンディに連絡を入れ、エイミィは直ぐに艦長の言葉に反応し戒とその横で地に伏しているロキの真下に転移陣を発動させ、その場所からアースラへと転移した途端に時の庭園が完全に崩壊した。

最終決戦……悲しき運命を破壊しろ！後編（後書き）

御感想をお待ちしております。

事件解決と新たな家族

―――アースラ―――

「戒君！」

『他の人もいるのだからあまり叫ぶな…。驚くだろ？』

「それだけ君を心配しているのだから仕方ないだろ…。」

戒はアースラに戻ると医務室へと向かい、なのはとクロノに会った。なのはは戒が来た事に驚きの声を上げ戒に注意されるなのはだがクロノがそれを助ける

『プレシアとアリシアは？』

「其処のベッドで寝かせている。魔力体力共に低下していたがフェイトが君の渡した薬で取り敢えずは大丈夫だが病気ばかりはなんともならなかったからな…。アリシアは培養ポッドから出してプレシアの隣で寝かせている。」

『なら、２人をシュミレータールームに連れていく。プレシアの治療とアリシアの蘇生を行うからな…。』

「本当に蘇生が可能なのか？」

『俺は嘘は言わん……直ぐに行うぞ。』

そして、なのは、ユーノ、フェイト、アルフ、クロノ、エイミィ、リンディ、プレシアの8人とアリシアを運ぶ戒は医務室からシュミレータールームへと移動する。

「それで何をするんだ？」

『先ずはプレシアの治療をしないとだな…。せっかくアリシアがいても一緒にいれなければ意味がないからな…。』

「お願いするわ。」

『行くぞ……〔彼の者を蝕みし異常を祓いたまえ〕リカバー！』

「凄い…体が嘘の様に軽いわ！？」

『これで大丈夫だな…後はコレを飲んだらプレシアの治療は完了だ。』

プレシアが薄い蒼の光に包まれるとプレシアの体に巣くっていた病魔が消えるそれに驚くプレシアに戒は懐から何か薬の様な緑色の液体が入ったビンを取り出してプレシアに渡す

「これは何かしら？」

『若返りの薬だ……アリシアが目醒めてから自分の親が年老いていたら戸惑ってしまうだろ？それ一つで大体二十歳か二十歳前半位ま

でに若返る事が出来る……』

「凄いわね…。それじゃ、戴くわね…。」

『さて、アリシアを此処に寝かして……クロノとユーノは退室をしてくれるか？』

「僕達がいては駄目なのか？」

『アリシアの裸がみたいのか？』

「「クロノ（君）とユーノ（君）のスケベ」」

「「んなっ／／／／／／／／／！！出て行くからそんな目で（見るな）見ないで！？」」

戒の言葉にクロノとユーノは足早にシュミレータールームを出て行った

『さて…と、先ずはアリシアの肉体は最良の状態だが魂が入っていないだけなんだよな…。先ずは体内に魔力を補填する為に魔力の塊である〔マナリーフ〕をリンカーコアに埋め込み、蘇生に必要な〔世界樹の葉〕に後は魂の呼び水として俺の血を〔世界樹の葉〕に混ぜて……召喚獣〔不死鳥〕を喚び出して完全な蘇生を施す。』

「ロストロギア級の物が幾つも出てるけれどぅ」

『それは気にしない方が良い……先に言っておくが今から俺のする事で起きる事柄についての邪魔をするなよ？』

「わかったわ。」

「アリシアが戻ってくるのだから邪魔はしないわ。」

戒のアリシアの蘇生させる為の行程を聞き、リンディは軽く冷や汗を流すも戒は気にするなと言い、この場にいる者達に自分が今からやる事に対して邪魔立てをしない様に釘を刺す

『さて、先ずは胸の中心にあるリンカーコアに〔マナリーフ〕を……』

戒は手に持つ葉の形をした宝石の様な物をアリシアの胸の辺りにあてがうとその宝石は吸い込まれる様にしてアリシアの体に取り込まれる

『続いて、俺の血液と〔世界樹の葉〕を飲ませる……』

戒が次に取り出したのはなんの変哲も無い葉の様な物だったが何処か神聖さを醸し出している物でそれに戒は自身の指を少しだけ歯で噛み切るとそこから垂れる血を葉に少量加えてアリシアの口に運び含ませた

『ふぅ、最後の仕上げだ……〔契約に従い我に従え、死と新世を司

りし霊鳥よ。彼の者を死の淵より、呼び戻したまえ。」フェニックス！』

《クアァァァァァ！！！！〔新世の炎〕》

「アリシア！？」

『落ち着け！』

戒が最後にしたのは召喚獣による肉体と魂の結合を促す物であり、フェニックスを召喚してフェニックスの瞳より落ちた涙がアリシアに落ちた瞬間にアリシアの体が炎によって焼かれるという事にプレシアは悲鳴を上げ、駆け寄ろうとするが戒によりそれは制された。そして……

「う、うーん。」

「アリシア！」

「ママ？」

「アリシア、本当に良かったわ。」

「ママ、苦しいよ？」

「ご、ごめんなさい？」

『どうやら気が付いた様だな…。』

「お兄ちゃんは誰？」

『俺は「黒逸戒……アリシアのお兄さんよ？」そうアリシアのって何を言う！？』

「あら、貴方の血を分けて貰ったのだからあなたが兄でアリシアは妹と言っても不思議では無いでしょう？」

アリシアが目醒め、アリシアが俺の事を聞いてきたから自己紹介をしようとしたのだが途中でプレシアが割り込んで来て爆弾を落として俺の驚きのあまり抗議の声も涼しげな顔で話をするな！……と言うかアリシアは事故直後で今まで保存されていた筈だが蘇生が完了した瞬間にフェイトとあまり年齢が変わらない体格になって本当に双子の様に見えるな……

「あの……。」

「わたし……？」

「アリシア、紹介するわね？この子はフェイト……アリシアの妹よ？」

「わたしの……妹？」

「あ、あの……」

「よろしくね♪フェイト！」

「！……はい！此方こそ宜しく、アリシア姉さん。」

『これで本当の一件落着だな……俺の兄宣言以外は…ｕ』

「良いじゃない？可愛い妹よ？」

『そう言う問題じゃ……』

「それに、わたしやフェイトにアルフは事情聴取を受けて裁判とかなり時間が１、２週間か若しくは数年は掛かるかも知れないからアリシアの事をお願いしたいのよ。」

『ハァｕ解ったよ……（士郎さんや忍さんに言って近くの家を買い取るとするか……。）』

フェイトとアリシアの対面が無事終わって俺は複雑な心境で言葉を吐くがプレシアが本気なのかそうじゃないのかが良く解らない事に軽い頭痛を覚えながら海鳴に帰った後の事を思案していた。

そして戒達は事件後の数日は次元震の余波を観測する為にアースラに缶詰にされるが更にその数日後には海鳴へ帰る事が出来る事となり、戒はなのはとユーノ（フェレット）と更にアリシアを加えた３人と一匹で喫茶翠屋へと……なのはの実家である高町家へと帰るのであった。その時に士郎と桃子から２人にはＯＨＡＮＡＳＨＩをされたのは割愛する。

事件解決と新たな家族（後書き）

御意見や御感想を又はアドバイスがありましたらお願いします。

無印編最終回　名前を呼べば良いと思う

ジュエルシード事件…あれから数日の間に俺達は日常の生活に戻りつつあった。そして、そんなある日の朝の事

『何故俺は襟首を掴まれて引き回しの刑をされなければならんのだ？』

「今からフェイトちゃん達と会うの！」

『話になんの脈絡がないし、主語が抜け落ちていて理解がし辛い……。』

「今からフェイト達が裁判に行くんだけどその前に時間が少しだけ取れたから今から会いに行くんだよ？……なのはちゃんはそろそろお兄ちゃんを離してくれないかな？」

「戒君が走ってくれないからだよ！？」

『それはなのはが明確な理由も明かさずにいきなり海鳴公園へ行こう等と言うからだろうが……。』

いきなりこの様な場面では解り辛いと思うので画面の向こうの皆様に説明をすると空が白ばんできている時になのはとアリシアが俺の部屋に突貫して来て俺を拉致して直ぐに家を飛び出して今に至る訳

だ。

『だったら最初からそう説明をすれば良いだろうが…。ったく、なのはもアリシアも俺に掴まっていろよ！！！』

「にゃあああああああ！？」

「たかーーい♪」

戒はアリシアから朝早くから家を出た理由を聞くと青年状態に変身してなのはとアリシアを脇に抱えると一気に空へと跳躍し、ビルからビルへと飛び移りながら公園へと急ぐ……

―――海鳴公園―――

「で、来たのは良いが彼女達は大丈夫なのか？」

「「きゅ～～～」」

『少し無理があっただけだな…。』

「少し所じゃないだろ！？」

「帰りもやって欲しいな♪」

「もう無理だよ〜？」

クロノは会うと同時にクロノは戒の脇に抱えられていて目を回すなのはと戒の肩に必死に掴まり目を回すユーノを心配していた。なのは達を抱えた戒は事も無げに言うがユーノは直ぐ様復活して声を荒げ、アリシアの間の抜けた言葉になのはが悲鳴を上げていた

「僕達は向こうにいるから」

『漸くだな…。』

「あなたは向こうに行かなくて良いのかしら？」

『今は2人で話させてやりたいからな？俺は後で少し話せれば良いが、なのははずっとフェイトと話をしたいと言っていたのだからな……。』

俺が憩いの場の近くにある樹に寄りかかってから暫くするとアルフが泣き出していた……どうやらなのはとフェイトの会話をあの耳で聞いて感動したのだろうな……あぁ見えて涙もろい面がある奴だからな……。

とっ、クロノが動いたと言う事は……時間か。

「悪いがそろそろ時間だ。」

クロノの声に抱き合っていた2人は離れる。

「うん」

「フェイトちゃん！」

離れた後になのはは自身の髪留めを徐に外し始める。そして、外し終えた髪留めを差し出す。

「フェイトちゃん、思い出に出来そうな物こんな物だけど……」

「それなら私も。」

そして、そんななのはを見たフェイトも自身の髪留めを外す。そしてなのはと同じ様に差し出してそれぞれの髪留めの交換をした。

「ありがとう、なのは、戒さん。」

「うん、フェイトちゃん。」

『俺はフェイトに家族の幸せを味わって欲しかっただけだ……。』

「それでも、ありがとう。」

『取り敢えず、受け取っておく。そうだ、フェイトに渡す物があったな…。少し目を閉じてくれな？』

「え？うん。」

戒の言葉に不思議がるフェイトだが次の瞬間に首に何か掛けられたのを感じる

『開けて良いぞ。』

「……これは？」

『フェイトの魔力色（カラー）の金色を宝石で表して見たんだ。形はＢＤと同じ形だが立派な首飾りだからな？』

「ありがとう、戒さん。この首飾り大事にするね。」

『あぁ。』

「あ、あの御礼をしたいので少し同い年の姿に戻るか、屈んでもらえますか？」

『なら、ちょっと待て……これで良い……』

かと続けようとしたがその先はフェイトの口付けに…キスにより遮られた

『なっ「あぁーーー！フェイトちゃん、ズルいの！私もまだなのに！」その言葉はどうかと思うぞなのはｕ』

「……母さんと姉さんを助けてくれた事とえと、その……ペンダントの御礼だから／／／／／／／／／／」

『誰にそんな事を吹き込まれた？』

「あの、別にアルフが戒が喜ぶかもって言った訳じゃ…『そうか、

アルフか……』…あぅ？」

「ちょっ、戒落ち着いてくれよ？」

『問答無用！其処になおれ！！』

「戒君（お兄ちゃん）落ち着いて？」

「時間が無いの『少し待ってろ』だがu」

「ちょっ！頭がメキメキ言ってるよ！？」

『砕けていないから大丈夫だろ？』

「そう言う問題じゃ……アァーーーー！！！！」

その後も暫くの間戒はアルフに対して高町流のO☆HA☆NA☆SHIをしていたがクロノがイジケ始めて来たのとアルフが目を回したので解放をする戒……

「それじゃあ、僕達はアースラに戻るよ。」

「なのは、また。」

「フェイトちゃん、またね。」

「なのはもユーノも元気でね？」

「アルフさんも」

『フェイトに変な事を吹き込むなよ…？』

「解ったからドスの入った声で言わないでくれよ？」

「戒、アリシアの事をお願いね？そして、家族として始められる事に御礼を言うわ。」

『俺はフェイトの望んだ事を最高な形にしたまでだが？』

「それでもよ。アリシアだけじゃないフェイトと家族としてやり直せる機会をもらえたのだからね？」

『なら、素直に受け取っておく…。』

「なのはちゃん…だったかしら？」

「は、はい！」

「これからもフェイトやアリシアと仲良くして頂戴ね？」

「勿論です♪」

「ふふ、有難う。それじゃ、またね…なのはちゃん、戒。」

そしてそれぞれが別れの挨拶を交わしてクロノ達はアースラへと戻って行き、橋の上には戒達が残っていた。

『さて、俺達も戻ろうか…この後は学校なのだからな…？』

「うん！」

「わたしはもう少し居たいな……。」

『……なら、ギリギリまで居るか？帰りは転移すれば早いから……』

「うん。」

なのはが橋の向こうに広がる海を感慨深く眺めている横で俺とアリシアもその横で海を眺めていた。何処までも続くこの広大な海を……

『（物語は始まったばかり……俺はなのは達と敵対してでも彼女達を救う）アリシア、そろそろ学校に行くぞ。』

「うん。」

『（はやてとの接触にグレアムの計画阻止に夜天の書の修復、そして……ロキの残した魔物の掃討…か。問題はまだまだ残っているが……）やるしかないな…あの光景は悲しすぎるからな……』

「お兄ちゃん、早くなのはちゃんの所に行くよ～？」

『あぁ、解ったからそんなに急ぐなってυ』

あれから暫くしてなのは達と一旦別れてから、戒とアリシアは翠屋の隣に建てられた普通より少しデカい一軒家（月村家による建設で

二階建ての物）に帰ってから学校に行く為にアリシアと一緒に家を出るのであった。その後の問題を抱えて、戒は一時の日常に戻る

無印編最終回　名前を呼べば良いと思う（後書き）

「無印編完結だーー！！！！」

『なんともまぁ微妙な終わり方だったな…？』

「そこは気にしないでくれ？」

『次回からの話は決まっているのか？』

「取り敢えず、無印編の番外編をやりつつ、A，S編の構想の思案と他作品の執筆かな？」

『まぁ、最初の作品を完結させないとだな…。しかし、俺が言うのも何だが使い回しはあまり好まれない傾向があるが他のキャラを考える事はしないのか？』

「それは、結局の所考えたのだがお前の能力と被る事が多くてな…。諦めた！」

『あっさりだなおいυ』

「別に良いだろが（、ｏ、）」

『次回は学校での俺の日常風景になるようだ……学校でも騒がしい1日になりそうだな…。』

「ま、大丈夫だろ？それではまた次の話で♪」

番外編　学校での1日

―――黒逸家　アリシアの部屋―――

『アリシア、そろそろ朝だから起きろよ。』

「あと五分だけ～～。」

『まったく俺は朝食の準備をするからな？』

『今日の献立は御飯に鯵（あじ）の干物に味噌汁で白菜と胡瓜（きゅうり）の漬け物だな…。そろそろアリシアが起きて来る頃合いかな…。』

「お義兄ちゃん、おはよー。」

『おはようアリシア、髪を梳いてやるから、顔を洗って来い…。その後に朝食にするからな？』

「はーい♪」

俺の朝は先ず４時からの町内ランニングから始まり家の裏では剣術の鍛錬に魔法技術の応用等を６時までに全てをこなしてシャワーで汗を流し、其処からは朝食を作る前に一度アリシアに声を掛けてから行う物だ。

『忘れ物は無いな？』

「うん♪」

『それじゃ、行ってきます…。』

「行ってきまーす♪」

誰も家には残らないがそれでも挨拶の習慣を怠らない様に心掛けて
2人は挨拶をしてから鍵を掛けてから家を出る

「あら♪戒君にアリシアちゃんおはよう♪」

「なのはちゃんのお母さん、おはよーございます♪」

『桃子さん、おはよう御座います…。なのははまだですか？』

「ちょっと待っててね？なのはーー！戒君達が来たわよーー！」

「にゃあああーー！？待ってよーー？」

桃子さんの掛け声は俺達の中でも恒例となりつつある高町家の朝は
いつも通りの賑やかの朝の様だな……

『まったく、お前はもう少し落ち着いて行動が出来んのか？』

「戒君が急かすからだよ～！それにしても戒君は今日は何時もよりも早いよね？どうしてなの？」

『今日はアリシアの転校初日なのだからな…。』

「そっか♪今日からアリシアちゃんもなのは達と一緒に学校に通うんだ♪」

「うん！後はお義兄ちゃんと一緒のクラスになると良いな～～」

『それは流石に無理かも知れんぞ？兄弟姉妹を一緒にする事は稀だが、職員の奴とＯＨＡＮＡＳＨＩでもするか？』

「戒君、ニュアンスが違う様に聞こえるよ」

『……キノセイダ、キニスルコトハナイ。』

「お義兄ちゃん、バスが来たよ。」

アリシアの言葉にバスに乗り込んで既に定位置となっている一番後ろの後部座席に行くとアリサとすずかが此方に向かって挨拶をして来る

「戒、なのは、おはよう！」

「戒君、なのはちゃん、おはよう♪」

「アリサちゃん、すずかちゃん、おはようなの！」

「なのはちゃん、その子は？」

「この子は戒君の義妹のアリシアちゃんだよ♪」

「アリシア・T（テスタロッサ）・クロイツです。宜しくお願いします♪」

「戒君の妹なんだ…」

「初耳だわね？」

『実際に血縁関係では無くちょっとした諸事情により、義理の妹になるな……。』

「へぇ…諸事情ねぇ～？」

「戒君の事だから大丈夫だよアリサちゃん。わたしは月村すずか宜しくね？アリシアちゃん。」

「まっ、戒だからしょうがないちゃっしょうがないわね…あたしはアリサ・バニングスよ。宜しくアリシア。」

「バニングスさんに月村さん、此方こそ宜しくお願いします♪」

『俺だからってどういう意味だ？』

「にゃははυ」

戒の言葉になのはは苦笑いするしかなかった。その後は他愛ない話をして直通バスで学校まで向かい、戒とアリシアは職員室に向かう為になのは達と別れるのであった

『失礼します。』

「失礼します♪」

「黒逸、その子がお前の妹さんか？」

「アリシア・T・クロイツです！」

「ふむ、お前とは違ってに礼儀正しい妹だな…。」

『失礼だな、その言い方だと俺が礼儀正しい事をしていないようではないか？杉下先生？』

杉下清次郎、聖祥に来たばかりの俺達の担任だが、性格、容姿共にあかね色の杉下なのだが物凄い違和感があるがこの世界は普通の世界とは違う事を再認識するしか無いな……

ーーーーー教室内ーーーーー

『久しぶりの学校だな…。』

「……そうね。来なかった間の話をゆっくりと聞けそうね…？」

「ニャハハ、戒君頑張って？」

『今から早退するか…υ』

「だダメだよ？」

『冗談だ……アリシアの事もあるから早退をする訳にはいかんだろ……。』

「そのアリシアって「全員席に着けよー！」もぅ？後で聞かせて貰うからね…。」

『解ったよ。』

「ふむ…全員出席してるな…？連絡事項は特に無いが……このクラスに転校生が来るぞ！」

「誰ですか？！」

「可愛い女子か？！」

「やっと俺にも……！」

『騒がしい奴らだな……消スカ？』

「それはダメだよー？」

「静かにしろ！！まったく男子の奴らは少しは自重しろよ……入って来て良いぞ！」

「失礼しまーす♪」

杉下の声の後にアリシアが教室の引き戸を開けて教壇の前まで歩いて行く。その姿に先程まで騒いでいた男子ですら大人しくなる程であった……

「それじゃ、自己紹介をしてくれ。」

「はい！私の名前はアリシア・T・クロイツです♪来たばかりで解らない事も多いので色々と教えて下さい♪」

「「ウオォォォォ！！！」」

「静かにしねぇと埋メルぞ！！」

アリシアのそんな言葉に再び教室が騒がしくなるがそこは杉下清司郎で一喝して教室を静かにさせるが小学生に言う言葉では無かった

「さて、アリシアの席は……そうだな、一番後ろの席で戒の隣だな。」

「はい♪」

（だから俺の隣に席があったのかυ）

「宜しくね？お義兄ちゃん♪」

『まっ、解らない事があったら言うんだぞ？』

「うん♪」

「さて、最初の授業だが転校生が気になって仕方ないだろうから質問タイムとするが「「ワァァァァ！！」」……静かにしろと言ってんだろうが馬鹿共が！！！」

「アリシアちゃんは黒逸と髪や目とか同じだけど兄弟か何かなの？名字も同じだし……」

「違うけど違わないよ～？」

『それじゃあ解らないだろうがυ』

「黒逸君は何か知ってるの？」

『家庭の事情と言う奴で義理になるが兄貴をしてる…。』

「お兄様と呼ばせて下さい！！」

「羨ましすぎるぞ！この野郎！こんな美少女の兄貴なんて…！！」

「リア充は爆死しろ」

『……コロスゾ？キサマラ…』

「か、戒君が怖いの？」

「戒！少しは落ち着きなさい！！そこの馬鹿男子共もよ！！！」

質問タイムと言われた時間はそんなに問題なく終わったとは言えなかったがその時間だけで戒のいるクラスの男子の４割が保健室にお世話になったのは言うまでもなかった

ーーーー昼休み屋上ーーーーー

「まったく家庭の事情ならそう言いなさいよね？」

「私はお姉ちゃんから聞いて知ってたよ？」

「どういう事よそれ！」

『いや…アリサにも話そうかと思ったが学校にくれば話すだろうから先に忍さんに連絡をしたんだ…家の事もあったからな…。』

「家？」

『あぁ、アリシアの事もあるがいつまでもなのはの家に居候と言う

訳にもいかないからな…。忍さんはかなり力を入れてくれてかなり立派な物が出来たな…。』

「なら今度の休みは戒の家にすずかと一緒に行こうかしら…。」

『まぁ、用事もないし良いぞ？』

「なら決まりね！」

「戒君ごめんね？」

『友達を家に上げるのに遠慮などいらないぞ？』

「ニャハハ？」

「「友達……ハァυ」」

「どうしたの皆？」

「アリシアちゃんは後で解ると思うよ…。」

『何を溜め息を吐いているんだ？』

「アンタの所為でしょうが！！！」

そして昼休みも終わり残りの授業が滞りなく終わり放課後を迎える

「お義兄ちゃん、学校って楽しいね♪」

『アリシアが楽しいのならそれで構わないさ…。』

「アンタは素っ気ないわね…。」

『仕方ないだろ？今の授業は簡単すぎるし運動も力を制限しないと小学生とは違いすぎるから程々にして置かないと大変だからな…。』

「戒君は大変だね？」

『すずかやアリサ程でもないさ…誘拐されるお嬢様なんてそうそういないからな（笑）』

「なんかムカつくわね？」

「でもそれがなかったら戒君と会う事はなかったんだから言い方は変だけど誘拐犯の人には感謝しなきゃだね？」

「すずかの言い方は多少問題ありだけど激しく同意するわ…。」

『あんな会い方は中々お目にかかる事は無いと思うぞ？……あの校門前のリムジンはアリサの所の執事の人じゃ無いのか？……確か鮫島さんだったか？』

「あっ！今日は塾だったわ！行くわよすずか！」

「あっ！待ってアリサちゃん！それじゃあなのはちゃん、戒君にアリシアちゃんまた明日ね？」

『気を付けてな？』

「またね、すずかちゃん！」

「また明日ねー♪」

そしてアリサ達と別れてから家までの帰り道をなのは達の3人は他愛も無い話をしながら翠屋まであっという間に着いてしまった

「それじゃあまた明日ね？」

『寝坊はするなよ？』

「なのはちゃんは寝坊助さんだからねー？（笑）」

「うぅ～、なのは寝坊助じゃないもん！（怒）」

『……それじゃ、また明日な。』

「うん…。また明日。」

そしてなのはと翠屋の前で別れて戒とアリシアは直ぐ隣に建てた一

軒家に帰宅するのであった

「お義兄ちゃん、お休み〜〜ｚｚＺ」

『お休み…アリシア。』

俺達は帰宅して風呂に入り食事をした後、明日の支度をし今は２人で使っている寝室でキングサイズのベッドでアリシアと俺は隣同士で横になり、アリシアは言うが早くも直ぐに夢の中に入ってしまったアリシアが穏やかな顔で静かな寝息を上げている。以前まで培養ポッドにいて社会的なルールを知らないからこの一週間で１から教えるのには苦労したな…ｕまぁ、そのお陰か一般的な事は一通り覚えてくれて安心だな…。

『良い明日になると良いな…。』

俺は明日の事を思いながら意識を闇に落とすのであった。

番外編　学校での1日（後書き）

ご指摘やご感想、又はリクエスト等がありましたら御願いします。

序章　月の夜の守護騎士達との遭遇

『今日も最悪な1日だったな…だが幸いな事はロキが魔族を海鳴市周辺にのみ放っていた事だけ…か。今日潰したのは人型に鳥型……結界…か』

その瞬間、戒はアルカインをＢＪ（バリアジャケット）として展開しつつ手には片刃の長剣を持ち家を出る

『狙いは……なのはか？それとも……俺が狙いなのか？剣士さん』

「気付いていたか」

戒の言葉に従って空からゆっくりと桃色の長髪をポニーテールにし、西洋風の鎧に身を包んだ女性が降りてきた。その瞳は鋭く、研ぎ澄まされた刃を思わせる

『常に気配には機敏なものでな』

「そうか」

『で、俺に何か用かな？名も無き襲撃者さん』

「済まないがお前の魔力を貰い受ける」

『魔力を？目的は……って聞くまでも無いか。この手の人種はお構い無しだからな』

「問答は無用、悪く思うな」

『俺は疲れてるってのにな、黒逸戒推して参る！！！』

「……」

そして、両者は同時に駆ける

“ガキンッ！！”

「ほぅ、なかなかの太刀筋だな」

『褒めたからって手抜きなんて期待するなよ？』

「その様な物を望むものか！

レヴァンティン！！！」

《Ｓｈｕｒａｎｇｅｆｏｒｍ》

女性がデバイスと見られる物に呼び掛けるとデバイスが電子音声で応えると女性は鍔迫り合いの中を力任せに振るって戒を引き離すとその振るった勢いのままに片刃の剣を振るう。振るわれた剣は刀身の部分のみが離れ、戒を襲う。戒は躱しながら刃と刃の間には糸の様な物が見る

『……連結刃？変形機構でも備わっているのか？』

「はっ！」

《Ｓｈｕｂｅｌｔｆｏｒｍ》

「飛竜一閃！」

『ハァ、これ以上やっても同じ様に返すか。魔神剣！更に、魔神剣・双牙！』

女性は連結刃を戻すと長剣を振るい、炎の剣圧を飛ばすが、戒はただの剣圧で相殺するのと同時に相手の横に回り込む様にして剣圧を飛ばす

「クッ！奴は……」

女性は剣圧を躱す為に後ろに下がり、戒を探す。

『その避け方は悪手だな…』

「なッ！？」

『暫く寝ていろ』

何時の間にか女性の背後に移動した戒の手刀により意識を一瞬で意識を刈り取る

「な…この私が…」

『っと！……さて、彼女達と顔合わせをするかな……その前に』

戒は一瞬で青年期になると倒れる女性を抱き止め、脇に抱えて何も

無い空間から顔の大半を隠す様な仮面……シンクが使っていた仮面を投影で出して被る

『後は服装か？』

更に衣服をＴＯＳの時に着ていた物に投影で変えて女性を脇に抱えて転移魔法で結界の中心部に向かった。

――――――――――――――――――――――――

『間に合ったか』

「シグナム！？」

『そう叫ぶな、気絶しているだけだ』

「あなた…は…」

戒が転移したビルの一角、其処にいたのは若草色の修道服に似た服装にベレー帽の様な物を被った金髪をボブカットにした女性
その女性は戒の脇に抱えられるシグナムと呼ばれた女性を見て驚き、警戒をする

『そう警戒するな、助けに来ただけだ』

「助け…に？」

警戒をする女性に苦笑しながらそう告げると怪訝な表情（かお）をする

『取り敢えず転移の準備をしておけ、赤いのを回収したら合図をするからその瞬間に転移魔法を使え』

「ま、待って！」

『なんだ』

「アナタは何故、私達の」

『理由はお前達と同じ……なのかもしれん』

「え！？」

『……抜かるなよ』

驚く女性を傍目にしながら戒は長剣のストレージデバイスを握り、転移魔法を使用した。

『……済まぬ、遅れてしまった』

「なッ！？」

「テメェ……何者だ？」

『……』

空中で四肢を拘束された赤を基調としたゴスロリ服を着た少女の真横に出ると少女と金髪をツインテールにし黒いバリアジャケットに

身を包んだフェイト、それに付き添いの形でいるアルフ、その眼下にはビルの中でバリアの中にいるボロボロな格好のなのはにユーノが回復魔法を掛けていた

「フェイト、アイツ……ただ者じゃないよ」

「そうだね……敵か味方か解らないが君は何者だ？」

『彼女の味方と言った所だ』

「目的は『我が来た理由は現状で解らぬか？』…くっ！アルフ！」

「あいよ！」

『無駄な事を…“雷の斧”』

「うぁッ！」

「キャァァァッ！」

戒がフェイト達に呟きながら腕を振ると雷が落ちる2人はいきなり襲った雷に悲鳴をあげながら落下した

「な、なんだ！って、アレ？」

『こんな簡単な術式では時間は差ほど掛からぬな……さて、合図を出すか……“ライトニングブレイカー”！』

少女はそれに驚くが戒はそんな事は構わずに片手を空に掲げ、瞬く間にその掲げた掌に高魔力が収束し、紫電を纏った黒い極太の砲撃

が放たれ、結界を破壊しながら空へと上る

『さて、戻るか』

「ちょっ、待てよ」

『時間が惜しいのでな、それは却下だ』

そう言った戒は少女を抱えると今度は転移ではなく探知されない様に空間移動（テレポート）で先程のビルの一角に移動した

「ヴィータ！」

「シグナム！？」

「さっき目を覚ました所よ」

『それなりに入れた積もりだったがやはりベルカの騎士は違うのだな』

「「！？」」

「テメェ、なんでそんな事を知ってんだ！」

戒の発した言葉に過敏な反応をする2人の女性と少女

『なんで…とは、またおかしな事を』

「おかしな事？私達は貴方の事を知りません。それに貴方が私達の

事を知っている事が不自然なんです」

『なる程、言い忘れていたな…。答えは簡単だ。俺は過去の君達を【視て】知っている』

「「は？」」

「見て、ですか？」

『ニュアンスが違う、俺の能力（スキル）……で世界記録（ワールドスコア）を視て詠んだに過ぎない。実体験は無いが世界に刻まれた記憶を詠む事で知る事が出来た訳だ。勿論、古代ベルカ大戦の事も聖王や覇王の闘いも記憶に残っている』

「……それが本当ならとんでもない能力ですね。それで貴方は……えと、お名前を聞いても？」

『……ジューダスとでも呼んでくれ』

「ジューダス？変な名前だな…」

「ヴィータ」

『気にするな、この名前は俺の業…そのものだ。それよりも……薄汚く醜悪な魔力…いるようだな』

「え？」

『そこ！』

「グギャァァァァ！！！」

「「な！？」」

戒が何も無い空間にナイフを投影し、投擲すると異形の物が姿を現した。それに対してシグナムとヴィータが驚愕の声を上げる

『こんな時に、面倒臭い……散れ！粉塵裂破衝！！まだだ！露と消えろ！！浄破滅焼闇！闇の炎に抱かれて消えろ！！』

戒がシャルをその手に顕現化し、もう片方には長剣のデバイスを握り、一息で肉薄する。

初撃は剣の切っ先同士を擦り合わせて小規模の爆発を起こし、続けざまにその剣に闇の炎を纏わせた秘奥技…浄破滅焼闇（じょうはめっしょうえん）を用いて文字通りに異形の物を滅した

『これで話しやすくなったな。その魔道書で俺の魔力を蒐集しろ』

「な、何を言っている！」

『言葉だけの協力では無い事を示すだけだ』

「で、でも！」

『出来ぬのなら貸せ』

「あっ！？」

「待っ『闇の書…魔力蒐集開始』

《リンカーコアの蒐集を開始します》

『クッ！（魔力の抜ける感覚は存外にキツい物だな）……どう…だ…？』

「す、凄いです！５０Ｐは埋まりましたよ！」

「５０Ｐ！？」「現在までのと合わせると既に１００Ｐは埋まった訳か」

『これ…で…しょ…う…めいに……』

そのまま倒れる戒をシグナムが支える

『……済まない』

「協力をしてくれる者は支える物だ」

『そう…か』

支えられたまま戒は意識を失う

「シグナム、そいつはどうすんだよ？」

「主はやてに意見を仰ぐ」

「はやてちゃんに？」

「あぁ、伊達や酔狂だけで自身を蒐集する事など出来ないからな。

シャマル、ランダム転移をして帰還するぞ」

そう言って変身が解けた戒をシグナムが抱くとシャマルと呼ばれた女性は戒を含め、４人がビルの一角から姿を消した。

序章　月の夜の守護騎士達との遭遇（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8997p/

少年の異世界戦記 ～魔法少女リリカルなのは編～

2012年1月6日01時47分発行